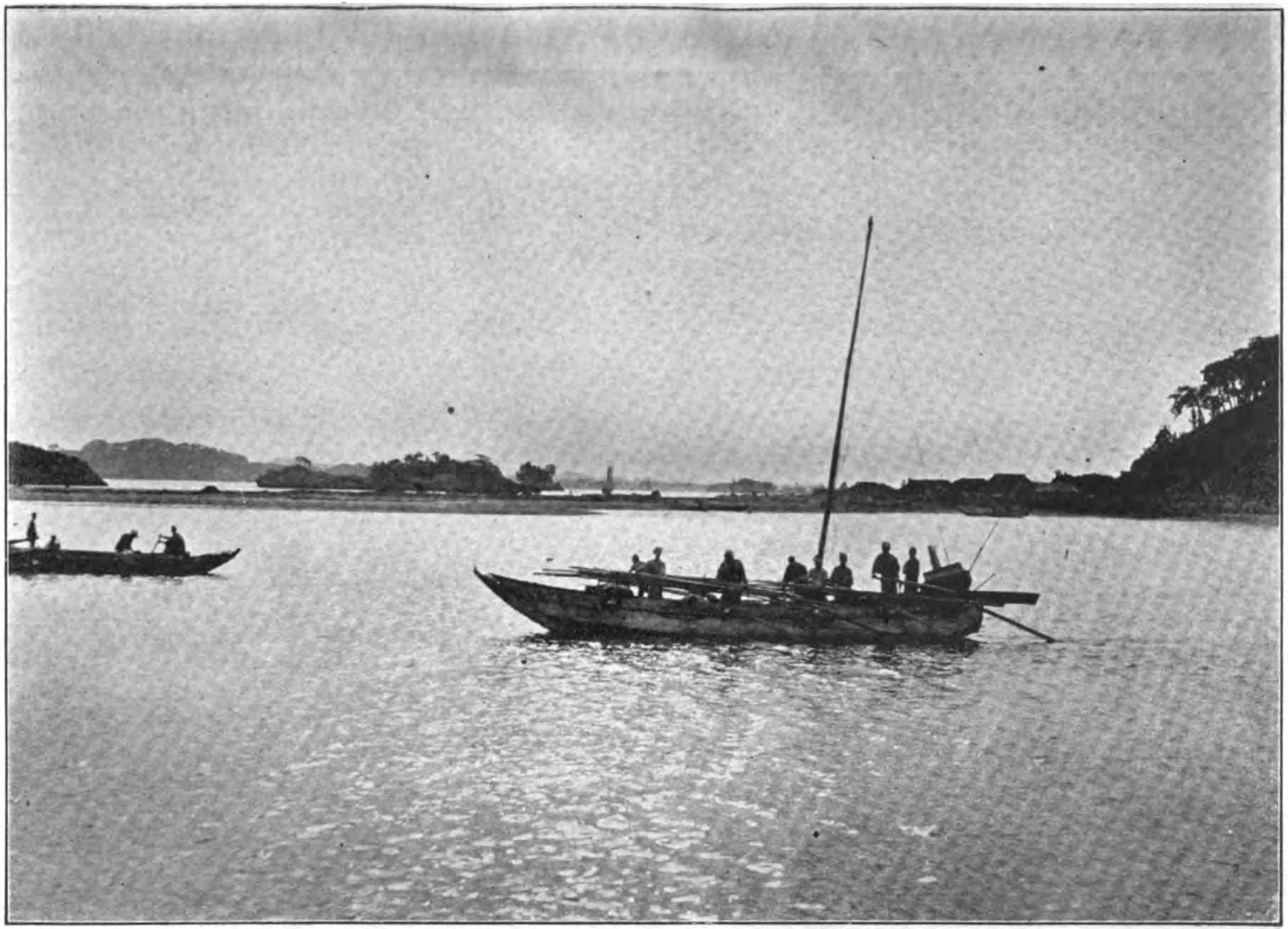
# 中央公論

本號目次



銚子の波影

中央公論 第十九年第八號

中央公論

# 正しき信念ある政治家の出現

何にても一と角の事を成し遂ぐるものは異常の人なり、偉き人なり、他は目して陋劣なりといふも、非道なりといふも、一切の悪名を負うも、二度や三度は刑獄の囚人となり、破廉恥の罪を犯したることあるも、兎も角も斯る難關を切り拔けて、遂に事を成し遂げ得たらんにはこれ異常の人なり、偉き人なりとは、恐くは今日多數の日本人が有する所の處世上の見解ならん。道徳も宗教も常に斯る人によりて論議せられ、理解せられ、嘲笑せられ、而してまた指斥せらる。

斯くの如き社會には、固より制裁力なるもの丶存する理由あるべからず。社會の制裁力なるものは、社會に良心ありて始めて行はる丶ことを得べし、社會は勿論個人の聚合する所に外ならずと雖、また其の聚合團躰は、一の有機的活物として觀ぜらる。されば箇人に道徳的機能あるが如く、社會なる活物にも亦自ら道徳的機能の存するあるを見る、名けて之を社會の良心といふべし。蓋し健全なる社會の良心は、健全なる常識の發達によりて始めて生じ來るものにして、常識の不健全にして、且つ統一なき間は、社會に良心の存すべき理なし。是の故に斯る社會には、道徳的秩序なく、やがて眞の生命なく、唯器械的なる法律的秩序によりて其の結合の漸く維持せらる丶あるのみ。法律的社會は一切の制裁を單に法律に依頼するのみにして、世に所謂社會制裁、即ち社會の道徳的制裁は、固よりこれあることを得べからず。何となれば、社會の道徳的制裁は、社會の良心、即ち道徳的機能の存するによりて始めて出で來るべきものなればなり。

既に社會に制裁力なるもの丶存するなきがため、社會は箇人の道徳的行爲に關する價値を認めずして、常に唯一と角の事を仕遂ぐると否とによりて直に人格の價値を批判す、而して敢て其の道徳的なると、將た不徳のことたるとは初より之を顧みざるなり。

昔時徳川氏の時代に於ては、穢多を以て之を人間と目

せざりき、されぱたとひ穢多にして如何に財力の富有なるものあるも、誰人も面目を重んずるものは、之と言語を交へんことを避けんとせざるものはあらざりき。今日より之を見れば、まことにこれ不當のことにして、穢多と雖人間たるに於て、賦性權能に何等の階級を設くべきものにあらざるは論を俟たず。然れども斯くの如き階級區別は、今日と雖或る場合に於ては、甚だ必要なるものあり。即ち如何に一と角の事を仕遂げて、位地は高く、富は饒なりとも、其の仕遂げし方法次第の如何によりては、士人の面目を重ずるものは此等の徒と言語を交ふるの陋をすら耻づるの[illegible]なかるべからず、況んや之に向つて低頭平身して、其の名の揚がらんことと利の獲られんことを望まんとするをや。他語にていへば、穢多と士人との區別は、人其の物の上に本來存するにあらずといへども、道德的標準の上には、嚴格に此の區別の存することを認めざるべからず。例へば今日我國の富豪と稱するものも、多くは身を一寒生の間に起し、東奔西馳、人情を缺き、虛構を畫し、以て事の成るを過渡の時代に僥倖し、遂に今日あるを致したるもの決して一二にあらずと聞く。而して彼等は今日に至り、自ら富豪を以て居り、酒を飲み、色を漁し、身を處し家を治むるに於て放漫至らざるなく、一旦利を占むるの機あるに於ては、能く巧みに法律の制裁を避けて、以て惡德をなすこと千端萬端なり。然れ共社會は皆曰ふ、彼は惡るき奴なり、然し兎も角も偉い奴なりと。

學校に於て敎ふる所謂敎育家の倫理といへるものほど、世に迂なるものはなかるべし。敎育上の倫理は、たとひ今日は死せる形式的のものにて、甚だ笑ふべきものに屬すと雖、兎も角も其の言ひ前は立派なるものなり。然れ共若し敎育を受くるものにして、正直に其の敎を奉じ、其の主義を守りて社會に働かんとするものあらば、斯る人は遂に一生貧乏を喞ち、社會に見捨てられ、嘲けられ、唯不遇の嘆聲を發して生涯を終るの外あるべからず。人は富貴功名を目的とすべきものにあらずとはいふ條、さりとて貧乏が能にもあらざるべし。一身一家が社會に立ちて、家庭の相當の樂しみを經營する丈のことは、人として當り前に受けんこと誰人にもありたきことにあらずや。然し一と角の事を仕遂ぐるを以て偉しとなすの社會は、人格の價値を道德の上に見ざる社會は決して斯る迂なる有り難き德者を容るゝの餘地はなきなり。敎ふる敎員も敎へらるゝ

生徒も、よく學校倫理を以て世に活くべしとは思はさるべし。世に捨てられて清貧なるを貴しとするものあらば、そはなほ上乘の人ならくのみ。善い哉瓜の蔓には茄子のならぬ道理、今の學生は時代相應に堕落しつゝあり、退いて清貧を守らんとする愚人もなく、進んで道徳と社會に情死せんとする迂人もなきなり。今の學校道徳は畢竟何のために說かるゝや。

一と角の事を仕遂げたるものを偉しといふは、必ずしも悪しゝとはいふべからず。然れ共余は此の場合に於て「兎も角も」といへる制限の詞を要せずと思ふなり。若し「兎も角も」といへる制限の詞を要すといふもののある時は、そは必ず偉からぬ證なり。彼は悪人なり然れども一と角の事を仕遂げたるが故に偉しといふ、これ不可なり。何となれば一と角の事を仕遂げしもの皆偉きにあらず、仕遂ぐるもの凡そ次第といふ事あればなり。偉きと偉からぬとは、其の所謂次第なるものに存す。

近時故星亨氏に對する世論如何にも紛々たり、而して其多くは彼は悪人なりき、されど兎も角偉き人なりしと云ふが如し。

然れども仔細に見來れば彼が一生は「兎も角も」と云へる制限の上に超出せる一偉人たりしを余は信ずるなり、彼は盛んに賄賂を受授して政界の腐敗を增長したる一大奸人の如くなりし、彼は市政を紊亂したる悪魔の如くなりし、さりながら今日の社會は彼れに向て道德的標準の上に區別をなして士人と穢多との如き感想を抱くの大に誤まれるを信ず。

事を仕遂ぐるといふのも次第あり、左顧右眄狡猾にして事を仕遂ぐるものあり、僥倖なり。其の爲す所其の時に適恰し、事毎に圖に當りて事を仕遂ぐるものあり、天運なり。譎詐奸佞、弱を仆し愚を欺き、貧を併せ小を吞み、以て事を仕遂ぐるものあり、悪運なり。これらを指して何と云つても偉いものだといふは、其の結果に驚き、其の門戶高く、其の族富み、其の徒多く、其の事美なるに駭きて言ふなり。所謂兎も角も偉きものなり。星氏果して此の類なるべきか、我は信ぜず。

近時一新誌を見る。其の星氏を評するの言に曰く、星氏は惜哉宗教的信念を有せざりき、故に其の行は彼れの如く、以て終に身を殺すの不幸を見るに至れりと。此の言果して信ずべきか。

星氏を以て信念なかりしものといふは言ふもの丶誤謬なり。成程彼は特殊の宗教を信ぜざりき。佛教的信念

を有せりといふべからず、基督教的信念を有せりと言ふべからず、しかも是の故に、彼に信念なかりしといふは、所謂特殊宗教の上にのみ、信念存すと思惟せる僻見に過ぎず。始めて衆議院の議長として傲岸の名を博してより、數年間の彼れの經營の跡を見るに、皆確然として一定の路程を歩めり。思ふに其の政界に重きをなしたる所以のものは、種々の巧智與りて力あるべしと雖、しかも衆の彼に懾れたる所は、其傲岸の點にあり、斷じて行ふの點にあり、而して之を行はんとするや、手段の如何を選ばざる點にあり、壯士によりて腕力を利用せんとしき、賄賂によりて黄金を利用せんとしき、而して其の能く斯くありし所以のものは何ぞや、彼に動かすべからざる信念ありたればなり。彼れが事を仕遂げしは一の信念の上に立ち、驀直に理想に突進せんとして、其の手段の如何を顧慮せざりしによる。彼は其の理想に進まんがためには、多少の惡事を敢てなせり。其の所謂理想とは何ぞや、余は思ふ、純然たる政黨内閣を組織し、自ら其の首位に立ちて、自己の意見を行はんとするにありしならんと。

或は曰ふものあり、星氏近時稍其の行ひに悔ゆる所ありしもの丶如くなりしと、余は之を信ぜず。若し氏にして目的のためには手段を顧みずとの主義に立ち、堂々として精神の全力を擧げ、理想に向ひ直前したりしものならんには、彼は毫も之を悔ゆといふの理あるべからず。若し信念といへるものにして、精神の全躰が調和統一して、生活を指導する活力たり、人間性格の基礎をなすものなりと言はゞ星氏は確に信念ある政治家たるを失はじ、是れ余が氏を偉しといふ所以にして、兎も角もの四字を要せず、實に偉しといふ所以也。

信念ある人の行動が、常に淺薄なる偏論、一徹なる保守的道德者のために誤認せらる丶は、古來有り勝のことなり。釋迦は婆羅門教徒のために耆舊宿德を蔑如するものとして罵られ、基督は猶太教徒のために十字架につけらる丶を免れず。而して孔子は陳蔡の野に飢え、ソークラテースはアゼンスの獄中に死す。古來の聖賢なほ然り、况んや星氏の如き目的のためには手段の善惡を顧みざるの危道によりしものをや。彼は信念あるがために、信念なき社會に容れられず、而して其の倫理主義は、習慣上の國民道德に背反して進めり、これ遂に刺客の難にかゝりし所以ならずんばあらず。

星氏の生活を兩面より觀察するに、其の一箇人としての私德は、決して之を泰西の紳士の行動として、耻か

らぬものたりしとは人の多く信ずる所たり。而して其の公生活、即ち政治的の生活は、唯人の疾惡の原因をなせるものゝみなりき。蓋し共に一の信念に出でたるもの、斯く徹底の觀を呈するは、即ち彼れの偉き所以を證するものにあらずや。

唯一の此に非難すべきものは、其の目的のために手段を擇ばざりし倫理主義（と見る）是なり。然れどもこれ亦深く尤むるに足らず。何となれば、彼は學校道德によりて社會に活きんとしたるものにあらず、金を與へざれば今の政客の動かざるとを知り、迂なる倫理主義は、彼れの理想の遂行を妨害するものたるを知りたればなり。他語にて言へば、氏は實に時代の權化なり、社會既に眞心なく、道德的機能なく、箇人に健全なる道德的常識の未だ明に現はれざるに當り、自ら一箇の主義を樹立し、一定の信念の上に立ち、以て其の政治的生活を營まんとしたる氏が、遂に時代精神の高潮に達したる產物たりしに過ぎざるは、また已むを得ずといふべし。星亨氏の倫理主義は、今日の社會に取りてはなほ蓋し立派過ぎたるものといふべし。我は星亨氏の崇拜者也。

今の政治家、多く信念の何たるを解せず、其の主義を遂行するは、八方美人の臨機變に應ずる底の乃公の手段にありとなし、言宗教のことに及べば思へらく、愚夫愚婦のことのみと、而して遂に能く頭を一傲岸書生の前に擧ぐる能はず。

我は星亨氏を論じたる最後に於てこゝに二條の訓戒を得たり。曰く、政治上の主義を遂行し其の理想を實現せんには信念ある政治家の出現を要求する事。曰く、一方に於ては箇人に、正しき信念を與へんがため、一方に於ては生活に直接なる社會の道德的常識を養はんがため、宗教家と教育家との協力を要する事。

（黃洋）

# 人物の地方移住

紅塵十丈の帝都を去て、山緑に水青き地方に入るもの誰か神氣の爽然を感ぜざるものあらん。地方の衛生上都會に勝れることは何人も之を拒否する能はざるのみならず、精神の健康を保つに於ても亦大なる利益を有するは尤も見易きの理なり。

都會は名譽、富貴、虛榮、虛飾あらゆる慾情あらゆる希望の戰場として人心を動かすこと莫大にして從て腐敗

墮落の氣を以て充實すれども、地方は名譽を爭ひ、富貴を衒ふの機會比較上太だ稀なる上に、交通往來の便未だ大に開けず、人に接することも都會の如く繁からず、所謂文明の風に感染すること遲々たる丈け夫れ丈け剛健素朴の風を存して守一の氣象強く、都人士より見れば野風滿面、素より間拔けたる田舍漢に相違わらずと雖も、地方に此氣象の存する間は一國の腐敗墮落は尙救治し得可き也。

然れども地方にして永く此氣象を有するや否やは疑問也、今日に於てこそ地方は交通尙不便にして万事都會に後れ勝ちとなり、從て文明の惡德に感染することも尙都會の如く太しからずと雖も、今や郵便電信の設殆んど整備し、鐵道線は縱橫に全國を貫通して地方亦舊時の地方に非ず、さなきだに今日に於てすら已に地方の腐敗墮落を絶叫するもの一にして足らざらんとす、況んや今後一國の進步開通愈盛んにして地方都會の間增近接し來るに當ては都會の腐敗墮落は滔々として地方を浸染し去らんとすべし、是に至て地方が地方として依然永く質朴剛健の舊風を維持せんことは到底難事に屬す。

而して更に又尤も悲しむ可き現象と稱す可きは地方が人物らしきものを次第に有せざるに至る是也。地方をして能く其剛健質實の氣風を振作せしめ、永く地方の元氣を失はざらしむるは自ら地方の先輩若くは有力の士人に待たざる可らず。吾國維新前に在り、多數の人物を輩出し、意氣を以て一世を震蕩したりし各藩を見るに薩長二州を始め卒ね先輩名士の勵策に出てざるものあらず、翻るに今日の各地方に於ては多少人物らしきものは相率て都會に移住し、亦地方を顧みるものなし、地方に殘るものは所謂人物の屑のみにして地方は唯都會の腐敗墮落を模倣して自ら得々たるに至る亦已むを得ざる所と云ふべし。

都會は一國の首腦なり、万機の依て發する所、政治の中心にして又實業の中軸たり、苟も身を立て志を成んとするものが靡然都門に出で横飛縱躍するは一國の爲め亦一身の爲め素より望む可き處にして今吾人が地方に人物なきを悲しむは是等有力の人士を抑留して漫に蓬藁の底に埋沒せしめんと云ふに非ず。唯都門に活動するもの愈多きを加ふると共に地方實力の涵養に從事するものも亦增多からんことを希ふ、是の如くして始めて地方否、一國健康の分子をして斷絶せしめざるを得可し。

吾人嘗て想ふ、人生を少年時代、壯年時代、老年時代に分ち、壯年時代のみ都會の生活に適し、其他は地方に生活するを可となすと、同一東京に住するものも活潑なる實業に從事するものは重に日本橋、京橋等の如き繁華の地に住せざるを得ざれとも學者若くは美術家其他比較上閑散なる業務に從ふものは自ら淸閑なる山の手邊を撰て居をトするが如く、壯年時代は人生の活動時代也、猶活潑なる實業に從事するものゝ如し、宜しく都會の風塵に飛躍すべしと云へども、尙中等敎育を受く可き中學時代の少年者の如き、又人生の過半を消し所謂功成り名遂けたる老年時代の人の如きは寧ろ地方の山水に餘生を樂しむを可となす。されば吾人は先づ維新の元勳と稱せらるゝものゝ多數を初めとして多少名を成し富を貯へたるの士が盛に地方に移住せんことを望まざる可らず。今日元勳と稱せらるゝものゝ伊藤山縣等二三氏を除却しては殆んど前代の人に屬し、死生共に政治上何等の影響をも生じ得ざるのみならず、全く社會の廢物と稱して可なり、而れとも是等の人にして若し地方に在らんか尙是れ一鄕の大先輩、一代の巨人にして彼等にして一の施爲する所なく唯其地に住すると云ふのみにても尙冥々の感化を其地方人士に及ぼすべし。況んや一擧手一投足の勞を吝しまず、地方の爲に何等かの悉す所あらんとするや其功蓋し大なるものあらん。而して彼等自身の身体上の健康に於ても亦其精神的快樂に於ても決して都塵煩累の間に居るに同じからず、爾らば彼等の地方移住は地方の爲に見るも亦彼等一身に見るも一擧兩全の策と云はざる可らざる也。而して是等元勳の徒に非ざるものも苟も名をなし功を遂けたる士にして簇々老を地方に養ふの習慣をなすに於ては幸にして地方の實力を枯渇せしめず、都會の腐敗に抗して聊か舊面目を保持するを得べし、都會の腐敗をして地方に入らざらしめんとするは今後素より期し得可き事に非ず、唯其腐敗に抗して地方の地方たる所以を失はざらしめんと欲するは地方出身の先輩有力者の涵養貯蓄に在りと云はざる可らず。

（千山）

# 時代思想の犠牲

林田春潮

眼を放つて、現代の社會を觀るに、人々たがひに我執の見を持して、相衝き相鬩くのありさま、まことに戰

場にも似たるかな。一代の精神、渾沌としていまだ定まらず。紛々たる雑多の小思想、おの／＼鋒を磨して他を排せんとす。試に曩日闘戰の跡について、兩々驅逐の狀を訪へば、矢折れ馬傷いて、流血原草を染むるの邊たり、累々たる伏屍、算を亂して所在に狼藉たるを見る。あゝ、これ弱者の遺骸也。吾人は、これを呼んで、時代思想の犧牲といふ。

それ、今の時は、主我思想の旺盛なる時也、言を換へていへば、主我的意識の度、はなはだ進みたる時代也。主我思想の旺盛なる時代は、その時代を擧げて、戰國化せしむるものにして、その社會、その國俗、こと／＼く平和の武裝を整へざるを得ざる精神的鬪戰の時代也。けだし、主我の期する所、自我を立するにあり。しかも、これを立せんとするや、もし途にこれを阻むものあらば、その目的を逹せんがためには、破して而して進まざるを得ず。しかれども、その破せらるゝものも、また實に主我也。こゝに於て、その間、衝突起らざるを得ず。それすでに衝突起る、いづくんぞ鬪戰なからんや。彼、我を殺さずんば、彼、我を殺さん、かくして、遂に弱者は、強者の制する所となる。この故に、主我時代の國俗は、みづから攻むるとともに、退いてまた、自ら衞らざるべからず。しかも、競爭の止むなきや、一日攻めざれば一日他に先んぜられ、時に守を弛べば、たちまちこれに乘ぜらる。憐むべきかな、今代の人、汲々として少時も寧處すること能はざる也。それ、かくの如く、今の時は主我相殺の時代也人心格鬪の時代也。社會はすなはち爭鬪の舞臺にして、個人は甲を冠せざるの武人。劍火砲聲、視聽を驚かすものなしといへども、凱歌は、常に社會の一隅に奏せられて、敗者の血は、至る所に流れつゝある也。誰か、今日の人心を以て平靜なりといふ、汝がエゴーの熱情は、絕えず胸奧に波だてるを聞かざるか。誰か、現代の世態を以て幸福なりといふ、彼が握手の前には、爛たる眼光の鋒に間を窺へるを見ざるか。あゝ、武裝的平和は政治上の套語にあらず、弱肉強食は、また進化上の法則にあらずして、現時の社會、現時の個人は、正しく、武裝的平和、弱肉強食の場に立てる也。

現代の風潮、かくの如し。この故に、道德意識は、すこぶる薄弱にして、少なくとも、他のために盡すといふの諸德は、蕩然として跡を收めたり。同情といひ、惻隱の心といひ、身を殺して仁をなすといふ。これらは、みな自家を捨てゝ、他のために盡すのいひ也。し

かれども、自我の經營に急なる時代は、決して、自家を措きて、他の救濟に盡すこと能はず、他を救濟せんとせば、すなはち先づ自我の經營を拋たざるを得ず、而して、自我の經營を拋つ時は、第三者にその間を乘ぜらるゝの虞あれば也。こゝに於て、もし他に、救濟せらるべき缺陷あらんか。これを救濟せざるのみならず、却つて、これに乘じて、自我を進めんとす。而して、道德的意識の薄弱は、ひとりこれら利他的諸德の欠乏に止らず、その他の諸德、またその效を失うて、自我競爭の資に利用せらる。けだし、我の起つて、他の境域を侵さんとするや、まづ、これを侵すの名なかるべからず。こゝに於て、道德の名を假つて、その慾望を掩ふの具となす。正義といひ、獨立といふ、唱ふるもの、必ずしも、これを信じ、これを實行するにあらず。たゞ、自家の劣情を掩はんがために、しばらくかりて、これを唱ふるのみ。けだし、眞に正義を愛し、獨立を尊ぶものは、決して、これを衒耀するとなし、これを衒耀するは、すなはち衒耀を要すべき弱點の存すれば也。この故に、その用、足りて、效すでに盡くるや、これを捨つること敝履の如く、而して轉じて、さらに他の名を藉らんとす。怪むことなかれ、さきに獨立を唱ふるもの、後に合同を唱へ、嘗て正義を標榜したるもの、今却つて非行を鳴らさるゝを。經典や。論語や、ボッブスやミルや、これら、悉く主我の利用する所となりて、その箴言的尊嚴は、空しく村學究の舌頭に存するに過ぎず。こゝに至つて、道德の效力は、ほとんど絕無に歸すといふべし。且つそれ、今の時は、倫理の準標、いまだ定らずして、國俗、その適歸する所に惑ふの時なり、この時にあたり、道德の無視せらるゝ、斯くの如く、主我の強盛を極むる、また斯くの如し。思想界の現狀、紛亂參錯を極め、一代を擧げて、無信仰、無思想、懷疑、煩悶の裡に彷徨するもの、まことに故なきにあらざる也（次號完結）

# 世界統一論

篠原沼東

## 思想の融合と經濟思想

グレシャムの法則は、何所迄で社會に應用せられんとするか。志士、「公義の缺乏」を嘆くあれば、學者、「強者の權利」を主張するあり、論難反抗、暫らくも止まず。而も其實は、名譽、財產、土地、生命、あらゆる人間の希望、快樂を擧げて、日ましに殘忍冷血なる、強者

の手に歸しつゝあるは今の所謂文明の世の狀態なり。さればにや、社會遂に風をなして、義人屢々義に恐れ、志士稍もすれば仁を辱めむとす。彼の公明正大を以て、其神髓とす可き法律に於てすら、正義は既に其範圍を驅られて、法の學を義の學と解し、法の人を義の人と稱へたるは、今や漸く過渡時代の謎たらむとす。知らず、文明と正義とは、果して相容るゝ能はざるか。惡貨が美貨を驅逐する如く、文明も亦正義を逐斥せんとする乎。

試に率直なる蠻人をして、倫動、巴里、若しくは我帝都の中央に來らしめ、文明生活の實狀を目撃せしめよ。彼等の多くは類推して云はん、斯くも巧妙便益なる機關を有し、諸般百科の智識に富める國民は、必らずや、其思想行爲共に相並進して、超絶する所なくんばあらずと。然り、正當に論ずれば、智識の進步は、自ら心術の高尙を來す可きなり。並行ならざる二線の相交るが如く、智德並び行はれずんば、文明の進步は此に淀滯し、妨止せらる可きなり。さりながら恨らくは今の文明の軌道は相交叉せんとせり、セネカの所謂「學者出づるや善人跡を絕つ」との言をして、眞ならしめつゝあり。進むものは進んで顧みず、後るゝものは退いて走らず、斯かる不一致なる社會組織の間に於ては、抑も何物の此に宿らんとする乎、問ふ、物質的進步と、精神的進步とは、到底相並進する能はざる乎。

人間社會の蟻蜂社會と異る所以のものは、人間社會を組成する、各員の精神中に於て、其相互の利益、及び目的を自覺する、共同意識の存するに在り、個人の相互的助力、及び保護が、無意識的方法に依て行はるゝとは最早社會結合の一要素を失せるなり。人は元來自然に其利福に奔らんとするの性あるも、苟も社會を組織し、世の道義の維持を必要とするに於ては、勉めて意を此燒點に注がずんばあらず、其度の輕重は、即ち文明の進不進を表するなり。心靜かに思ひ見よ、人間たるの價値は、身體より得るか、將た精神より得るか、云ふ迄でもなく、其精神より得るや明かなり。人間は其身體を以て、動物界の最上級に坐すると同時に、其精神を以て、物質界を超越し、遙に高尙なる理想上の地位を占め居るなり。此高尙なる地位ありてこそ、人は萬物の靈長なれ、否らずんば、唯僅に人類と云ふ、哀れなる、力なき生物の一種族のみ。されば法官の前にも屈撓せず、震慄せざる强情なるものしも、半夜物靜なる孤燈の下に、良心の裁判を恐れて、戰々兢々、

自ら我れに詫びつゝあるは、これぞ精神の人に背き所以、而して亦人の人たる所以ならずや。さるを唯惟り自己の功利に汲々として、智識的進步、物質的進步の發達を希ひ、而も其中心たる精神的進步の如何を顧みず、所謂楯の一方を見て速斷し、唯一概に文明の進步、社會の幸福を求めんとす、恰もこれ三角塔の底邊を以て立てんとはせず、逆に其頂點を以て直立せしめんと欲するもの、徒らに勞多くして、竟に其功を見る能はざるなり。而して今の世は、實に此徒勞に忙はしき也。

嘗て非戰論者の云へらく、若し文明國中、最强國とおぼしきものにして、卒先して自國が軍備を解き、兵器を廢して、萬國平和を主張するあらんか、必らずや、各國競ふて之れに從ふ可けむ、而して未だ其國なきを恨むと。戰爭の廢せざる可からざるが如く、現今の社會も亦、到底之を刷新せざる可からざるなり、而して之れを遂けんか、急進徒噪は、所詮何等の微功をも見る能はざるなり。例へば十八世紀の末葉に於ける佛國の如きのみ、自由、平等、博愛と云ふ立派なる言辭の下に、一大革命を惹起し、一國擾亂、生民塗炭に苦しむの悲劇を演ぜんのみ、唯此に要す可きは、眞文明國の起るあつて進んで其他の列强を同化し徐ろに思想上に於ける世界の統一を計るに在り、言大樣に過ぐるが如きも、策の終極は、畢竟此一點に歸せずんばあらず。形式的なる見識に依て、世は決して改善せらる可きにあらず見識に依て改善の美を見るが如くんば、世は未だ改善の要なきか、否らずんば僞善の世なり、然るに獨り其策の實行に窮する所以は、斯かる大勢力の出現せざるに在り、斯かる眞文明國の勃興せざるに在り。さりながら、吾人は敢て此れを以て、絶無なり、不可能なりとして失望せざるなり。何事もすまじき小兒も、何時しか大人となるが如く、吾人は其眼前に於て、斯國の小兒を有すればなり。即ち東洋の新興國、日本を有すればなり。何となれば我が日本は、吾人が嘗て論ぜしごとく、物質的進步に於ては、世界商業の中心、即ち大平洋の覇權者たらんとし、智識的進步に於ては、亞細亞人種中、三たび立つて二十世紀に於ける、世界の恩人たらんとし、精神的進步に於ては、東西兩洋の思想の融合力、即ち目下の弊風を一新して、やがて世界の指導者、人界の恩人たる可き、潜勢力を有すればなり。

世界的なる文字は、一見茫乎として取留めなきが如き

も苟も社界の刷新、世道の救濟を以て任とせんか、勢ひ自他平等、即ち世界的なる文字に結着せざるを得ず。若し世に世界的なる語の、空想的なるを否むものあらば、そは即ち議論の徒にして、實行の士にあらざるなり。何となれば、人生の自由發達完備を望まんか、必らずや其主旨とする所、世界的ならざらんとするも得ざるなり。然るに古來各國、何れも皆な尊大を以て自ら居り、歐人は自己を以て、世界最高等の人種と認め、トーマス、アルノルドの如きすら、歐米人種は、世界最後の歴史的人種なりと斷言せり。而して其人文、其思想をして、頻りに東洋人種に吹込み、所謂歐化し終らんと勉めつゝあり、更らに甚しきに迨んでは、博愛を以て、世に叫びつゝあるキリストの教義も、何時しか殘忍刻薄なる、武斷的、壓制的公盜の爲めに謬られつゝあり。翻て東洋諸國を顧みれば、尊大不遜の支那國も、今やせんかた盡きて、中華の盛都、徒らに西夷北狄の蹂躙する所となれり。而して一は飽く迄て涙なからんとし、一は未だ改悟の徴を見る能はず。斯かる殺伐なる僞善なる思想は、即ち二十世紀の思想たる可きや、斯くても尙ほ文明の進步と云はゞ、恐らくは世に二十世紀の文明程厭ふ可く、忌む可きものはあらざる可し。さても暗憺たる世の前途よ。

さはさりながら、今の世は決して失望の世にあらず、寧ろ希望の世なり。失望を以て送られたる太陽も、更らに幾多の希望を以て、東天に迎へらるゝが如く、今日世道の亂れつゝあるは、亦何者か幾多の希望、偉大なる勢力を以て、之れを壓倒し、感化するなくんばあらず、而して日本は、實に其衝に當らんとして生れ出でたるものゝ如し。何となれば、今後の舞臺は、到底支那の大飛躍を許さず、歐洲人は傲慢にして、東洋の精華を收むる能はず、唯惟り日本は、西洋の科學を利用して、巧に東洋の固有思想に加味し、東西兩思想の融合を計りつゝあり、即ち之を近くしては、支那印度との交通を頻繁にし、之を遠くしては、英米露に接近して、是を採り、非を棄て、所謂其粹を取つて、一大思想を養成しつゝあり、若夫れ精練怠りなくんば、結果として、今後發生す可き日本獨特の思想、即ち第二の大和魂は、世界將來の文明に於ける好標本にして指導宜しきを得ば、恐らくは遂に思想上に於ける世界の統一者たる可き也。

然るに一の患ふ可きは、我日本に於ては、今尙ほ極端なる二思想の存するありて、稍もすれば兩者互に相反

抗せんとせり、一は保守主義にして、封建古武士の思想を墨守し、殆んど排外的に流れ、一は純然たる歐化主義にして、無暗に歐洲文明を崇拜し、一も二もなく、日本舊來の思想を排斥せんとするものなり。前者は固陋にして進歩なく、後者は輕佻にして奇骨なし、共に寛廣雄大なる世界主義に反するものなり。

さるにても、斯かる疚しき思想の存在は、寸時も忽にす可きにあらず、速にこれが矯正芟除を計らずんばあらず。然らば如何にして此れを矯め、此れを除く可きや、思想の改善風紀の矯正の如きは、最も心的作用にして、家屋修覆道路の修繕の如く一時的のものにあらず必らずや徐々に根本的改革を行はずんばあらず。而して此れを行ふ可き唯一の方策として、吾人の信ずる所は、要するに經濟思想の普及に存するなり。保守主義と云ひ、歐化主義と云ふも、或一方より評すれば、前者は絕無なる經濟思想にして、後者は極端なる拜金宗なり。一は錢を水の如く思ひ、一は法律を犯すも、尙人の財産を所有せんと計るものなり。而して此の極端なる兩者を矯正せんか、是非なくも、眞正なる經濟思想の普及を計り、これに依て漸次改良の緖に就かずんば能はざるなり。社會主義と云ひ、理想團と呼ぶも其主旨とする所茲に存せずんば、畢竟有名無實のみ、遠慮なく云へば、寧ろ世を愚弄するに終らむのみ。米人イリイ氏曰く、經濟學は吾人に敎うるに、所謂正當なる行爲とは、即ち自己の利益を保護すると共に、他人の利益を犯さゞるに在りと。此思想こそ我國目下の矯風上、卒先して普及せざる可からざる所也。而して其功を奏し、其天職を全うすると同時に、所謂文明の寃罪を、雪がん事を切望するもの也。

# 海外新潮

## 海外大勢

## 東歐の現狀

墺太利匈牙利聯立王國の外相ゴルチョースキ伯は匈牙利部の外交委員に向てなせる外交演說中歐洲列强勢力消長の晴雨計たるバルカン半島現下の形勢に論及して曰く、

昨年以來列强は北淸事件の爲めに制せられ、東歐の事は爲めに暫く靜隱なるを得たりしと云へとも、熟ら半島の形勢を慮れば頗る憂慮にたえざるものあり、千八百九十七年露國と締結せるバルカン現狀維持の協商は、兩帝國間の誤解を避くるに於て甚だ須要のものなりと云へと

も、其後の經過は却て吾人の頗る滿足する能はざる所、殊に現今に於て然りとす、吾人の望む所は唯現狀維持にあり、又敢て領土の擴張を欲するものにあらずと云へとも、半島現在の政治干係を傷害せんとするの行動は斷じて之れを排斥せざるべからず、完全なる現狀維持は即ち之れ吾人の所謂東歐政策なり、

伯は更に進でマセドニアの動亂を痛嘆し、セルビヤの新憲に對しては其成功せんことを望むと云へとも、セルビヤ君主は國利民福增進を計るに當り、須らく墺國との親交を害し、依て以て墺帝のセルビヤに對する厚意を失せざらんことに注意せざるべからずと云へり、然らばマセドニヤの動亂とは果して如何たる形勢にあるか、

スタンダード(倫敦)の報する所によればマセドニヤの委員は、土耳古帝國の羈絆を脫せんとして動搖を始め其機關新聞は今にも反旗を飜さんが如くに書き立て、或者はブルガリヤに合併せんことを主張し、或者は絕對的獨立を主張す、土耳古政府に於ても既に五万の兵を此に駐めて反亂の爆發に備へつゝあり、而して所謂委員なるものゝ行動は却て土耳古政府の暴虐も遠く及ばざる所なりと云ふ、スピーカー(倫敦)之れを記して曰く、

所謂委員なるものは國內は勿論更に半島各部に手を擴げ暴力を以て戰費を徵收し、國內に於ては其暴虐土耳古官吏を凌ぎ、ブルガリヤに於ても亦貧富を分たず義捐を强請し、之れに應せざる富豪の白晝大道に於て虐殺せらるゝこと敢て珍しからず、ルーマニヤに於ても亦然り、爲めにルーマニヤと開戰するに至るべきやの風評一時盛にしてブルガリヤ政府も亦示威運動をなせり、而も遂に委員を鎭壓し首領を罰するなく、其勢力日に盛にして射擊俱樂部は全國を通じて操練に餘念なく初夏の頃を期して土耳古に侵入すべきを揚言す云々。

次きにセルビヤの形勢は如何と云ふに前きに國王アレキサンダーに皇子降誕するやの報道歐洲の各新聞に傳へられ、既に降誕を奉祝するの準備さへありたるに、侍醫は皇后の妊娠中にあらざること、幷に其健康より察すれば將來に於ても皇子の降誕甚だ覺束なき旨を發表したり、然るに現朝に不滿なるものは宮中に於て他より一子を得て之れを皇子に擬するの策をめぐらしつゝありとの風評を立て、國民は愚にも之れに迷され遂に現朝に危害を加へんとするの恐あり、墺國外相の痛嘆せるは實に此にあり、一度斯る反亂の起るあらば勢ひ露墺兩國の干涉となり、若し兩國各々一方に左袒するが如きことあらば事態は愈以て容易ならざるべし、

スペクテータ(倫敦)曰く

露墺兩大國の一小王國セルビヤに對して有する利害關係は頗る重大にして、何れも共和政若しくは己れに反對する王政を許さず、されば外交の折衝は一變して干戈相見ゆるに至るや知るべからず、若しセルビヤにして共和政を敷き無政府の狀態に陷らんか、國境は一日も靜隱なるを得ざるべく、若し又之に反して共和政府の成功するが如きことあらば四周の各邦殊にボスニヤ、ブルガリヤ、及びマセドニヤ等は忽ち之に倣ふに至らん、之れ露墺の共に默する能はざる所なり、セルビヤは元これ彈丸黑子の一小弱國のみ、之れを抑壓するは元より易々たりと云へとも、露墺兩國何れの兵を以て之れを抑壓すべきやは頗る難事たり、若し何れか一方の兵を以て之に當らんか、其國は必ずやセルビヤを其配下に置かん、されぱとて兩國同時に兵を進むるが如きことあらば、兩國軍隊の衝突は遂に避くべからざるや疑なし、又若し王政を維持するとするも國王皇子なきを以て新たに後繼者を撰定せざるべからず、其撰定につきても亦兩國の一致頗る難事たるべし。

若夫バルカン諸國をルーマニヤ王チヤールスの下に統一するの策に至

りては直接露墺兩國の利害に關する所なしといへども、而も露國は爲めにコンスタンチノープルに達するの通路を遮られ、墺國は爲めにサロニカ經由の東方貿易を斷念せざるべからざるに至らん、之れ兩國の敢て首肯せざる所なり。

バルカン諸國の運命は由來列强の爲めに翻弄せられ、其利害は列强の利害の爲めに犧牲に供せらるゝこと恰も今日の淸國と異らず、嗚呼憫然なるかな。

## 獨乙の野心とモンロー主義

獨乙帝國は夙に獨乙人の密住する南米ブラヂルの一部を割取して此に一大殖民地を建設するの計畫あり、此計畫たる固より彼のモンロー主義なるものと相容れざる所にして、合衆國は決して袖手傍觀せざる可きを以て、獨乙政府は既に合衆國との葛藤を豫期し、近年皇帝の熱中せる海軍擴張の如きも亦標準を此にとれるものの如しとはスペクテーター及びサタデー、レビユーを始めとして、英國幾多の新聞雜誌の已に久しく米人に向て警告しつゝありし所なるが、晩近に至りて又もや一大風評はひろがりぬ、そは獨乙政府が石炭貯藏所としてカリビアン海中の一島を租借又は買收せんと欲し、今現にベチヅエラ政府と交涉しつゝありと云ふことなり、而して此風評は半官的に取消されたりと云へども、社會は却て其取消に信を置かざるものゝ如し、現合衆國副領統ルーズベルトと相並んでレパブリカン黨の領袖たる上院議員ロツヂ氏は上院外交委員會に於て牛耳をとれる人なり、バフアロー博覽會の開會式に於て南米幷に中央亞米利加共和諸國の代表委員に向てなせる演說に曰く、

凡そ何國たるを問はず、兵的强國のこの半球に進入し吾人の隣邊に占據し、吾人の平和を迫害せんことは吾人の默許する能はざる所、又默許するを欲せざる所なり、卿等は卿等の國家を有し、又卿等の政府を有す、吾人の願ふ所は貴國々民の平和、繁榮、富强にあり、而も是等は凡て各自國旗の下に於て遂行せらる可し、敢て歐國をして干涉の機會を得せしむべからず、願くば七十有五年以來吾人の死守せるモンロー主義に忠實なれ、吾人は倶に共に此主義と終始せん。

吾人は敢て一寸の土地、一塊の石と云へども之を歐國に讓與せざる可し、吾人の歐洲に向て望む所は只獨り親善にあり、又敢て歐洲の事件に毛頭干涉せんと欲するものにあらず、されば彼れ歐洲も亦敢て我半球の內事に容喙すべからず、現にこの半球に足場を有せざる邦國が新たに來て買收、租借其他如何なる名義を以てするに拘らず、此に根據の地を設定するが如きは斷然之れを否認すべきなり、前きに西班牙の和を請ふに當りてや、合衆國は海軍根據地として歐洲た於ける西班牙領の一島を要求することを得たりしなり、而も吾人は敢て斯る要求を提供せざりしにあらずや、去れば之れと相互的に如何なる歐國と云へども亦カリビアン海に海軍の根據地を設定するが如きは斷じて許す可らざる所なり。

現に亞米利加に於て領土を有せざるの歐國がカリビアン海に於て要港を建設するが如きは地狹運河幷に南部諸國に對する大々的迫害なり……此危害たるや健筆雄辯の以て如何ともすべからざる所、只之れに對する唯一の方便は亞米利加諸國の團結を鞏固にし備を充分にして注視を怠らざるにあり、殊に合衆國は何時にても直ちに活動するの覺悟なかるべからず。

米國の新聞雜誌はロツヂ氏のこの演說に對し或は之れを非難するものあり、或は之れを稱揚するものあり、之れを是とするものは氏の演說を以

て或は實質幷に形式に於て共に闘然する所なしと云ひ（ニューヨーク、サン）、或は時と所を得たる意見の發表にして會にワシントン政府の施政の方針たるのみならず、又同時に合衆國元老院の意見にして米國々民の聲なりと云ふ（インター、オーシャン）、而して之れを非とするものは或は氏を以て擧ろ危險なる主戰暴論家にして、徒に國際の友情を傷害するものなりと云ひ（ニューヨーク、夕報）或は南米の事は合衆國敢て之れに干渉せずとも彼等自ら衛るに足らんと云ふ（フヰラデルフヰア、リコード）、而して所謂モンロー主義なるものゝ範圍如何即ち之れを單純なる海軍石炭貯藏所にまでも及ぼす可きや否やの問題に關し、スプリング、フヰールド、レパブリカンは論じて曰く、

斯る廣義の解釋を主張するは決して智と云ふ可らず又利にあらず、歐洲の何國と云へとも他國が石炭貯藏所を獲得せんとするに對し未だ斯る極端の態度を取りたることあらず、今日獨乙に對する非難の根據は若し獨乙にしてこの西半球に石炭貯藏を得るに至らば、之れを根據として侵略的活動を恣にせんと云ふにあり、而かも之れ一の想像に過ぎず、又一方に於てはロッヂ氏のとれるが如き態度は世界の一大商業國たる獨乙の憤怒を喚起し、交際の圓滑を破り、遂には干戈相見るの不幸を招致することなしとせず、一大友邦に對し斯くも公々然と蛇蝎呼はりするは決して國際上の厚意と平和を進むる所以にあらざるべし、

## 歐洲諸國の宗教難

國家と宗教との關係の如何に困難なるかは殆ど世界各國の等しく實驗せる所、今更贅辨の要なかるべし、歐洲諸國にありては中世に於て宗教改革の騷動あり、前世紀の中葉に及びて所謂クルツール、カムプあり、爾來國家と宗教幷に各宗派間の干係は一定のスタビリチーを保てるが如きの外觀ありしと云へとも、內實大ひに然らざるものあり、信教の自由は各國憲章の等しく保障する所なりと云へとも、各國自ら一宗に厚くして他宗に薄く爲めに宗派の軋轢を釀し、勢力の集團する所、動もすれば國權の基礎を危くせんとす、殊にその國際的集團に至りては最も警戒を要する所なり、さればにや目下宗權排斥の風潮は南はリスボンより北は露都セント、ピータースブルグに至り、大陸一圓に波及せり、而て其中心點は佛國巴里なり。

佛國の所謂非宗教結社法案なるものは凡そ宗教結社にして、國外居住者を以て其首長若くは高等役員とするものは不法なりと云ふにあり、此法案は巳に委員會を通過し今方に元老院の手にあり、本案提出の初より各種の新聞雜誌は囂々として贊否の論を戰はし、輿論は未だ俄かに歸一すべくも見へず、上院の形勢も亦更に判然たらざるが如し、然りと云へとも若夫本案にして一度通過し確定するに至らんか、國際的宗教團體は忽ち國法の非認する所となり、羅馬法王にとりては由々しき大事たらずんばあらず、羅馬教廳を始め舊教徒が主唱となりてワルデック、ルッソー內閣の政策を非難攻擊しつゝあるは固より其所なり、攻擊の理由中一寸面白く思はるゝ節は佛國政府にして若し敢てこの政策を遂行せんと欲せばラテン民族は爲めに衰微し、ゲルマン民族之れに代らんと云ふにあり、曰く隣國を始め極東幷に亞非利加に於て佛國の勢力を指導しつゝあるものは宗教團體が布教幷に教化の事業なり、而して改宗者は佛國を以て慈愛なる保護者となし之れを敬慕しつゝあり……當局者は思ふて此に至らざるか、吁々と……

海外雑纂

## 最近世史教授の禁止

### 佛蘭西に於て

佛國の文部大臣は近頃一の訓令を發し、大學其他の學校に於て最近の佛國史を教授することを禁止したりと云ふ、米國ニューヨーク府發行クリエー、デセタ、ユニイの記する所によれば、文部大臣の訓令は自今佛國史の教授は千八百七十五年の新憲法確定を以て之れを終るべく、或事件例へば大革命の如きの影響を説くに當りても尚千八百七十五年以後に亘るべからず、加之この訓令に適合せざるの著書は啻に教科書として之を採用することを能はざるのみならず、又圖書館に之れを藏することを許さず而して各學校長は各々其學生の斯る書籍を盗見することなきや否やを監視するの責に任ずべしと云ふにあり、文部大臣の方針を贊するものは曰く、從來の習慣によれば國史の講義は下て現代に及び、各教師の政治的所信によりて事實の眞相を亂し、政治家が大學を手に入るゝの方便となるの恐あり、さればとて政府に於て現代の事實を公平に指示して遍重なからんことは殆ど不可能の事に屬す、是によりて之を觀れば今文部大臣が寧ろ中立の地位をとりて最近國史の教授を禁じたるは決して失當の處置なりと云ふ可らずと、之れを非とするものは學生が遂に近代國史の智識を修得せずして社會に出つるを不可なりとして曰く、千八百七十五年てふ年は内國に於ては一大紀元をなすと云へとも、外國事件に於ては敢て然らず、されば學生は英國の埃及征服は之れを教はることを得んも、佛國が何故之れに干係せざりしかの事情に至りては遂に之れが了解に苦まん、又彼等は千八百八十五年に於て清佛戰ありしことを知るを得ん、而もそが何故に且つ如何にしてフェリ内閣の瓦解を來たしたるかの事由に至りては遂に之を知悉するに由なけん、抑も文部大臣が斷然斯る處置に出てたる所以のものは彼のドレユース事件に際し二三大學教授が之れに干渉したるに基因するものなるや明かなり、蓋し此の如きは元より社會の秩序を攪亂するの嫌なきにあらずと云へとも、而かも文部大臣の處置も亦一方の極端に走れるものと云はざる可らずと云々、

## 加拿太の暗黑界

加拿太に今尚未開墾の地域頗る多しとは吾人の屢々耳にせる所なるが、近着のサイエンチフヰック、アメリカン、サップルメントの報する所によれば、加拿太の全面積三百四十五万二百五十七平方哩中約其三分一即ち百五十二万平方哩は尚足跡の及ばざる所にして、其中北極地方の島嶼を除去するも尚九十五万四千平方哩に及ぶと云ふ、今左に其摘要を示さん

一、アラスカの東境ポーキュパイン河より北海岸に至るの地域　面積九千五百平方哩にして殆ど白耳義國の面積に等しく而して北極圏中に在り。

二、リューエス河及ユーコン河以西アラスカ國境に至るの地域　面積三万二千平方哩、但し昨年以來其一部は開拓せられたりと云ふ。

三、リユエス河、ペリ河及びスタイキン河の間に介在する地域　面積二万七千平方哩にして殆ど蘇格蘭の二倍なり。

四、ペリー河及マッケンジー河の間の地域　面積十万平方哩にして

英國の殆ど二倍あり。

五、グレートベーア湖より北海岸に至るの地域　面積五万平方哩にして殆ど北極圈中に在り。

六、グレートベーア湖及マッケンヂー河間並にグレート、スレーブ湖西の地域　面積三万五千平方哩にして葡牙國と殆ど相等し。

七、スタイキン河及レーイド河より南方スキーナ及びヒーチ河に至るの地域　面積八万一千平方哩あり。

八、アタバスカ湖の南方三万五千方哩の地域

九、コッパー河以東バサースト以北七千五百万方哩の地域　即ち瑞西の二分の一に當る。

十、ブラック河と北海岸との間に横はる三万一千方哩の地域　殆ど愛蘭に等し。

十一、ハドソン灣の西方十七万八千方哩の一大地域　即ち大不列顛に愛蘭を加へたるものよりも大なり。

十二、ハドソン灣の南岸二万二千方哩の地域　即ちノバ、スコチアよりも大なり。

十三、ツロート湖とアルバニー河の間一万五千方哩の地域。

十四、ゼームス灣の東南三万五千方哩の地域　即ち葡萄牙の面積に等し。

十五、ラブラードル半島内部の殆ど全域　即ち二十八万九千方哩にして大不列顛及愛蘭を合せたるもの丶二倍大なり

# 外人の日本劇評

英國の一文士オスマン、エドワープ氏は其近著日本の演劇及び俳優と題する一書に於て本邦劇の批評をなせり、今其概要を摘記せんに、先づ本邦劇は其技藝以外に於ては十八世紀以來何等の進歩なきを述べて、曰く劇の脚色及び人物の描寫に一の進歩なく又依然として舊江戸時代の奇異なる道徳并に武士道の教訓を含めり、人若し今日に於て東京の劇場に入らば忽ち舊日本に在るの感を起さん、即ち人目を眩せしむるばかりの粉裝をなせる怪物の所作は吾人の道徳的感情を亂すこと甚だしさと云へともこれ今日の日本に於て尙依然たる高上にして殿酷なる道德を示すものなりと云ひ、次で日本劇が外人の目を引く所以のものは只其舞臺の奇異なると、所作の常識以外なるの點にありとて、尙巨細に劇場の模様を述べ臺詞を批評しては餘りに堅くるしく、不自然にして耳障りなりと云ひ、其理由は俳優の動作と相伴ふ三線味の調子より其音聲を高下せしむるに非されば、觀客の之を聽取し能はざるが爲めなり、されども其觀客殊に婦女子に與ふる感覺は實に非常にして、悲絕痛絕の妙處に至らは潸々流涕せざるもの蓋し稀なり、又日本劇に於ては男優と女優の共に舞臺に上るを許さゞるを以て男優女子に粉し女優男子に粉す、之れ其演劇の進歩を妨ぐる一理由なり、尙他の一理由は俳優の地位の作者に對して餘り高きに過ぐるにあり、而して成功せる俳優は觀客の愛顧を受くること甚だしく、其舞臺にあるや觀頭脚下に集り、樂屋に入るや贈寄銀臺に充つ、上級俳優は四週間に五千封の收入を得るに反し、作者は只其相談に與るに過ぎすして其收入の如きも亦頗る些少なり。云々



# 詞藻

## 俳句　四方太選

### 生節

生節や夏幾年を長屋住み　一堂
夕飯の男世帶や生節　北斗
生節酒もいさゝか買得たり　輪月
生節に殘る油の哀なり　逸笑
生節や煮付けし焦け鍋の底　都月
生節を食忘れたる戸棚哉　殿子
生節に群がる蠅や干物店　啞子
日盛を生節賣りや田舍道　何客
蠅帳や鉢に盛りたる生節　吐霓
冷飯の宿屋の晝や生節　加志久
生節や貧しき店の片戸だし　笠雨
生節を猫と食ひたる小鍋哉　快雨
生節や貧厨暮れて物靜か　盧靜
生節の切賣もする小店哉　霞松
雨十日生節賣の來りけり　鬼水
生節にいさゝか主人設かな　洋々
生節や病養ふ磯の宿　仝
生節をくづして酒の肴哉　柳家
生節を買ふも賤しき女哉　仝
生節の外には何も魚屋哉　稻青
刄に脆く壞れ易さよ生節　仝
生節や酒飲足らぬ暮の程　天風
生節を燻す匂や臺所　仝
晝過ぎや市に殘りの生節　耕村
生節を簀に干すや柿の花　仝
生節の杉の香嬉し冷し汁　生巢
朽木嚙む心地こそすれ生節　仝
生節や溫泉の宿の雨三日　雄濱
生節の乾き足らでや梅雨に入る　仝
生節や夕餉貧しき膳の上　仝

忙しさの自炊の飯や生節　春楓

生節を蕗の廣葉に包みけり　仝

生節や腹も空しき酒の味　仝

人

生節祭めでたく過ぎにけり　北岫

地

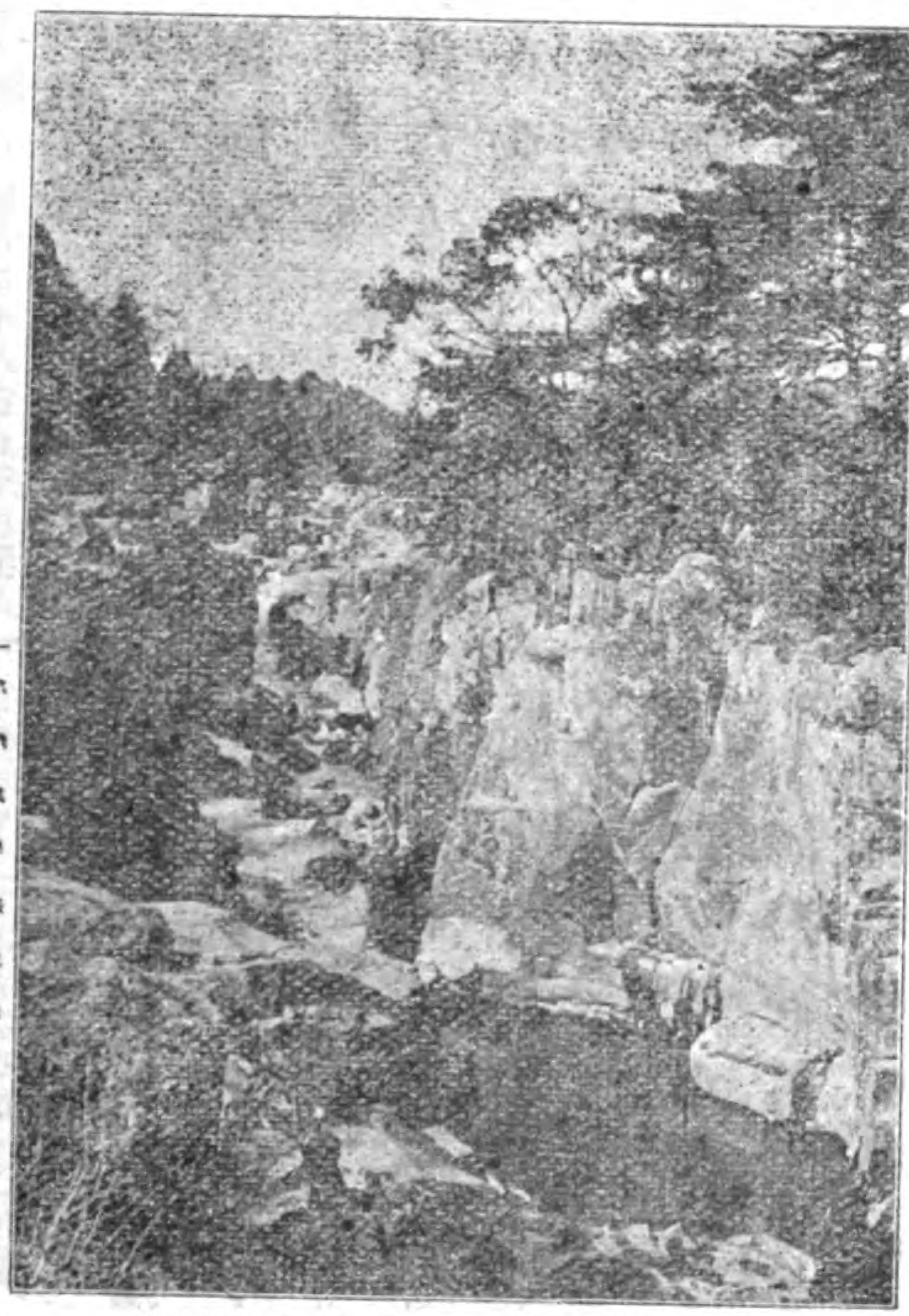
生節の雌節雄節や籃の中　生巣

天

生節に笹をへだての小綱哉　虚靜

廻燈籠　八月十三日まで

花火　九月十三日まで



## 漢詩

藤島膽岳

香港

灣勢扼山成犬牙。雕甍粉壁競繁華。萬星燈影霞成彩。不夜城中十萬家。

印度洋

稟性由來百不能。壯懷今日試飛騰。圖南九萬無窮極。欲把前程問大鵬。

蘇西運河

開鑿功成利便多。滄桑又奈後來何。寧知鐵路連歐亞。閑却西蘇好運河。

地中海船中作

月中舟似鏡中行。風露濕衣秋氣清。却憶琵湖笙島夕。飄然一葦泝空明。

寧浦港

地形斗出擁崔嵬。傑閣層樓壓海開。巨熕一聲坤軸動。

船如鰲背入灣來。

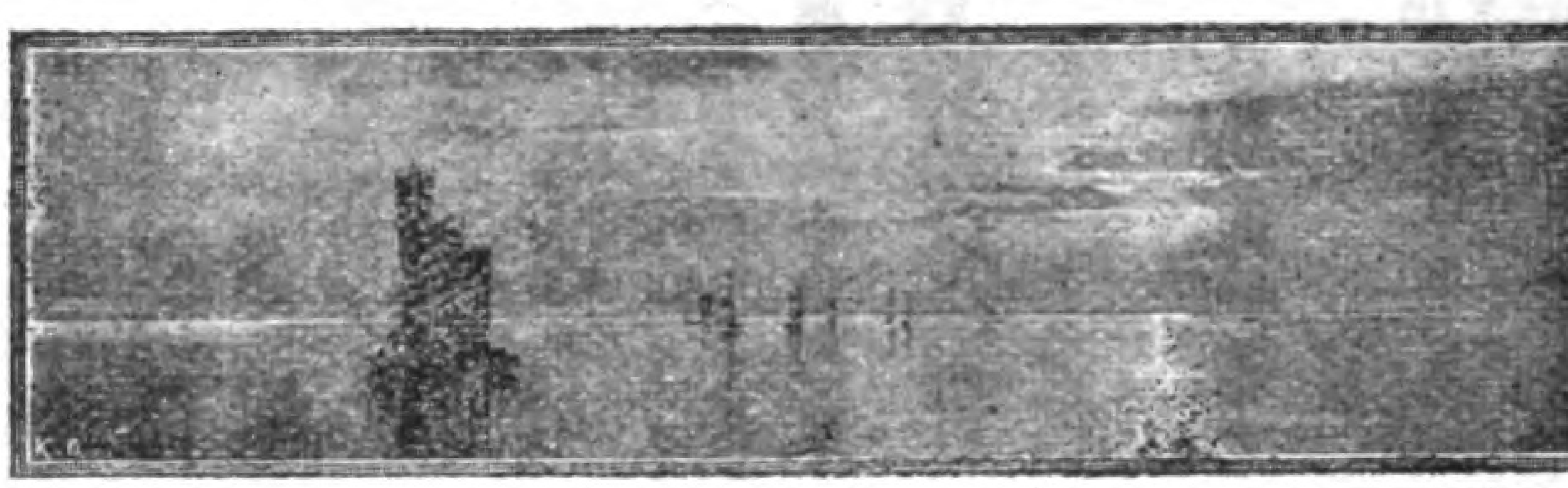
豪爽明快、便是作者本色、其生硬處、却覺性情流露、不可漫以規短律焉、

太田金山謁新田高山兩祠

金刀山人

刀水繚繞金山峙。想昔左將始唱義。英魂不泯幾百年。再爲烈士生此地。偏慨王室日式微。危言欲攪萬人睡。踏海奮連或同倫。一死千秋留血淚。元弘寛政雖異代。前後崛起殉王事。生連桑梓死連祠。二公精忠同氣類。嗚呼雙廟赫灼護皇基。至今香火無盡時。

余亦少時屢渡刀水、攀金山、詣所謂兩祠、其地松杉蓊蔚、堂塔莊嚴、逍遙自適、可以忘憂、豈唯二公忠誠之感激人心乎、



時事有感　　松田晩陰

黨局紛々有弛張。白頭元老退名場。太郎冠者彼何者。徒見沐猴班廟堂

冠與沐猴、緊切殊妙、

寄犀東

大江雲氣坐來收。門外風蒲宜九秋。疎雨一過天宇濶。亂峰寒翠落層樓。

風調絶佳、詞意精錬、

寄豹軒

寂々閑花成子落。寥々幽鳥作春呼。不知學士讀書處。有此禪廬道味無。

閑花成子幽鳥作春、律師亦不堪風懷乎、呵々

## 谷中八景

國府犀東

筑波晴嵐

波山八千尺。拔地碧崢嶸。春曉晴嵐動。扶桑大日擎。

諏訪臺歸帆

獨立春臺上。彩霞暎紫衫。偶看遠江夕。雲影落歸帆。

螢澤晩鐘

一泓清池水。螢火亂葱蘢。午睡僧驚起。晩撞數杵鐘。

七面坂夕照

仰觀倦鳥還。俯聽湍流濺。洛罷立斜陽。淸風不須扇。

天王寺秋月

塔尖掃箕尾。岑寂黯林樾。持咒一僧歸。磬鳴弊秋月。

田端落鴈

負廓肥稻粱。秋鴻荻洲宿。曉蹴霜月鐘。舒翮指南陸。

日暮里夜雨

簷外芭蕉裂。田家夜雨時。西牕挑燭讀。一卷寒山詩。

千駄木暮雪

晴雪前山麓。殘睡在碧疏。開軒對霽景。懶策灞橋驢。

余僑居谷中、四換裘葛、而未得一題詠、頃屏東兄、寄八景詩日夕諷誦、以暢幽懷、而余未識其面、文字之交、秦楚咫尺、有如此者、

## 次韻

岡崎春石

筑波晴嵐

嵐先晴縹緲。山勢曉崢嶸。長見雙尖秀。分明地軸擎。

諏訪臺歸帆

春臺夕收雨。花氣泥吟衫。遠水晴如畫。林梢杳々帆。

螢澤晩鐘

疎螢放光早。水樹濕葱籠。乍破暝煙度。一聲蕭寺鐘。

七面阪夕照

隔樹碧潺湲。前坡春水濺。看花人未歸。夕照迸紅扇。

天王寺秋月

陰風吹火青。秋露墜林樾。白骨朽無蹤。淒涼墳上月。

田端落雁

鴻雁帶霜飛。月明何處宿。蘆花一白迷。相喚方遵陸。

日暮里夜雨

一穗青燈瘦。芭蕉夜雨時。清愁消不得。且讀十年詩。

千駄木暮雪

林日濛將暮。風斜雪撲疏。琴書多逸興。不用策吟驢。

清雅幽峭、首々皆妙、用筆自在、不似次韻之作、余最愛夜雨一首、

## 家園雜錄

赤松景福輯

即青山樓

樓在宅之巽位、枕清池、隣綠樹、前臨平田、人烟斷續於其間、南望則遠青山一帶、如畫青螺朝爽夕佳、鐘於一樓、扁曰即青山樓、取諸古人句也、先考少壯讀書處、

梅郁先生及諸友見訪、夜賞即青山樓下櫻花、分韻、賦兼呈梅郁先生、

先考篁山

千金春夜賞。供給一甌茶。陋室迎名士。荒郵觀好花。

風香雲不動、雪映月將斜、詩就妍相敵、毫端粲吐葩、

纖巧而有姿致

雪晴即青山樓曉望　同

同雲散盡雪初收、破曉起來凭檻頭、野沼猶存小於目、
人家已沒凸如瘤、氷天有月餘光澈、銀界無風群籟休、
卯飲三杯助吟眺、一醺何用辟寒裘、

奇景奇語

即青山樓集

一病纏綿三月餘、紙田久矣廢耘鋤、春垂晩暮芳皆老、
朋自遠方情不疏、山色當樓閒似睡、烟光泛野暖如噓、
吟壇幸是詩盟會、幾寄新篇好起予、

情景兼妙

即青山樓所見　同

天末遊雷沈、溪灣蛙聲集、疎雨帶涼飛、前山雲未濕、
罷釣歸來兩三兒、折取荷葉戴作笠、

眼前之景寫得極妙

早春即青山樓集勒韻　同

暖風習々雨輕々、自覺襟懷一段淸、小閣簾櫳春水影、
孤邨梅竹午鷄聲、杯浮柏葉山家酒、菜煮筆頭詞客羹、
文字之交淡如此、謝君不敢負前盟、

後聯良工苦心處然余愛前聯自然

即青山樓夜觀櫻花　同

落花風靜一燈溫、人在春蛙吠處邨、此景年々惱人殺、
櫻雲壓屋月無痕

登即青山樓二首　景福

晴樓凭檻處、塵慮爽然醒、臨水水紋簟、對山山字屏、
曉涼千樹露、夜靜半池星、人去琴猶在、餘音髣髴聽、

鉤簾樓上望、歸鷺一行斜、午靄籠喬木、春泉浸苗葭、
句題雲母紙、瓶插水僊花、愛此青山好、令人興自賖、

雲母水仙好對人未道破

本月分課題（鎖夏雜詠、五律）應募の作は選者の都合によりて次號（詠牽牛花、五絶）と共に登載することとせり、兩題共八月十五日迄に投稿あれ（下谷谷中三崎町田柳塘宛）

# 光炎集

（風韻社詠草）

○　中西松琴

星の子が笑みてわかれし岩の上に白き桔梗のけさ二つ咲く。

詩を思ひ歌を思ひてわれぞゆく麥かるところ水鷄鳴くところ。

卯の花のかき根を過ぎて野を過ぎて渡しに出でぬ夏の夜の月。

けがれたる世の罪とはず胸なでゝゆふべの殿に蓮の花見る。

緋柘榴のはなちる庭の飛び石に蜥蜴ねぶりて夏の日あつき。

○　中西正夫

いとけなき巡禮呼びてものとらせ名を問ひ居れば雨ふりいでぬ。

このごろの村の田歌にのぼるまで我が名は立ちぬ耻かしの世や。

親をおもひ家をおもひて人知れずぬぐひし涙神知りますか。

○　門野三果

富士一つうづみ殘して青葉しげる裾野が原に啼くほとゝぎす。

誰住みて誰流しけん山川に二ひら三ひら罌粟のはな浮く。

み姿を壁にゑがきしこのゆふべ胸のさわぎはさていかにせん。

友仙の浪にちどりのはでゆかた四條河原を舞子ねり行く。

あを葉しげる春日の宮の神樂堂みこのねりぎぬ藤色なりし。

○　小池武俊

妹とわれ歌誦しつゝも眺めはや黄金色なす雲うつくしき。

わが願ひ神受けまさぬその時はみ池かけりてみづちとならん。

泣き／＼て我身痩せけり戀びとのあつき情はいまだ聞かなく。

○　伊藤呉風

つばめ飛ぶ藁屋のやなぎ芽をふきて竹のやれ垣春の水めぐる。

雨の中につゝじおほ方うつろひて長岡池畔春くれんとす。

日かげさす南の椽にいざりいてゝおつる椿の花かぞへ見し。

○　臼井學耕

水くみに裏戸いづればありあけの薄月しづみ苗代の小田。

ありあけの月に水汲み新尼の閼伽桶きよし白百合のはな。

はたご屋の青き蚊帳ごし丸まどに笹影うつる有あけの月。

かの河に鮎つりにきませ夕ぐれを河鹿なかんと友の語りき。

○　高橋翠柳

やはらけき風と光りのうま酒に醉うて咲き出ぬ我が家の牡丹。

なき妹のその面影のあらはれぬ牡丹くづるゝ御ほとけの前に。

うつし世の果敢なき憂きに泣かんよりは神の御園のやすらけきぬぶり。

○　佐藤梅園

ほとゝきず一聲啼きて過ぎにけり懸天門のあけがたの月。

○　一柳直彦

このゆふべ友を送りて柴の門さゝんとすれば鳴くほとゝきす。

○　清水晶月

驛たちて伊勢路にかゝる旅人の菅の小笠に朝日さすなり。

○　富田滄陽

川上にあみやうつらんひとむらの玉藻流れて水うすに

ざる。

たちばなのかをれる庭におりたちて水撒く夕なくほとゝきす。

○　足達琴洲

雨はれて風こゝちよき畔道を早苗とる子の朝はやく行く。

○　佐伯菊子

さゝ蟹の蛛蜘のふる巣にひとひらの花をのこして春ぞ暮れ行く。



○　河邊とせ子

故郷にかへるやがても詣でけり遠つ御おやのおくつきどころ。

○　原田廣子

秋かよふ岩垣清水むすびつゝ山の端いづる月や待たまし。

○　渡邊光風

日まはりはたくましき花ますらをの見らくよろしと植ゑておほしゝ。

きら〳〵に朝日はえたり日回りの大いなる花ひがしをむきて。

岩牡丹日ごとふゝみて長雨のあめの晴れ間を待てど甲斐なく。

凡俗のわれなりながら殊に愛す御ほとけはなの白蓮(ビャクレン)の花。

こその秋夜市に買ひし七くさのその一草の小萩咲きけり。

橋ぎはの柳いくもと雨はれてポストに落つる朝つゆ清し。

八重花の牡丹の花に香焚きて雨の日ひと日小琴かなで

つ。
そごばくの國ちりばめて御神めづる瑠璃の水玉海とし
いふかも

## 黄泉歌

森田義郎

たらちねの母の御國はとほきかも遇ひきとつげし人だ
にもなし。
おもちゝをゆきて見まくと思へども行通ふべき國と聞
かなくに。
皆人はいなと逃ぐれどわれはもよ早もゆかくのほしき
黄泉かも。
跡もなきものを思ひつゝ有らむよりはゝの久遡邊にい
しけ我命(ワギノチ)。
父母ののいますくにべにおともらひ吾をつれゆかむま
め人やたれ。
たらちぬを迎へに行しはらからのいとし以呂姉の待つ
に歸らず。

うつし世の長人さへに見知らざる黄泉の國見にゆきし
きみはも。
垂乳稱は耳やしひつることにしてなけどなげけど影だ
も見せず。
常闇の冥土の手向ゆかへり見てかなし我がおぬ吾が名
呼びきや。
冥府に行くみちの長手のつゝがなくはや母とりて還り
來ませな



雜　録

# 西藏雜記

楓　堂

◉雍和宮から阿嘉呼圖克圖（アチャフトクト）氏の渡來は計らずも我國民に西藏と云ふこと、喇嘛教と云ふことに就て、新知識を與ふる機會となつたのは喜ばしきことである、併し世の新聞雜誌などでは種々喇嘛教と西藏に關して柄にもなく我一と書き立つる爲め、ヒドイ間違ひを傳へて、阿嘉氏とダライ喇嘛と同人と心得たり、支那にて政治上の實權までも据れるが如く吹聽じたり、西藏は印度の眞中にあるやら、チョーマーが僅か十餘年前の人であるやら、中々目覺ましき噓を傳へる、

◉北京には雍和宮と同じく日本でならば勅願所とでも云ふべきものが五個寺ある、紅寺（ホンスー）、黑寺（ペースー）、黃寺（ホワンスー）、雍和宮（インホー）、隆福寺（ロンフースー）是れて、其中雍和宮が五寺の總代をして居るのみである、喇嘛黃教の中學僧の方は黃寺に官僧の方は雍和宮に居る、

◉ダライ喇嘛の勢力が西藏全躰に及んで居ると云ふのも間違ひで、紅教の本山釋迦寺（シャツキャゴンパ）の所在地近方などは少しの勢力も無ひ、ダライ喇嘛の轉生の豫言にて出現せること、雍和宮の主僧も亦インカーチーションの一人であることは實際であるが、かゝる事を定める其内幕を聞ては實に馬鹿々々しき至りである、ダライ喇嘛は必ず少年の間に死して轉生する、是はダライ喇嘛の下に立て西藏政治上の實權を握れる「キャルポ」が、ダライ喇嘛が十八歲以上になれば其俗權の實を奪はれるから少年の間に毒殺して仕舞ふのであるそれが爲め法主は代々弱年で轉生する、其豫言轉生とか、生れながらにして叡智だとか、種々の奇蹟は愚民籠絡の手段で、深く秘密の雲中に演ぜらるゝ、一種の狂言に過ぎないのである、

◉西藏に關する歐人の著述は彼れ是れ、六十種もある其中
宗教や風俗に關しては、ワッデル氏の「喇嘛教（ラマイズム）」シ

エラチンホワイト氏の「西藏佛教（ブヂズムインチベツト）」
地理に關してはサーベータ、ランダー氏の「フワヒツン、ランド」
字書文典に關してはエスキー氏の西藏字書、及び文典と、チョーマー氏の同じく字書文典
など、最も西藏の事情を知り、西藏の文字を學ぶに便利である、

◉流石に世界の秘密國と云はるゝ丈けありて開闢以來外國軍の侵入を受けたことが無ひ、曠世の野心家成吉汗ですら南方に出づるに、此の天嶮には閉口して、ボカラ、アフガニスタンを廻りて西藏を横斷することはしなかつた、個人として歐人の入藏したるものは

紀元千三百二十八年Friar Odoric氏が喇薩に入たを嚆矢とし

それから三世紀程後、千六百二十四年ゼスイット派のAntonio Andrada氏が印度から入りて支那の西北へ横斷した

千六百六十一年にはFathers Grueber & D'Orville 二氏が北京から進んで西藏を横ぎりてニポールへ出た

十八世紀の前半には印度のデルハイとラッサの間にニポールからの道とカシユミルからの道と此二道に依て度々歐人の往復があつた

英人が初めて入つたのは千七百七十四年George Bogle氏がワーレンヘスチングスの使節として行つたことである、併しこれは喇薩（ラツサ）までは行かなかつた

千八百十一年にThomas Manning氏が喇薩に往復した、英人として無事に西藏の首府に往復し得たのは此人計りである、

以來十九世紀に西藏の其一部へ危險を冒して入たものは中々數多き事である、

千八百四十四年から全六年にかけて佛の宣敎師Hue及びGabet氏は支那からラッサに萬難を冒して入藏の目的を達した、併し長く止まることは出來無かつた

千八百六十六年にAbbe Desgodins氏の如きはやふやく東部西藏に入つたが首府に入るまでに逗々の躰で

逃げ戻るの止むなきに至つた

フチピッツンランドの著者サーベーシランダー氏の如きは、千八百八十九年頃十二人の從僕を連れて出掛けしも、其從者は途中で悉く返いり忠をなし、只癩病患者の波羅門僧と、久しく印度政廳に雇はれし印度人のポリスと、僅か三人となりて辛ふじて入藏した、

◉要するに昔は天嶮と云ふ自然の防害の外、入藏を拒むものは無く、西藏人は特に外國人に親切な人種として知られて居たのである只近世に至り錫蘭や緬甸や印度本土や果ては自國の藩屏たりしシッキムさへ外人の奸手段にて騙取せられしことから、外國人とさへ云へば國境を跨げさせぬ方針を取つたのである、此密閉主義の勵行は僅々八十年來の事で全く英國人がかくあらしめたと云ても善い、

◉併し英國や露國が兵力を以てこれを開放するつもりなれば、眞に易々たることで、事を始めて一年を待たず。此秘密庫を開き得らるゝであろー、特に支那政府を利用するならば其勞力の半分以上減じ得らるゝ、必ず茲二三十年の間には誰れも安心して出掛け得らるゝ樣になるであろー

◉日本で西藏探檢を說きしは南條文雄等諸氏が牛津大學より歸りて、大乘佛經の完全なる原本が獨り全國に存するを說き、若し之を得ば世界の學術に取り宗敎に取り非常の功績なるを鼓吹せしに始まる、ソシテいよ〳〵これを實行せんとせしは故東温讓氏が明治十九年本願寺普通敎校に於て其計畫を立てたのが最初である、爾來今日まで西藏探檢の系統は

東温讓―河上貞信―河口慧海―能海寛

以上の順序となつて居る、マダ此外に寺本婉雅氏と、陸軍の人にて二三人あるが、これ等は西藏探檢を以て畢世の目的とすると云ふのでなく、ホンノ一時の計畫で已に挫折し畢つたのであるから別物とする、

◉東温讓氏は明治廿五年我が學術界に多くの功勞を殘して印度に客死し、川上貞信氏は一度印度より入らんとして英政府の防害を受けて果さず、再度の計畫は北清事變の爲に頓挫し今や三回目の計畫中である、河口

慧海氏は明治三十年九月十五日ダーヂリン、ラサビラより送りし手紙を最後のものとし、西藏の國境に入りた、果して、目的を達したかどーか否として踪跡を知る能はざる有様である、能海寛氏は明治三十年家族の繫累を絶ち、その目的を達せざれば生還せざるを矢ひ、最初に四川の巴塘まで入りて妨げられ、甘肅に入りて又妨げられ、今や雲南の方面より入らんとし最近の書信は四月十八日付を以て我々の許に達した

拜啓小生二月廿一日重慶出發界石龍岡等の十五站九百四十五清里を經て貴州省城に滯在二日の後三月十一日貴州を發し清鎭縣、安平縣、雲貴省界、勝境關を經て平鎭縣、白水等の二十一站一千一百六十二里を經て雲南省城滯在、四日省城及び吳三桂の修造せる金殿大和宮等を見物致し更に四月四日省城を發し安寧州、老鴉關等十三站九百廿五清里以上三計四十八站三千零廿二清里の西端にまで相達し候、途上二三の見聞を報道申上候へば、貴州の天主教の多きと殆んど各驛各府縣に天主會堂ありて信者も少數ならず、佛人來り教化せること、又た貴州は苗子と稱する人種の所住地にて貴州、廣西の兩省に涉り數百萬或は千萬以上にも達すべき異人種、異風俗、異言語のもの住居致しをると、又雲南省城には昨年舊五月暴民起り天主堂を一々燒き拂ひ擊ち毀はし堪忍强き佛國宣教師も引揚げたると、其他所々哥老會の鬧事あると、等に候但し佛人も小生滯省中再來開教に着手致候

四川省永寧に哥老會の暴起ありしも小生通過の地方よりは七八日も北方にして尙通過數日後の事件にて小生は幸に無恙通過致候間御安心可被下候

途上貴州の飢饉と每日の降雨と雲南の強風には殆んど閉口仕候、大理府は東に海睚あり、西に蒼山聳へ山水明媚にして山中大理石を生じ、禽獸山水の奇形あり、光彩爛たり、城外三塔寺の近傍百餘戶は全く此大理石の石工場にて他方に輸送するもの甚だ多く、墓碑、石碑等皆此石を使用致候、三塔寺は大一小二の三塔あり、大塔十五層約高さ百八十尺塔基五間四方、頂上金輪あり、唐代蒙氏此地に帝國を建設の時創立せしものにて觀音を安置し、唐代已來千有餘年間絕えず每年三月十五日より廿日に至る五日間各省より參詣するもの多く、之を期として各省の物產を持來り貿易するもの幾十万群集し、本年の如きも已に其期日に近づき、廣東、廣西、湖南、江西、雲南、貴州四川等より來れるもの日日增加し繁昌致候

睚海を渡り二站にて雞足山と稱するは雲南第一の靈山にして前山五大寺後山八大寺全山三百六十庵幾百の僧侶の住せる名山に有之候

大理府には目と齒のみ光り黑色なる熱帶人西藏人銅色人及び漢人の數人種雜居し西藏人は此內地より來るもの多く有之、されば殆んと漢蠻境界の如き觀ある地に御座候、提督軍門道臺衙門等あり戶數多からす三四千戶位と目計致候、明日出發麗江府に相向ひ候、重慶已來連れ來りたる雇人を飯慶致させ候に付右相認め近狀申上候早早

四月十八日大理府にて　　能海敬白

◉日本人の印度に留學したもの前後十五六人、其年月の最も長く足跡の最も廣きは河上貞信氏で、氏は十年

間の日子南は錫蘭より北はシッキム西は孟買より東は緬甸と、各短きは數月長きは三年間滯在して居つた、それ故本邦人中第一の印度通である、氏はダーヂリンに在ること二年喇嘛の寺にありて西藏語を學び、いよ〳〵の場合となりて妨害を受けたのである、

◉西藏に入る道路はいづれの方面から行くも一寸日本人の山とか溪とか難所とか云ふ頭では想像がつかぬ、富士山の高さを二倍にして其數を七八十も合せたならば大方の想像が付くだらうと思ふ

印度より
- 一、シッキムを經て入るもの
- 二、ネポールを經て入るもの
- 三、カミユミルを經て入るもの

支那より
- 四、打箭爐より入るもの
- 五、青海より入るもの

中央亞細亞より
- 六、カシユガルを經て入るもの

此中往來の頻繁なるは第一と第四にて、第一は則ちダーヂリンから入る者四百哩餘通常ダーヂリンと西藏の首府ラッサまで西藏駒に騎して二十日の日數を要す、此二十日さへ苦めば後は滊車で直ぐカルカッタに出らるゝから、支那の官人が兵隊を連れずして小人數の往返は大抵此路を取て居る、第四の打箭爐道は北京喇薩間の官道で、支那の將軍が交代する道路である、打箭爐からラッサまで九百三十五哩、他に一の間道あり、間道を取れば八百九十哩ですむ、蒙古から西藏に入るのは皆青海を經て行く

◉西藏の地圖は探險が行き屆かぬから勿論完全なものがない、喇嘛の坊サンの作りた地圖を其儘歐洲で刋行したのが紀元一千七百三十三年で、兎も角もこれが西藏地圖の歐人の目に入た最初である、云ふまでもなく不完全なもので、只村落の大なるものと道路の位地を示すに止まる、近世に至り南部英人の探險せし地方、北部露人の蹈査せしところ、西部カミユミルの勢力範圍に屬する部分は、完全なる地圖がある、此北部の方

は全く露西亞の佐官 Prejevalsky 氏の功勞で分明したのである、今日の處では西藏全躰の高度は一万呎から一万七千六百呎、東西の長千六百哩、南北の幅短きところ百五十哩長きところ七百哩と算ぜられて居る、人口も區々で露國からの調べでは六百万人と云ひ支那からの調では四百万となつて居る、西藏人に聞けば千五百万人も居る、

◉昔はトーバー(禿髮)と呼びし國が後訛して吐蕃となりテポットとなりテベットとなつたのである、マルコポーロの紀行にはTebetoとなりて顯はれて居る、西藏源流考に「舜徙ニ三苗於三危一。三危者爲ニ喀木一、爲レ危爲レ藏。喀木亦曰レ康。即今打箭鑪、裡塘、巴塘、察木多之地。危亦曰レ衛。即布達拉亦名ニ拉撒一。詔今稱ニ前藏一。藏即札什倫布。本拉藏汗所治。」と、本來苗族で其風俗から禿髮國の名が出たのであろー

◉朝家を出て空桶を提げた人又は婆さんに逢へば不吉なりとて引き返へして其日は出でず、其反對で水やミルクの滿ちて居る器物を携へたる人に逢ひ、若き婦人特に美人に逢へば其日は幸先良しとして喜ぶ、これは予がダーヂリンで實見したる西藏人が迷信の一ッである、かゝる類の奇習は隨分多き中最も有名なのは一妻多夫と示舌敬禮の二大奇風である、

◉モルモン宗と正反對に一妻多夫と云ふは此國の特色である、併し實際を聞けばこの一妻多夫も世人が普通に想像する樣なものでない、嶮絶の山國、部落と部落と相隔り、特に他國に出るは中々困難の國柄なのに拘はらず、西藏人は出稼國民である行商人種である遊牧人民である、一度家を出づれば半年一年還らざることが通例で四人の兄弟があれば一人づゝ交代に家に殘りて他は出稼ぎする其四人に一人の妻君を迎へるのであるから、一妻が多夫と恒に同居してをると云ふ次第ではない、つまり一寸見たところでは一夫一婦と同樣である、

最敬禮たる舌を出すことは嘘をつかぬとの證を示すのでもあろうが、人を迎へる時なと十人も二十人も整列して一齊にペロリと舌を出す有樣を見ては如何な者も

捧腹せずには居られない

# 平和の光

藤園主人

或は軍艦を艤ひ、或は刀劍を磨き、隙あらば直に突き入らんと睨み合へる世にありても、また綽々として餘裕なかるべけんや。千九百年佛國巴里萬國大博覽會のごときはいはゆる産物の競賣血を見ざる戰闘といはゞいへ、白人黄人赤人黑人、世界のあらゆる種族、一府の下に相集りて、相見相語り、相攜へ相行き、相食ひ相飮み、相戯れ相樂しみしは、世界大親睦會ともいかでいはれざりけん。

それも晝の間は、各館互に商品を競ひ、一歩にても、我は彼の上に出てん、この品にて彼を屈服せしめんなど力味合へれば互に虎視耽々のありさまなきにあらざるも、夜に入りては、是等の諸館を悉く閉され、たゞ平和の光のみぞ輝きける。

烏のねぐらに歸るおもかげこそ見えざれ、午後六時にて博覽會は各その館門を閉ち、あらゆる店員は皆家に歸れば、それより後は夕景色より夜にかけてのさまとぞなれる。大方の見物人も、一たびは家に歸りて更に入り來るもあり、終日の疲れを料理店に癒すもあり。平均三十万人餘を以て數へられし縱覽人なれば、時至りて是等のむらがり出づるさまは、潮のよするがごとく、軍隊のくづるゝがごとし。高さ百二十尺に上れる、會場の正門は一時間に五万人を通過せしむるなれども、是等の勢の出て來る時には、蟻の這ふ間もなく、して數時間にわたれり。その他東西南北の諸大門、夕べ〱のすさましさ名狀すべくもあらず。

此に最も珍らしきは、晝より夜をかけて經濟的に見物せんとする群れ〱なり、こは巴里人は少く、大方はいはゆる田舍紳士、又は赤毛布連、若くは何事にも勿躰無い主義を主張する老人組にして、一たび出でゝまた入るは、切符の二度買ひにて、勿躰無いと主唱して殘れるものどもなり。

是等の客を待つ爲に、氣早き商人は、會場の所々に麵包、肉の一切賣り、酒の一杯賣り、菓子菓物の一片賣りをする店を開きたるに、時至れば四方より集まり來るもの蒼蠅の肉に於るがごとし。彼等は僅に五錢拾錢を出して腹を滿たしむるに止まるのみにて、素よりその味の美醜等を問ふべき猶豫なし。立ながら食ひ立ながら飲み、或はその店邊に腰うちかけて談笑飲食せるもあり。素より家の内にあらねば、大抵の雨は傘にて蓋ひながら會食せるさま戰場のやうなり。更に最も節儉なるは、初より辨當持參にて入場するものともなり。是等は、こゝかしこの木蔭、また石段若くは橋の欄干、大厦の軒下等に、各々群を成して飲食せるが、その最も川に添ひて景色よき處などには、數万人相集まりておのかむき／＼食ひ詠れる、あさましきまでに、見受けらる。會場にて大庭園あり、大道あれば、無數の腰掛は据ゑられたれども、瞬く間に人々占領すれば、殘りの者は、持參の新聞を敷きて蹲けするもあり、半巾の上に踞するもあり。僅に十サンチームを拂へば、數千の椅子は押し出されたれども、千中の一二人ならでは、席料を出してこれに憑るものあらず。老人小供男女のむれ／＼、その色の白く、愛嬌ふかきほど、愈々節儉に、その脇香ます／＼臭く、その詞いよ／＼だみだるほど、必ず吝嗇なり。然れども他の方面より觀察すれば、この芝上の飲食、大道の立食は、即ち平民的世界親睦會にして、知ると知らざるとの別なく、互に相談し相與し相親しめるは、或は金殿玉樓中に宴會を張れる野心勃々たる政治屋に比して、その情掬すべきものなからんや、又或は人を欺き人に詐り、僅に債鬼の口を遁れて、紅樓に豪遊を試るものに比してその心中大に樂しきものあらん。されば眞の神は、彼を愛せすして、反て之を愛するも知るべからず。

夜に入れば五十四万方メートルを塞ける各種の大館には、數億万の電燈輝き合ひ、百八十万方メートルの土地には、こゝかしこに電燈相照らし、並木の枝々には紅燈所挾きまで聯れるなど、更にその美觀を添ふ。加之す千尺のエッフェル塔は、その頂上に廻轉電燈を置

きて、四方にその光を放たしめ、塔身を透間もなく五色の燈光を取装ひたれば、忽ちにして五色の火の柱に化し、セーヌ川には數十艘の舟を浮へて、烟火を催し音樂を奏するに、數千の球燈は各國旗と共に、檣上より四方に釣り下けられたるなといかで目も心も奪はれざらん。

シヤンドマルスの大館の正面をシヤトードーといふ。譯して水城となる。こはその館より數十流の瀧をおとし、又その瀧壺よりやがて數十口の噴水を迸出せしむるが故なり。さればたゞ晝の間は水中の殿のごとくなるが、一たび夜に入れば、その水に青黄赤紫等の火色を寫し出せば、忽にして水は紫となり赤となり、その下れると上れると、五色の飛沫空中に舞ふなど、この世の見ものならず、

是の殿とセーヌ川を隔てゝ遙に相對せるは、トロカデロー大宮殿なり。こは先年の大博覧會の遺物にして、常は博物館に宛てたるが、今回はその一部分を出品陳列場にあてたり。この大宮殿には、その頂上より下階に至るまで、數万本の瓦斯及び、水道管を引きたるが、夜に入りては水火交々迸り發するさまえもいはず。加之す殿前は一大花壇なるが、數多の光に照り合ひて百草の匂ひこほるゝなど、之をしも樂境といはずして孰處にか求めん。

會の爲に新に開きたるニコラス二世通りはシヤンゼリゼーより入り、アレキサンドル三世橋をわたりてアンワリードに通じたるがこは會場中の最大道路なり、この兩方に向ひ合ひて建ちたるが。大小の美術館なり。共に夜に入れば數万の瓦斯、雨だれのごとく軒につゞき、庭園の花卉の球燈電燈と輝き合へるは危險なき火事とも見らるべし。アンワリードの諸館も、同じく火の殿とかはりゆき、三世橋の欄干高う一種の色を放てるは、露佛同盟の光ともなどかいはれざらん。之よりアルマ橋に至るまで數丁の間川に添ひて、左岸には世界各國の建築、軒を接し孰れもさま〳〵の火光を放ちたるが水に映ぜるは、數万の錦魚の躍るとも見らるべし、その右岸には巴里の町と稱して、種々の興

行物を建てたり。狂言、物眞似、手躍、芝居、落語、手術、活動寫眞、電氣躍、さては人相見、手相見、辻講釋に至るまで、隙無きまでに滿ちみちたり。この間には珈琲料理店あり、花壇あり、音樂隊あり、恰も我か淺草奥山の大なるもの丶ごとく、川上一座も同じくこの町の一方に在りしが、さだやつこの嬌態は、端無くも万國人士の鼻の穴をわかしむるに至りぬ。

興行物といへば、成るべく艶に、成るへく派手に成るへく目に付くやうに裝ひ成すは、いつこの國も同し事にて、この町の光景は、會場中一種特別の光彩を放ちれり。その町はマルニエーの並木青々たるに例の紅燈房のごとくつらなりたるが、遠くより望めば風船玉のトンチルのやうにて老いも若きもうかれ出づるもさる事とぞおぼえし。

まことやエッフェル塔下、池に臨みたる處にパレーリユミヌー(火宮殿)とも稱すべき者あり。全殿悉く玻璃にて造り、夜に入れば數千色の電燈を點して、全殿悉く火に化せしむ。その裝置の珍らしきさへあるに、數多の見物人は、この火の間をねり歩くなど、焦けずやと思ふもおもしろし。

彼の辨當持參の經濟的見物人と、夕食後の散歩かてらの見物人とは、孰れも夜に入ると共にこの數多の火の一時に點せらるの有樣を見んとて七時前後になれば、蟻のごとくに集まり、蛆のごとくにうごめく。是等の人々の足を休めん爲に、數十万の椅子は所々に据えられたるが、時至れば一の空席だにも殘さず。かくて一塔に光を放てば万人拍手して之を迎へ、一樓に光りかゝやけば一同歡喜して之に向ふ。かゝる程に例の並木の球燈もやう／＼に紅うなり、廻轉電燈の光は、稻妻のごとく輝きかゝりて、こゝかしこに烟花の數も添ひければ、東に走り西に馳せ、その混雜いふやうもなし。夕風徐ろに吹き來て噴水の飛沫濕やかなるに流行の節おもしろき樂隊の一列練り歩くもあり、或は安南、或はダオメー、さてはアルゼリー、埃及などの土人、おの／＼その國裝して、灯提行列など爲しゆくに賑やかさの更に添ひゆくもめづらし。中にも埃及の蠟燭躍と

いふは、彼の國の古代の舞と聞ゆるが、略裝せる一婦人數多の蠟燭をそが頭、そが兩手そが兩足そか腹におまた差し立てらるゝが初の程は缺舌の歌、蛙鳴の樂と合せて躍り歩き、舞ひ廻はれるに、中頃より彼の婦人は地に寢ころびて、とざまかうざまに躰をひねるに、その火の消えさるがめでたしとて、人々見はやす又アルゼリーの行列の中に、さま〲の魚いろ〲の鳥などの形せる行燈を作り、大きなる棒にさし立てゝ、四五十人二列に、押しゆくに、その跡よりは、黑人の女王、轎に乘りてかつがれつゝゆく。そが前後には太鼓あり鐘あり、又騎兵の異やうなるが護衞し歩くなど白人どもの目にはいかにめつらしかりけん。

珈琲休息店は、或は川邊に或は樹蔭に、電燈まばゆきまで照らし合ひて客を徒つ。いつれも各國固有の服裝せる女ども多かれば必しも喉渇かさるも、こを見んどて出入するもの引もきらず。エムエム會社の世界一周パノラマ館中には、夜に入りて國々の芝居めきたるども催すに、我の國は彼の烏森の十六紅裙に代表せられて、手躍り歌うたひせる、涼しき夜も汗あゆるまでぞおぼえし。それも遲哇（ヂャワ）、印度等の土人の躍と並べられたるよ

セイヌ川に添ひたる大花壇は、一周日ことにさま〲の花を植ゑ換ふる習ひなるが、夜は數百の電燈の下にこの芳を競へる、めでたさは一しほ增すに、金色燦爛たるをとめがともの裳の裾長う曳きて、その間を縫ひ步けるなど、天女の遊び戯るゝがごとし。

舞踏殿に入れば、禮服を裝へる妙齡の女子は、素肌に金銀の頸玉手玉して入り來る人を迎ふるかそが愛窪はセイヌ川の底よりもふかく、そが嬌聲は、音樂の響きのそれよりも妙なり、此に於ていかて人種の異同をいはん。いかて國の東西を思はん引かるゝまゝにポルカ、マヅユルカ、そのむき〲に躍り明す紳士淑女。會は夜と今淸女は言擧げすべし、

三伏のあつさも、夜に入れば洗へるがごとく、商品競賣に各館に臂張り合ひしも日沒しては、別世界のごとし。黑人白人と共に笑ひ、黃人赤人と共に舞ふ。世界

親睦會のありさまは、夜に入りて初て見らるべし、嗚呼海牙の會議は遂に目的を達するに及ばざりしも大博覽會の夜景は、人をして軍艦刀劍あることを忘れしめたり。思へはこの輝き合へる電燈瓦斯は、世界平和の光なり。博愛人通の光なり。余は暗黒なる五洲の山川をして、速にこの大慈大悲の光を被らしめんことを待つものなり。

# 教界の人物

哄堂

## （十二）赤松連城氏（本願寺顧問）

京都西本願寺を訪ふものは先つ短躰肥肉、圓面豊頬の一老僧の出てゝ客に接し、圓轉滑脱の妙を極むるを見るべし、而して其老僧とは誰ぞ、曰く赤松連城氏其人也。氏は幼にして神童の稱あり、十一歳連城書の扁額は氏の郷里に於て尚殘存せるを見る、神童往々にして長して凡庸の人となるを見れども神童の氏は長して其神を失はず、才名隆々として夙に大洲島地諸老と共に本願寺の改革に與て功あり。

氏も亦尤も早き洋行者の一人として英國に留學することと數年、天縱の才氣は直に英語に達し英書に熟し、英文を以て眞宗大意をすら草するに至れり、されば氏の如き年輩なるものは勿論、後進學者に於ても正則の英語を遣り、兎に角外人に接してへの字なりにも佛教を說き得るもの、目下の各宗に於て、氏を除て亦幾人かある、本願寺が二十年來唯一の外交家として稱とするもの亦宜ならずや。

爾れども氏の洋行土產として本願寺に寄與せしもの獨り是の如くに止らず、氏は實に本願寺集會を開剏し、始めて教界に合議的外交を輸入せし人にして、其制度の利害得失を別問題として本派が大谷派に比して較財政の紊亂を防止し得たる集會論議の力與て大なりと云はざる可らず。

本願寺が明治八年普通教育を西山村に起し、諸宗派に率先して世界的智識を求むるに至りたる亦氏が世界的見地に發し、爾來大教校といひ、全國地方各小教校といひ、若しくは普通教校文學寮及び今日の高輪學院の如き少くとも氏が文勳に負ふものなくんばあらず。

氏は神童時代よりして六十年の今日に至るまで才氣少しも衰へず、逢ふ所のものをして推服せしむるに足る、而して才あるものの往々にして其才に役せらるゝの迹あ

れども氏は出處進退能く其才を用ひて明哲保身の訓に背かず、其圓滿美麗、一點疵瑕を留めざる君子的生涯の如きは寧ろ羨む可きの至なり。爾れども氏は到底才子也、大器量の人物に非ざるが如し。辯論に學問に才花映發して人を照輝するは自他宗共に其儔定て多からざるべし、而れども一宗の大問題を決し、山の如き重任を擔ふて謬らざるが如きに至ては知らず、氏は果して其人なりや否や。爾れども世圓滿完備の人に乏し。氏の如きは稍似たるものと稱す可きか。

## （十三）　清澤滿之氏（東本願寺の志士）

大學出身の學士博士花の如く亦雲の如く或は學者として或は官吏として實業家として社會の上層に飛揚するもの今や千百を以て數へんとす、而して其學を蘊み、其才を蔽ひ、敬愛能く意を宗門の安危に注ぐもの、清澤滿之氏の如きもの太だ稀也。氏の大學に在るや嶄然として頭角を露はして常に特待生の地位を占め、才學秀拔を以て推されたりしと聞く、氏にして若し名を求め、利を貪るの意あらんか、氏は夙に官費外國留學を命せられ、今頃は定て有力なる大學教授の一人となり居るならん、然り而して氏が大學の業を畢るや、是等世間の名譽に切々たらず、却て圓頭緇衣宗門の教育に力を致したる尤も氏が精神の在る所を見るべし。

所謂白河黨なるものは東本願寺の内政を改革せんとして起りたるもの也、當時同黨の烈熱的宣言は宗門の志士をして翕然として奮起せしめたりしのみならず、門外漢として寧ろ宗教に縁故なき徒すら尚同情を表して新聞に雜誌に其他種々の手段に依て之が應援に怠らず、一世の輿論として將に東本願寺の革新を見ざる可らざらんとし、而して其業大に成らず寧ろ頓挫したりしが如きは同黨の爲め否日本佛教の爲め慨す可きの至りと云へども兎に角東本願寺をして活氣横逸現今の政教界に大步横飛せしむるに至れる抑も又此改革運動に縁由せずんばあらず、而して此運動は實に清澤氏其人の手に起りたるを忘る可らず。

氏、短身瘦軀風貌揚れりと云ひ難しと云へども護法の精彩眉宇の間に發し、近接するものをして自ら感動せしむるものあり、精神界諸氏は實に氏が感化を中心として大に動かんとするものにして尚「ほとゝぎす」一派の子規氏に於けるが如し。爾れども此護法の護の字尤

も氏を累らし氏をして彼が如き意氣を有し彼が如き勢援を有し尚斷然舊佛教を根底より破壞する能はざらしめ、今日に至ては寧ろ東本願寺一流の俗群に役せらる如きは已を得ざる所と云ふべし。

聞く氏が年來の肺疾今や漸く重からんとし、鄕里三河に歸れりと宗門の爲め吾人は此有爲の人物の尤も加養を爲さんことを祈るもの也。

# 亂抽餘錄

三島位山

▲英國の古諺に「婦女の心と冬の空、變り易きが慣ひぞ」といへるは本邦の「男子の心と秋の空」といへるに句調相合ふて意味の反對なるぞおかしき、又「女の戀は酒罎に似たり其の甘味一時にして破れ易し」といへるは本邦の「七人の子は爲すとも女に心ゆるすな」の類ひか、又「處女は否と云ふも尚ほ接吻と指環と結婚の申入れは聽けり」といふは本邦の「相模下女否と顏振を堅にふり」といふに似たり、又「女の最初の意見は納るゝとも第二の指圖は聽く勿れ」と云ふは獨逸の「豹の餌を摑むは第一の飛びにあり」といふに均しく、婦人は多く其初め機敏にして男に優るも、後ち終に遲鈍に傾き易きを云ひ或はフランシス第一世は其宮中の壁に金剛石もて「婦人の心は變り易し之を信ずる者は其の根弱し」と彫付けたるが如き總て昔より婦人を卑しめたること東西其例均し、而して女尊男卑の風漸く高まるの今日尚ほ此の種の諺の大勢力あるは可笑し

「書を學ぶ者は紙を費やす、醫を學ぶ者は人を費やす」と云ふとあり、是固より概言なれば或は紙を費やさずして砂を費やす貧書先生もあるべく、或は人を費やさずして犬を費やす仁醫大人もあるべしと雖、今刀圭社會を通觀すれば、此諺の範圍を脫すると能はざる醫人先生十の八九を占む又險呑なりと云ふべし

▲豪傑ワシントンの小心、區々十三州の兵を提げて歐洲に雄飛したる英國に抗し、鏖戰數年、遂に世界未曾有の合衆國を建設したるは、其膽、天の如くなるにあらざれば能はざるなり、此大膽のワシントンは豪放磊落何事に對しても平氣なるかと云ふに、極めて物事に畏縮する性なりし、千七百八十九年國憲議會の開くるや、豪傑は撰まれて其議長となりしが、此撰に當るや逡巡畏縮して冷汗を流したりしも、辭避するに由なく遂に其席を占めしが、何事にも謹愼

にして小心翼々たりしと、彼のナポレオン第一世が兵を卒ひて暴に五百議員を國會より驅逐せんとせし時、一議員奮起して「此横虐者よ」と叫びし時は、流石の奈翁も逡巡猶豫したる由佛史に見ゆ、是は忌憚なき姦雄も正義の聲に勝を寒ふせしによるなるべし、ワシントン議長當撰に當惑せしは、之に異にして其從來行間に奔走し議場の事などには經驗なきを以ての故なるべし、されどもワシントンの才は軍事のみならずして兼て政治に長じたるは後年大統領となりて優に創始の政務を處理し、其の告別の演説は合衆國憲法と効力を同くし、米人はワシントンを稱して「平時第一等の人、戰時第一等の人、人望第一等の人」と云ひ、批評峻酷なるボックル氏すら「近世の史中兵事と共に政治に長したる者の一人なり」と云へり、且つ議場提理の任は唯才氣伎倆のみならずして、大に其人の德望に關するが故に功名宇內に振へるワシントンが其任を盡す固より難事にあらざること明なるに、其の本人は尙ほ逡巡猶豫して議長當撰に當惑せしこと此の如し、是一事を以てするも其人と爲りを知るに足るべし、蓋し此人の胸中、經驗なきことに過失多からむを恐れ、又其軍事の大功は自己の力にあらずして、天人の應効なりと信せしによるのみ、實にワシントンの如きは膽大心小の人と云ふへきなり

▲サンフランシスコの或る暴富家の介孃が歐羅巴へ保養に行かんとて出發に臨み、電信暗號の解書を父に與へたるが父は之を見もせで机の引出內に納め置きたり、然るに三週間を經て介孃の旅行さきより電信到來せり、開封すれば「笑」の一語のみ、是は面白しとて先つ一笑を催ほし、大機嫌大喜悅で彼の解書を取出して讀めば、何ぞ計らん「笑――余に五百弗を送る可し」と在ければ、親爺の笑ひも忽ちに止みたり

▲孫子十三篇は、之を約すれば「致ㇾ人而不ㇾ致㆓於人㆒」の一句に帰す、他は皆此一句の註脚たるに過ぎず、曹操が寧ろ我をして人に背かしむるも、人をして我に背かしむること勿れの言も此句意を應用せしに外ならず、蓋し曹操は孫子に深きものなれば自然此言を爲せしならん

▲和漢の兵書は七書を最とし、七書は又孫子を最とす、故に世人多くは孫子を以て兵家專門の書と爲す、殊に知らず孫子は變通の書にして、之を轉用すれば以て商業の掛引に供すべく、以て施政の顧問と爲すべし、是れ之を活用と云ふ、若し其活用を知らざれば、

縱令兵家にして之を背誦諳記するもかの趙恬の二の舞を爲さゞるもの幾んと希ならん

▲嫌疑は誤刑を生するものなり、昔蜀中、旱損して米價大ひに騰貴す、玄德民を令して酒を醸すことを禁ず、有司、醸具を有するものは酒を醸すものと同罪を以て罰せむと令す、時に簡雍、玄德に從つて遊ひ偶ま男女の道を行くを見、簡雍「玄德に謂て曰く彼れ淫を行はんと欲す何ぞ縛せざるや」と玄德怪んで曰く「卿何ぞ以て之を知るや」と簡雍曰く「彼れ婬具を有せり、而して醸具を有する者は醸罪を犯す、婬具を有する者は焉んぞ婬罪を犯さゞるを知らんや」と玄德大ひに笑ひ且悟り命して其罪を免るす、處士曰の善哉雍の言や、嫌疑を以て人を罪す天下何ものか罪すべからざらんや、彼れ舌を有す恐らくは激論を吐くならんと急に捕へて獄に下す、彼れ臀を有す恐らくは街上に屎するならんと警察に引て罰金を擬す、樓上友を會す酒宴を以て政談と誤認し、目を擧くれば盜かと怪しみ、袖を引けば賄ひかと疑ひ、其極天下を刑盡するに非ざれば止まず、是れ雍の諷言ある所以なり、雍の見る所大ひなりと云ふべし、夫れ嫌疑は誤認を致し、誤認は誤刑を致す、語に曰く疑心暗鬼を生ずと、盃中の蛇影能く人を疾ましむ、今の玄德たるもの深く愼まざるべけんや

▲口は是れ禍の門、舌は是れ禍の根と云ふ語あり、警戒の意至れり、而して俚諺に亦あり禍は口より出て病は口より入ると、此言更に情致あり



# 思潮

## 對外事業論

「實業の日本」　淺野總一郎氏

「貧國に來て金を費ひたくても費ふことが出來ない」とは我國に來遊する外客の常に洩す所の嘆聲にして吾人の屢々聞く所なり、卒然此言を聞く誰れか不快の感に打たれざらんや、然りと雖も、沈思默慮詳に之を玩味せば吾人は此裡無限の眞理を包含することを發見すべし、何ぞや曰く我國民は外人を對手として資金を儲くるには餘りに拙劣たること是れなり、試みに頭を回らして卿等の身邊を觀よ、氣は麗かにして善く躰に適し花は咲き鳥は歌ひ、山は緑に水は清く以て、人意を樂ましむるに足らずや、是れ實に歐米人の欽羨に堪へざる所なり、玆に於てか彼等は腰纒萬貫我國に渡航し、以て山に嘯き川に吟せんことを希ふ、嗚呼滿腔の樂みを抱きて來航せる彼等は如何に其豫想以外なるに失望落膽せるかよ、胃頭の談會々以て之を證するに餘りあり、巴里が世界の花の都と稱せらるゝに至りしは自然の賜に非ずして人工の結果なるを知らば東洋諸國の盟主を以て自ら任ずるの我同胞は三更夢驚くの時、三たび思を玆に致さゞるべけんや、然らば獨り歐米諸國に於て對外的事業熾盛にして我國に於て爾く振はざる所以のものは何等の源因に胚胎するかを精査し以て對外事業の振興を期圖するは焦眉の急務なりと謂ふべし、而して吾人の觀る所を以てすれば其重且つ大なる原因は實に左の二點に存せりと信す、即ち

（一）　我國民の精力薄弱なる事

（二）　資金の缺乏せる事

（第一）我國民の精力缺乏せる事　我國民は遺憾ながら歐米人に比し其精力甚だ薄弱なり、是れ實に對外的事業消長の岐るゝ所以の重因とす、彼の歐米人は一たび決心せる事は其成功を觀ずんば死すとも止まざるの根氣を有せるに反して、我國人は初めは炎々たる熱心を以て事に當るも小蹉跌に遭へば忽ち意氣沮喪して其業を廢するを常とす、豈に嘆ぜざる可けんや、而して所謂根氣なるものゝ彼我の間に於て斯く厚薄ある所以は何ぞやと問はゞ、吾人も其源因を彼我風土の別及び教育の方法異なれるに存せりと答ふるに躊躇せざるべし（中畧）吾人は如何にして我國民の精力を堅剛ならしむべき乎、自然の風土は亦以て人力の如何ともすべからず、唯夫れ教育の以て耐忍克己の精力及び萬里家を作すの膽力を養成せしむるに在るのみ、而して吾人は尙ほ我國民が、將來人口増殖の結果激烈なる生存競爭場裡に投ぜられ遂に自から萬里海を越へて瘴煙蠻霧の地に遺利を探らざるべからざるの運命に遇すべきことを豫言すべし、是れ其教育法の益々以て緊切にして豫かじめ國民をして其決心を養成せしむるの必要ありと謂ふ所以なり。

（第二）資金の缺乏せる事　如何なる事業を經營せんと欲するも資金の之に伴ふある能はずんば到底不可能の事たるは言を俟たず、而して吾人は特に對外的事業に於て其必要なるを認む、蓋し歐米諸國に於て對外事業熾盛にして我國の然らざる第二の原因は實に此點に存せるなり、故に對外的事業を興せしめんと欲せば資金を豐富にするの計畫を案せざるべからず、其方法としては外資を輸入する可なり、外人と合資共同事業を經營するも可なり、機關銀行を設立する亦可なり、吾人は荀も其方法にして對外事業の資金を調達し得ば可なりと信ず、而して就中希望に堪へざ

るは政府が直接間接に對外事業を保護せんこと是れなり、然るに世には政府の保護を以て徒らに私人若くは少數者を利するに過ぎずと非難するものあれども、是れ皮想の見たるを免れず、試みに外國航路奬勵の効果に就て精査せば之を知るに餘師あるべし、即ち乘客運賃百分中其九十五は外人の支拂ふものにして我邦人の支拂ふ所のものは殘餘僅に五に過ぎざるなり、果して然らば保護の効果も亦多大ならずや、世人尚ほ疑念を存せば請ふ去て獨逸商業勃興の跡に鑑みよ釋然として大悟する所あるべし。

## 金鵄勳章は軍人に局るべからず

「東京朝日」記者

夫國家に偉大なる軍功戰績を奏したるものあり。金鵄勳章は則ち其の功勳者に向つて授與せられざるべからず、何ぞ其の功勳者の軍人たると軍人たらざるとを問ふを要せんや。否軍人たらざる臣民にして、國家民人の危急に際し、身を挺んでゝ以て軍人的の勳功を奏したるものは、身を軍籍に委ねて國家の俸祿に衣食し、以て其の職務に勤勞盡瘁したるものよりも、寧ろ之を優遇し、以て國民の義勇公に奉じ、忠愛國に殉するの精神を鼓舞奬勵するを必要とす、乃ら金鵄勳章の如きも、職務の爲に勤勞したる軍人よりも、職務にあらずして奉公したる軍人外の功勳者に向て第一に授與表彰するを至當とす。而も輔弼の臣、大義に暗く、當局の士、法文に拘り、所謂偉勳殊功の士を軍人中に求むるを知りて、軍人以外に求むるを知らず、聖天子が國家臣民の爲に創設し玉ひたる金鵄勳章をして單に軍人のみに限れるが如く視做さしめ、忠愛の士をして何如なる殊勳を奏するも亦金鵄勳章の榮譽に與るとを得ざるの感を抱かしむ、是れ決して國家が臣民の士氣を鼓舞する所以にあらざるなり。

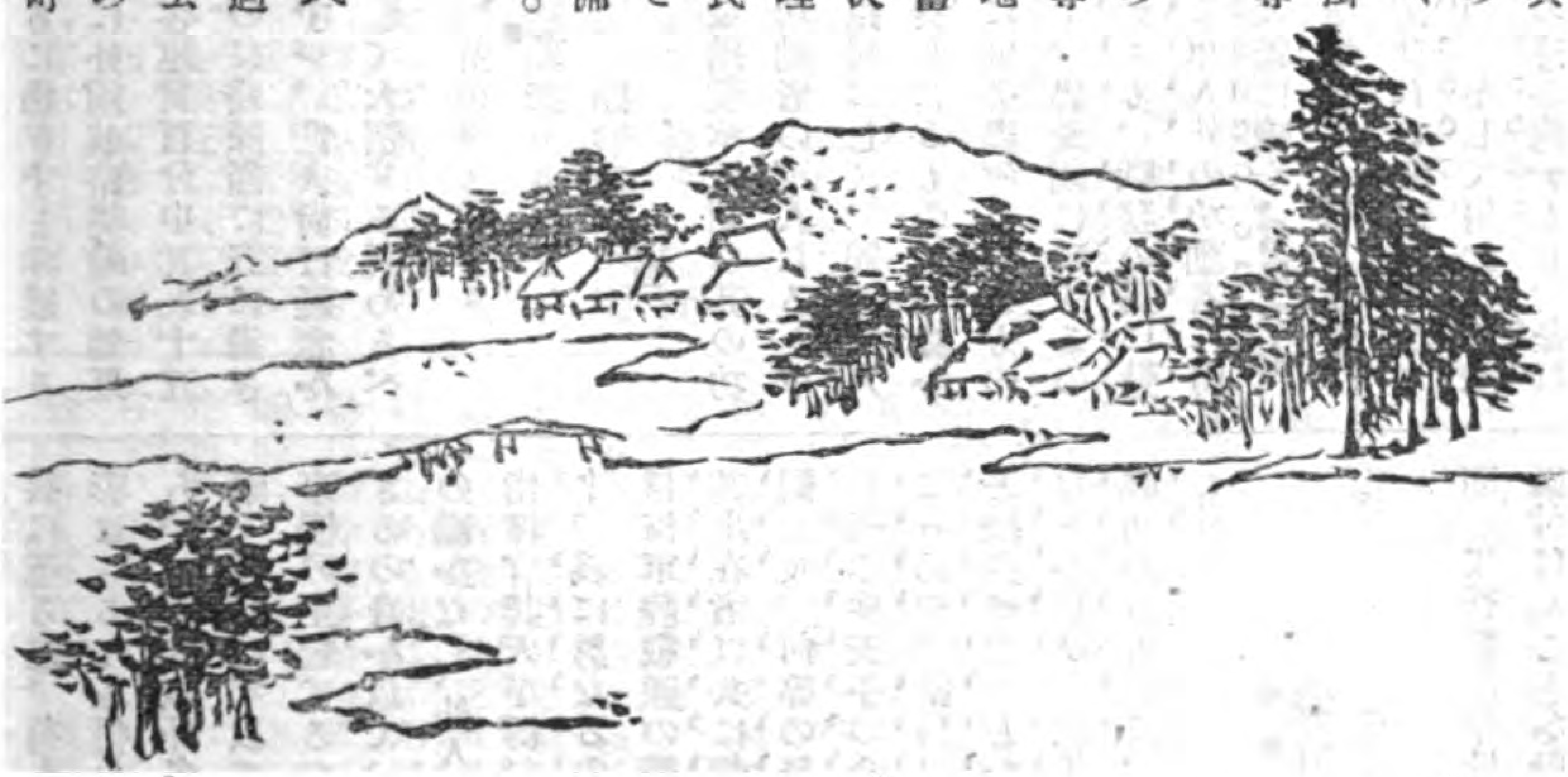
今や北清事變の論功行賞始められ、北京籠城の軍人は、將校より下士水兵に至る迄、苟も軍人たるものは皆金鵄勳章を拜受して、其の功勳を表彰せらるゝを得たり。而も北京籠城は軍人のみによりて行はれたるに非らず、軍人以外多くの文官あり、海軍陸戰隊以外、一種の義勇隊あり、兩々相助けて以て其の功を全うしたるものなり。北京に在留せる人士が事變の生起するや直ちに相議して義勇隊を組織し、軍陣行伍の事に慣れざるの身を以て、能く戰闘の危險を犯し、勇戰苦闘海軍陸戰隊と同一樣の働をなし、外人をして日本人士の義烈勇健なるを感嘆せしめしものは、指揮官其人を得たるに因ると雖も、又實に義勇隊員個々人々能く公に殉じ、義に勇なるの致す所ならずんばあらず、義勇隊中の戰死者五人の靈は海軍陸戰隊の戰死者五人の靈と共に同一の追弔を受けたる翌日に於て其生在者は共に籠城し辛酸を共にせる軍人の優握なる賞典を得たるを傍觀して、何等の榮典にも浴するを得ず、嗚呼是れ國民に義勇奉公を奬勵し玉ふ聖天子の心ならんや。又豈に辛酸勞苦を倶にしたる籠城軍人の心ならんや。當局の士宜しく軍人と非軍人とによりて金鵄勳章を授與すると授與せざるとを分つの不公なるのみならず、其の結果の及ぶ所、深甚なるを思ひ、以て其の固陋偏僻の見を去り、彼の敍勳軍人と同一樣なる戰功ある者には、宜く金鵄勳章を授與して、以て後來の新例を開くべきなり。

## 家庭と世界地圖

「教育時論」記者

而して吾等は今世界地理智識開展の一手段として、各家庭に世界地圖を備付けんことを勸奬せんとす、倘し家庭にして世界地圖を備付け、坐臥の間、常に之に注目するの便あらば、不知不識の間、世界に關する地理

的智識を修得し、地球の形狀に通じ、世界の大勢に明なるのみあらず、同時に愛國の精神を鼓舞し、其氣象を壯んにし、其心膽を大にし、國民的大事業の經營上に、資益する所、實に莫大なるものあるべし、之を家庭の多くが床間壁上に、花鳥風月の畵幅を掛け、若くは一種の意味なき漫畵、猥褻なる裸躰畵等を掲げ、國民教育上、何の資益する所なきに比す、固より同日の論にあらざるべし、吾等は歐米諸國の家庭が、概ね壁間及卓上に、世界地圖、及地球儀等を備置せるを聞き、其國民が世界的智識に富み、地球を見る我家の如く、海上を見る坦途の如く、勇奮猛厲、世界の遺利を拾收するに機敏迅速なるの、決して偶然ならざるを想ひ、飜て我國民の世界の地理に疎く、其一擧一動の、小事に齷齪し、更に大國民たるの襟度なきを慨し、之を救濟するの、一便法として、相當の家庭に世界地圖、若くは地球儀等を備付け、以て世界的智識の開展に資せんことを勸奬す。



## 感化教育と境遇の轉換

「社會」　留岡幸助氏

第一に感化教育に於て爲さればならぬことは、境遇の轉換と云ふことであります、夫はどう云ふことかと云ふと場所を違へなければ往かぬ、例へば猿樂町邊の不良少年であつてお母アさんの下にある者を猿樂町で直すとは出來ぬ、一言で云ふたら轉地療養見たやうなもので境遇を轉換しなければならぬ、それが感化教育に於て第一に必要であらうと思ひます。ナゼさうであるかと云ふと前にもお話し申した通り不良少年の出來た譯は惡しき境遇であります、一言で云ふたならば惡るい境遇が惡るい子供を作つた、家庭が惡くても、市町村が惡るくても、惡るい境遇が惡るい人間を作つたとすれば基督や釋迦や孔子が生れて來ても惡しき境遇で善き人間を造ることは出來ないと思ひます。其故に感化教育に於て第一に爲すべきことは遇境を轉換すると申すことであります。惡るい家庭と惡るい市町村博徒、掏摸、淫賣婦斯う云ふ者の家に住んで居る不良少年は其所を離して仕舞て良ひ所の境遇に移すことが必要でありまして、歐米各國に於ては斯樣な種類の學校の出來て居る所は必ず空氣の宜しい土地の高燥にして或は山川などがあつて天然の風景の宜しい所であります。（中略）惡るい兄弟惡るい親族、犯罪者、掏摸淫賣婦さう云ふ所に居つて惡くなつた人間即ち不良少年は人間のみの力を以て是を直さうとしても決して直りませぬ、ソコデ如何なる方法を以て改良するかと云ふに人間三分に天然の力七分の割合でやつたら宜いと思ひます。天然の力と云ふはどう云ふ者かと云ふに仕事をさせるには農業を以てし教育するのには其學校の位置は人里の遠い所で或は花が咲いたり川が流れて居たり鳥が啼いたり樹木が青々して恐ろしい高い山が

發へて居たりして人間が豫想し得ないやうな天然の分子の多い場所に斯う云ふ不良少年を集めて來て三年なり五年なり置いて普通教育もする、職業も授ける、又跡操も教へると云ふことにすれば不良少年の改良は決して六ヶ敷ことゝは思ひませぬ。我東京のやうな街の眞ん中に感化院を立てゝもドンナ良い教師が出て來ても不良子弟の改良は出來ないと思ひます、店頭を見れば麵包がある菓子がある、或は芝屋小屋があり、寄席があり、女義太夫があると云ふやうな所では眞正の改良は六ヶ敷い、(中略)人間三分天然七分の教育は不良少年に宜いと思ひます。到底巣鴨で此不良少年の感化は出來ない、彼所では感化事業の雛形を作つて仕舞には北海道に行つて石狩川の邊りとか云ふやうな自然の力の多き場所を撰んで感化院を建てる積りでありますが、私の一生涯中に於て出來るかどうか知れませぬが望みはソコにあります。東京のやうな所へ田舍の書生が出て來ると惡るくなる決して良くなることは稀であります、知識の上では良くなるが道德の上では墮落する、人間の集つて居る都會は人類の墳墓にして教育には適しない、天然の力に待つことは外かの人にも必要だが殊に不良少年に於て必要であります、

## 我軍隊の身長

「私立衞生會雜誌」　武谷水城氏

此徵兵は今日の所では御承知の通り段々師團も增し兵の數も多くなりまして、今日檢査を受る所は年々大抵四十萬人から四十二三萬人でありますが第一此者の身長の尺度でございます、身長と云ふとは脊の高い者は必ずしも健康と云ふ譯にも往かず低いから不健康と云ふ譯にも往かないが、併し軍隊では是は最も必要である、其寸尺は連年取つてありますが、是を先づ五尺以上五尺一寸以下、五尺一寸以上五尺二寸以下斯う云ふ具合に一寸々々毎に數等に分てあります、それがずつと昇つて五尺六寸以上は五尺七寸以上六寸迄も皆引つ括めて仕舞ふ、それから四尺八寸以下も同じく括めて仕舞つて年々比較を取つてありますが此比較表に依りて見まするとー番多いのは五尺一寸以上五尺二寸である、それに亞ぐのが五尺二寸以上五尺三寸であります、あとは段々上は上に少くなり下は下に少くなつて居る尤も師團の中で第八師團即ち青森、秋田、岩手地方それから第十師團の姬路、美作の地方其外二三の地方に於ては比較的五尺二寸以上五尺三寸以下の者が多い、併し是は誠に些かである、ソコデ全國括つて見るとー番多いのは五尺一寸以上五尺二寸以下則五尺一寸より五尺二寸迄の間の者であります、是は御承知の通り現今全國十二個師團外に近衞師團となつて居つて其下に五十二聯隊區がある、其一聯隊區で少きは十三ヶ所多きは三十餘ヶ所の徵兵檢査場を每年設けて檢査した結果が斯うなつて居る、其精しい表が爰にある、尤昨年のはまだ分りませぬ、三十二年迄は分つて居りますが、近く其三年間の比較を摘んで申しまするとニ十二年に於ては檢丁總員四十二萬〇〇二十人、此内五尺一寸以上五尺二寸以下が八萬六千六百四十人、是が一番多い、五尺二寸以上五尺三寸以下が八萬四千五百九十人是が其次で、あとは段々上下共に段々と少くなつて居る、それから其前年の三十一年は矢張同じ通りで檢丁の數の多少はあるが矢張比例の順は今の通りになつて居ります、其員數は一々此表にありますが管々しければ省きます、さうして見ると先づ我邦の此壯丁であります、身長は五尺一寸から五尺三寸の間が一番多い其中で五尺二寸以上の方は比較的少く、之を平均して見た所が五尺一寸七八分になつたやうであります」所で是を入營致しまして一年後に再び測つて見ると多少身長が增して居る、一番餘計增して居るのは三分位、增さぬ者も中にはあるが先づ增さぬ方は少ない、さうして見ると丁年以上

猶幾分か身體が伸びるものと見へます。（一等軍醫正武谷氏談軍隊と國民の健康中一節）

## 英獨の長短（形式國と實用國）

「慶應義塾學報」　松波仁一郎氏

先づ今申しました通り只だ市街を見ても又學校の制度を見ても軍制を見ても獨乙は形に於て實に立派であつて英吉利よりも遙かに優つて居るです、何が故に獨乙が斯く形が立派で總て整然として居るか、又何が故に英吉利が斯くまでも不秩序であるか、此原因には兩國の建國史が大に關係がある（中畧）

獨乙は此れ程込入つた國であるからして帝國の主義なり王國の意味なり憲法の事なりも總てキチンとして置かにやアならぬ事になつて居る、それが頭まへ染込で居るから凡ての事に規則々々と云ひ遂に不用のとまでも規則にからめて往くのであらうと思ひます、故に獨乙の規則が秩序整然として居つたからと云つて悉く之を眞似るのは我輩賛成しない所である、次に然らば英吉利は形式に於て劣つて居るが實効に於ても劣つて居るか、形式に於ては獨乙に一歩も優る所はないが實効に於ては何うであらうか、全體英人は何事にも餘り頓着しない自己の權利を重んじ自由を重んじ只だ實利を主とするさ云ふ精神であるから物の形に於ては諸國に劣る所があるが實に於て勝つ所がある、彼のトランスバールとの戰爭に連戰連敗をしたが之が若し獨逸であつたら何うであらうか、日本であつたら何うであらうか、二三遍戰ひに負ければ内閣の不信用が起り五六遍負ければ内閣が潰れませう、夫を彼の位負けても依然さして同内閣を信用して居るは感心である、負けて氣の毒ぢやと吾々は云ふた事がありましたが英人の答へにはなに初めは負けても仕舞いにやア勝ちませう、やつて居る内に戰爭の事も覺へますしと斯ういふ樣な行り方で一向初めの負けに頓着しなかつた、此クール　ヘッド極く物を冷靜に考へる精神が遂に彼國の大をなし、さ佛に比して個人として信用最も篤き人種となつたのである、



## 學生の墮落と教育制度

「大陽」　戸水寛水氏

中學多くして高等學校少く隨て競爭試驗に落第するもの多くこれらが下宿屋に轉込む中意氣の消沈となり不平の增加となり放蕩の端緒となるの情を述べて皆教育制度の不備によるとし偖曰く

斯の學生風儀の墮落を、救濟するに就ては今日の教育制度を改革せなければならぬと信じます。其改革の方策は、今日の中學に三つ種類を設くることが必要であります。一は大學の豫備中學校で、もう一は他の豫備校でなく、中學夫れ自身の目的を有して居る學校、即ち中流社會の人物養成を目的さして居る中學校です。而して此第二の方に充分に力を盡さねばならぬ、斯の如き學校に於ては數學や動物學植物學の如きものには、左まで重きを置かずに、經濟法律其他社會の狀態を今少し餘計に知らしめ、之を卒業して中流社會の任務を盡すに足る丈のものを教ゆれば充分であるのであります。斯くすれば大抵の人は自分の子弟を斯の學校に入れて教育させる樣になるのであります。並大抵の人が大學に入るのは誠

に過分であつて、高等學校を卒へて大學を卒業するには、餘程の學資金か必要である、今日の有樣では一ト通りの財産家にあらざれは、此の學資金は迚も出し切れないのである。夫れであるから大抵の人は大學に入らずして、夫れよりもう少し實地の方面に走りて學問を勉强する方が宜しいと思ひます。

## 武士的家庭の愛

「警世」　戸川殘花氏

余が知る所の一家婦ありき、明治以前に國學の泰斗を以て名聲ある家なりしが、其嫁は常に錦帶に九寸五分の懷劔を帶べり、此の婦をして夫婦の愛情なきものと云ふ莫れ、寧ろ纏綿の情は薄暮手を引きて街頭を徜徉する「ホ子ームン」の若夫婦より濃厚ならん、外冷なれば内熱するは人の知る所なり、外熱して内冷かなる手は、武士的家庭に非ずして、灰殼黨の家庭に存するを視る、嗚呼數年前熊本の士族に全家餓死せし者ありき、憐みを隣人に乞ひ、市民に求むるを恥ぢてなり、しかも鮮麗なる武具は、床頭に置けりといふ、余輩好んで奇激の文を草せんや、揭げ來りし三四の例は、武士的精神の今日に要あるを以てなり、家庭教育の饒舌を弄する勿れ、社會改正の贅辨を費す莫れ、死の一字を標準として行動する人士なくんば、忠も愛も改善も晝寢の夢の寢言と一般ならん、由來角兵衞獅子の子は脊骨軟弱なりとそ、翻轉して世を渡るの外なからん。

（武士道と題せる文の一節）

## 乙女の美感

「兒童研究」　宮田脩氏

都下、成女學校七十九名女子美術學校四十名合計百十九名の生徒留（中流以上の女子）年齡は十三歲より二十才までの間特に大多は十五六歲の乙女に就て同氏が得たる美感なるものは左の如し

- 自然美
  - 植物（櫻（三十八名）、梅（十四名）、蓮花草（九名）、菊（八名）、牡丹（八名）、躑躅（七名）、藤（六名）、松樹（三名）、芍藥（三名）、薄色の花（二名）、蓮（二名）、白薔薇（二名）、菖蒲（二名）、栗（三名）、紅葉（二名）、撫子（二名）、芙蓉（一名）、桃（二名）、菫（一名）、蓼（一名）、紫陽花（一名）、百合（一名）、山吹（一名）、女郎花（一名）、蒲公英（一名））
  - 動物（蝶（二名）、鴛鴦（五名）、孔雀（三名）、鷲（二名）、鷺（一名）、文鳥（一名）、鶴（二名）、）
  - 風景（月（十六名）、春野（九名）、海（八名）、白帆（五名）、山水の景（五名）、春山（四名）、雪（四名）、朝暾（二名）、瀧（三名）、晩景（二名）、雲色（三名）、庭園（三名）、堀の景（一名）、天然の景（一名））
  - 名所（松島（三名）、上野の夜景（二名）、富士山（二名）、日光（一名）、植物園（一名）、）
- 人爲美
  - 美術（繪畫（三名）、日本畫（三名）、縫取（一名）、蒔繪（二名）、美術（一名）、綾錦（一名）、吳服の粧飾（一名））
  - 雜（花火（一名）、金銀（二名）、美人の美服（一名）、人間（一名）、小兒（五名）、日本男子（一名）、唱歌（二名））
  - 道德（誠心（二名）、親切（一名）、智德兼備の人（一名）、善人（一名）、孝子の心（一名）、文よむ時の心（一名）、正しき人（一名）、品位ある人（一名）、品行方正（一名）、公德を守る人（一名）、）

意（以上の分類表て其の人數を合計すれば百十九名以上に過して居るが、是は一人にて二三種の品類を誌したものあるからだ）

右に就き同氏の附記說明せる中に以上の表て見ると、彼等が如何に自然美を愛して居るかゞわかる。勿論自分が人爲美と名銘した部類の內に入る高尙なる人工美即ち美術を愛好するもの、乃至美と善とを同一視して居るものあるが、其美術を賞揚するものは、成女學校の學生には一人もなくて、悉く日本美術學校の學生である。さ

## 嗚呼凡俗改革

「太陽」　高山林次郎氏

改革の聲は今の社會の四隅に響き渡れり、されど其の聲の如何に凡俗なるよ。國字改良論者は曰く、今の國字は實用に適せず、教育上徒らに無益の年月を費やすのみ、須らく改革せざるべからずと。言文一致論者は曰く、從來の文章は實用に適せず、教育上より見るも經濟上より見るも、歷史上より見るも、言文一致たらざるべからずと。風俗改良論者は曰く、現行の服裝は實用に適せず、衞生、經濟、道德の上より見るも百の害ありて一の利無し、宜しく改革すべき也と。教育改良論者は曰く、今の讀本の記すところは實用に適せず。今の外國語の教授法は實用に適せず。兒童の遊戲亦實用に適せず、宜しく教育的、道德的たらしめざるべからずと。凡そ今の所謂改革論者の唱ふるところ、概ね是の類のみ、何ぞ其の凡俗なるの甚しきや。

彼等の言ふところは經濟也、教育也、道德也、是を約すれば實用の二字に歸す。彼等は是の二字を標榜して天下の事皆悉ち革新し得べしとなせる也。嗚呼何ぞ其の思想の凡俗にして而かも單純なるや。借問す、實用の爲に人生ある乎。將た人生の爲に實用ある乎、抑々彼等の所謂經濟、教育、道德に於て是の大いなる人生の歸趣は極盡せられたりとする乎。吾等は素より實用を尙ぶ、されど實用以上に大いなる人生の歸趣あるを信ずる也。敢て彼等に告げむ、吾等は經濟の爲に活くるものに非ず、彼等の所謂教育、道德の爲に活くるものにも非ず、是等のものは人生が其の存在の目的を遂せむが爲に要求する事物の一部分に過ぎざるのみ。夫の凡俗的改革者流は是の本末を顚倒せり。

試に問はむ、彼等は其の所謂改革を唱ふるに當りて何故に文學を言はざる乎、何故に藝術を說かざる乎、何故に宗教を言はざる乎、抑々彼等は文藝の事を以て人生と關知する所なしとせる乎。吾等豈に改革を喜ばざるものならむや、唯夫の凡俗者流が淺近なる實用に拘泥して人生の大本を遺却するもの丶如きは、寧ろ初より改革無きを可なりとせむ、

今の多くの教育倫理學者の言ふ所の如きは、吾等殊に是を厭ふ。口林の外に趣味を解せず、功利の外に理想を知らず、拘々として力めざるに非ざるも、人生の大本歸趣に就いては貌然として會得するところなし。

議し今の凡俗者流の解するところの人は麵麭の人也。金錢の人也、能く世に處し、國に事へ、人に交はるの人也。是の如き人を造るは即ち彼等の所謂教育倫理の目的也。是の如き目的を遂する爲の運動は即ち今の凡俗的改革也。恐らくは世は是によりて無事ならむ、國は是によりて榮えむ。唯是の如くにして造られたる人の吾等の理想の人を去ること甚だ遠きを如何せむ。

## 本邦人の鑛物智識

「東京市教育時報」　神保小虎氏

（前略）然らば即ち現在本邦人の鑛物智識は果して大なるか中なるか、余は直に答へんとす小の小の小なる者と、

試みに西洋の下女に問へ、大理石、ダイヤモンド、ザクロイシ、ルビー、などは君知るやと、彼等は答へずして笑ふべし、更に日本の中學生に試みよ、汝が知る所の石の名は何箇あるやと、其人指を屈して「道路普請のジヤリの石、澤庵樽の壓しの石、お堀の崖の石垣さミカゲイシの手水鉢、學校の石板、硯の石、千代に八千代にサザレイシ、水晶、瑪瑙、琥珀、石炭、……跡は知らぬ」さ答ふべし、若し之よりも多く答ふれば鑛物科試驗の前日か、博物館行きの歸りならん、然らざれば夢中に諳記して心に覺へ無き石名なり、「ダイヤモンド」は噂に聞きしが物は見ず、石墨は鉛筆の心となりて毎日眺むれども原石は忘れたり、岩鹽はドイツ輸入の鹽にて見たれども其塊は見忘れたり、石油はランプの中に在るは知れども原油は知らず、硫黄は附け木の上にて見たれども山の硫黄は見し事なし、俵に入れたる石灰は左官屋には見馴れしが是を製する原物は知らず、瀬戸物は三度の食事に取れども之に作る粘土は知らず……何も知らず彼も知らず」と曰ふが如き有樣にては鑛產に富める日本を如何せん、

（鑛物學科要用論の一節）



評論

# 政界時言

城陽政客

## 外交私議

外交の事語り易からず縱ひ二十万噸の海軍三十万の陸軍在りと雖も樽俎の折衝其機を誤らんには鐚三文の價値なきなり、カブールは三千の弱兵を以て伊太利を列强間に尊重せしめたり外交上の成敗や何んぞ必しも强兵と云はん富國强兵や何んぞ必しも外交優者の地位なりと云はん外交家の重を爲す實に之が爲めなり我國が歐米各國と純粹なる條約を締結したるは嘉永七年三月三日のペルリ條約を以て嚆矢と爲す次て安政五年七月英國と條約を結び其外露西亞和蘭佛蘭西も亦踵で條約を結び後世之を稱して安政の五箇國條約と呼べり、是等の條約たるや實に我國民が四十年來苦心慘憺して其改正を欲したる處のもの、然るに二十七年七月に至り日英新條約の締結せらるゝあり仝年十一月には日米新條約の締結せらるゝあり、二十八年八月には日伊新條

約の締結せらるゝあり、全年九月には日露新條約の締結せらるゝあり、二十九年四月には日獨新條約の締結せらるゝあり、次で日佛新條約日墺新條約の締結せらるゝあり、今や我帝國は二三の點を除き純然たる對等條約を以て列國と交際を爲しつゝあり、開國進取の氣運勃々として國内に漲り遠人懷柔の國風漸次その實果を結ばんとす賀せざる可けんや。

## 忘る可らざる條約國

寰宇の上幾億の人口あり黄白異種の人類あり而して所謂文明開化の民と呼ばれ通商上の國交を結べる國家の數亦幾十を以て數ふ可し、邦土の大なるは露の如き米の如き英の如きあり、邦土の小なるは希の如き西の如き葡の如きあり、富力の大なるは英米の如き兵力の强なるは獨佛の如きあり、商業發達の驚くべきは米の如き獨の如きあり、進歩の途上に在るは米露の如きあり退歩の窮境に在るは西韓の如きあり、邦土大人口數千万文明的外觀の視るべきありて而も列國間より排出せられんとす墺國の如きあり、兵强く國民進取的氣力に富むも財政紊亂の爲め國威赫々たらざる伊太利の如きあり、世界最古の國邦土の大人口の多富力の無盡は惜かに列强間に横行濶歩するに足るべくして而も滅亡の悲境に沈み世界劣等國の一たる韓國より輕蔑を甘んぜざるを得ざる彼れ清國の如きあり。

夫れ斯の如く條約國たる各國はその國運に於てその發達に於てその邦土に於てその富力に於て種々の異同を有し幾多の懸隔を爲せり而も是等の條約國を見渡すに國民の忘る可らざるものあり諺に曰ふ「人を見て法を說け」と外交上の事亦然り對手の如何に依り我國の方針を定め我國民の注意を要すると必要なり、忘る可らざる條約國とは何々ぞ。

## 如才もなからん

副島伯が外務卿として清廷を叱咤したる外交時代より加藤高明君が露國を泉川にキメ込んだる最近の外交時代に至る間外務當局者の更迭は幾度なりしぞ而も開國進取の國是に順ひ條約國に對し或は平和的に或は武力的にあらゆる外交手段を弄したるは疑ふべくもあらず、現外務當局者の機敏なる其如才なきは云ふ迄もなし況んや事實上の外相桂將軍の透明敏活なる頭腦は外交家として適當なるを示すに於てをや。

幾多の條約國に於て國民の忘る可らざるは九箇國なら

ん、何々ぞ、曰く露西亞、曰く清國、曰く韓國、曰く亞米利加、曰く獨乙、曰く英吉利、曰く佛蘭西、曰く墺太利、曰く伊太利、就中現今及將來に於て國民上下の忘る可らざるその國情を知悉するの必要ありその外交動機の如何を注目するの切要なるもの三、曰く露國、曰く亞米利加、曰く韓國即ち是れ。

清國固より忘る可らず一日も注意を怠る可らず清國の存亡は帝國の痛痒を感ずる絶大なるものあり、今や國民の清國に注意してその國情を究めんと欲するは事々しく云ふ迄もなし二十七八年役以來且は昨夏北清事變以來朝野の熱心殆んど其絶頂に達せりと云ふも可、殊更ら疾呼して注意を促すを要せざるなり唯夫れ清國以外へ對する國民の警醒は大に疾呼痛言するの必要を認む之れ吾人が一歩を進んで私議する所以なり。

## 外交片影

外交上の手加減如何を窺ふこと尤も困難なり強いて揣摩億測を逞ふし以てその片影を認むるより外致方なしイデヤ我邦外交界の揣摩説を試みん。

シユレウツク、ホルスタイン事件に因り獨乙に開戰したる墺國はビスマークの鐵腕に扼せられ遂に老大國の仲間と爲らんとす歐洲の現勢一變せんか先づ第一に問題となるは西墺二國ならん墺國の將來は樂天的觀察を爲す可らず五十年後のウヰンナ朝廷は歷史上の一章として後世の讀者を喜ばしむるならんか。

伊太利半島の將來も亦樂天的にあらず去れど國内人種を同ふし國民の氣風活潑なるが故に地中海の雄邦として永く列强國の一たらん伊が南清に雄飛せんとしつゝあるは少しく滑稽の觀ありと雖も而も國民膨脹の氣風を顯はしたる一例と見做すべし。

伊墺二條約國に對する帝國の外交は所謂相互的方針なるが如し彼れ我れを利すれば我れ亦彼を利せん彼れ害を加ふれば我れ亦害を加ふべし、主我的外交の尤も顯著なる類例として視ることを得べし現今墺伊と帝國とは尤も親和なり之れ双方の間何等利害の衝突するなく何等の外交談判を生じたることなければなり、恰も他人同士は却て親族同士よりも親密なるが如し友邦として國民は深く墺伊二國に同情を表せざる可らず。

## 宿屋根性の外交

通商交際以外佛國と帝國とは何等の關心すべき問題なし若し佛國にして露の尻押とだに爲らざらんには我國

民の佛を恐むべき理由なきなり東亞に於ける佛の勢力は雲南附近に過ぎず帝國の勢力と衝突すべき範圍に在らざるなり佛は文明國の中心にして尤も適當なる廣告取次所たり帝國と佛國との通商上の關係や多大且深密なる利害を有す巴里ッ子や懷中無一文なるも外面を粧ふと富者の次男の如し佛國の國情亦然り外債數十億人口年々減少し兵力强なりと雖も而も露國の鼻息を窺ふの用に供するのみ佛國全盛時代は十九世紀に在りしなり。

佛に對する帝國の外交は恰も旅館女將がハイカラ紳士に對するが如し、愛嬌を振り蒔くも茶代の多からんを欲すればなり、不相變御ヒイキを願ふと云ふも內心は警戒して喰逃げを恐るゝものに似たり所謂宿屋根性主義なるものならん彼れハイカラ流を以て我に接す我れ又旅館女將流を以て彼れに接すると穴勝ち無理なりとは云ふ可らず場合に依りてはポンと一ト突き臂鐵砲を使用するも決して不都合にあらざる也。

## 禪問答流の外交

獨乙の發達は歐米識者の驚嘆する處なり英を凌ぎ米を衝かんとし南米に延び東亞に雄飛せんとす、二十世紀に於ける商工業國として獨乙は慥かに一等國たるに愧ぢざらんとす、資本は米人に富み手腕は獨人に在り獨人の商權は世界に行渡り獨乙品を使用するものは世界の各人種間に在り、近時獨乙の國是は商工業奬勵に在るものゝ如し赫々たる武勳に渴する軍人は事あれがしと待ちつゝあるも平和的獨乙は寧ろ俊秀なる商工業家を歡迎す、ワルデルゼー元帥の東亞派遣は龍頭蛇尾の觀ありき然るにアルベルス、チユリン等の西伯利事業は獨乙の商業をして東亞に隆々たる勢力を得せしめたりき數多のワルデルゼーよりも寧ろ一アルベルスの在らんと現時獨乙の希望する處ならん、兵力强く富力亦輕んずべからず獨乙は實に先輩國として尊信すべき也。

獨に對する帝國の外交は始め嚴肅なる師範として仕へ且つ親みたるが如く中頃ろ意地惡るき先輩に對するが如く敬し且つ用心したりき然るに最近のヤリ口を揣摩するに恰も禪問答流なるが如し、恭や〱敢親むとは親みつゝあり而も眼光をギロツカせ氣を緩めず彼れ如何なる問を發するならん我は斯くこそヤリ返さんなど考へつゝ外面殊勝氣に接近しつゝあり、彼れ支那保全の文字は滿州保全を含まずと云へば我れは我れの解釋

あり他の解釋如何は我れ關せざるなりと澄し込むが如く頗る禪氣を帶び居るなり、問答に熟せざる日本も早晩彼れの急所を知り彼の流儀を呑込むに至る可し。

## ●政界日記

松　翁

六月二十七日　新内閣の方針訓示の爲め地方官會議を開く桂首相の演說内海内相の訓示あり消極主義を示す

六月二十八日　地方官會議に於て文相大麓大に地方學政の紛雜を戒むる處あり文相一身に局長秘書官を兼ぬ

六月二十九日　桂首相園遊會を催ふし朝野の名士を招待す森ヶ池に嘯きたる無邊俠禪海外漫遊の爲め出發す

六月三十日　星亨を失ひたる關東俱樂部は新首領に都築鷄助を迎へんとす内海内相地方官等を招いて馳走す

七月一日　地方官會議に於て曾根藏相大に町村負擔の過大なるを戒め地方財政の刷振を警告す適切なる訓諭

七月二日　都築星の跡釜を据はるを辭退したれば星の子分等マゴ付いて伊侯に泣付く平田農相知事に諭す

七月三日　山侯首相を訪問す閣員氣脈を貴院に通ぜんと欲し内々奔走す伊侯奮起して大に地方を固めんとす

七月四日　財政整理は默々として調査せられつゝあるものゝ如く各省孰れも豫算調製に忙殺せられん有樣也

七月五日　東京市に於ける星の後任に金ケンを推薦す左官の親方に呉服店の若旦那を代人さ爲すが如し好笑

七月六日　北清事變終結せんとし各國撤兵を實行するに際し又も聯莊會匪の蜂起するあり清國の離一を加ふ

七月七日　健かに育立ち玉ふ迪宮殿下この日を以て川村伯邸へ御移轉あらせらる萬民謹んで御成長を奉祈す

七月八日　北清駐在第五師團長山口中將不日凱旋の途に就くべし撤兵は清帝回鑾を速むるの好手段喜ぶべし

七月九日　西藏法王ダライラマの使節露帝に歡迎せらるとの報あり世人茲に於て露の野心の絕大なるを疑ふ

七月十日　東京市會議長に米吉忠晴參事會員に金子堅太郎當選すペルリの孫ロージャス少將以下橫濱に着す

七月十一日　政友會憲政黨各々來年の總選擧準備に忙はし伊侯神戸岡山地方へ向ひ股伯關東北越に手を延す

七月十二日　政界の隱居たる板垣伯突如伊侯を訪ひ政友會改革の意見を述ぶ政論之が爲めやゝ賑ふに至れり

七月十三日　片岡尼崎札幌に遊說し加藤門馬等小樽に對抗す佐々陰約の裡桂子に通じ運動費を引出すと巧也

七月十四日　相州久里濱にペルリ渡來紀念碑の除幕式を行ふ米將及内閣各大臣參列す日米親和の兆觀すべし

七月十五日　印刷局に於て紙幣三万圓を竊取したる大賊あり朝野騷然たり露國の西藏竊取も又大問題たらん

七月十六日　五千万圓外債募集の風評あり藏相の意向は外債に存すると勿なり米と云ひ英と云ひ財界の王

七月十七日　長岡老翁清國より歸り大に氣焰を吐き近衞公北清に向ひ出發す對外的智識の進歩は賀す可き也

七月十八日　三万圓竊取の大賊上野停車場に於て捕縛せらる姓は熊澤名は鑑司貧ゆへの盜み社會問題の材料

七月十九日　この日山口中將眞鍋塚本福島柴等の凱旋軍人に叙勳の御沙汰ありたり國民歡聲を放つて祝賀す

七月二十日　政界平穩波起たず松西山井の元老等は午睡を貪り伊侯隈伯の二人血眼と爲つて東西に氣を配る

七月二十一日　露國は第二の滿州密約を締結せんとするやの風説あり滿州の大野はコサック兵の馳驅する處

七月二十二日　北京の喇嘛僧入京し珍客として世人の之を迎ふるもの多し西藏問題起りし際なれば無理ない

七月二十三日　貴族院團體交渉委員を派して首相と會見す財政整理地方行政等は當日の問題たりしと聞けり

七月二十四日　北京雍和宮貫首阿嘉喇嘛入京す新聞屋種子切れの爲め大騒ぎして吹聽に努む西藏問題起れり

七月二十五日　伊侯關西地方より歸臥し隈伯例に依て大法螺を吹き立て佐々忽ち廣大なる住宅に移轉したり

# 文藝時觀

## 成功の豫約

春潮

このごろ、某々作家の人に對つて語る所を聞くに、曰く拾年の後を見よ、曰く四拾歳に達せば大作を出だすを得んと。これらは、ともに當來の成功を豫約するものにして、而して、これをいふの裏には、今の時が準備の時代なりといふの意義をも含めり。けだし、わが文壇は、歴史よりいふも、作物よりいふも、なほ、いまだ青年の時代にして、大作に對しては、まことに準備の時代たらざるを得す。この故に、某々の作家が、拾年もしくは四拾歳を期するは、よく己を識るものにして、その覺悟、果してその言の如くんば、文壇の前途や、すこぶる多望なるといふべし。しかれども、當來のことは、ほとんど前定しがたく、人事意の如くならざるもの、すこぶる多し。某々の作家、今、十年の後もしくは四十歳を期して成功を豫約するも、期に及んで諸種の障碍踵出し、希望を實現し能はざることなしといふべからず。或は生活の計に齷齪として、準備をこらすの暇なく、或は青春時のあやまり易き逸樂に前途の大計を失して、豫約を遂成し能はざることなきを保せず。この時に於て、さきの聽者をして、違約の責を問はしめ、みづから顧みて、輕擧を悔ゆといふとも、遂に及ぶこと能はざる也。さはいへ、何人も、初めより違約せんとして前言するものなく、また、失敗を恐れて、當來を豫約する能はずとせば、希望は凡て公言する能はざるに至るべきの理也。要するに、成功の豫約は、作家にありては、決して難すべきことにあ

らず、否、かの飄々泛々、雲の如く萍の如く、風潮を趁ひ時尚に隨うて、終生なすなきものに比すれば、所信を公言して憚らず、これに向ふて猛進せんとするの意氣や、却つて大に稱すべきものあり、よし、期に及んで、希望、實現ある能はず、前言約を違ふといふとも。これを期するの覺悟や、遂に諒する所なかるべからざる也。たゞそれ、外に誇つて内ふるはず、口を當來の成功に藉つて、現時の不成功を塗糊するの徒に至つては、卑陋狡慧、唾して而して面皮を剝脫すべき也。

## 所謂文學新聞の哀微

新聞紙は明治文學の搖籃といひけん。逍遥氏、薑村氏の讀賣文學は、一昔前の語り草となりて、淸新の趣味を鼓吹したる國民文學は、僅に毎週附錄に名殘を止め、正太夫氏の國會、夙に仆れて、抱一庵氏の從吾所好、ふたゝび見ることを得ず、万朝のよろづ文學、名のみは今も存ずれども、いたづらに亡き白蓮庵をしのぶよすがとなりて、日本の舛氏、黑汁一滴にかへて病苦のあはれを思はしむ。直接に間接に明治文運の進步にあづかりて力ありし都下の新聞紙、或は仆れ、或は仆れざるも文學欄を撤し去ッて、殘るは僅に讀賣、万朝の二紙のみ。新出の二六、時に千八の心頭語をかゝげて、その範圍所見服すべきものなきにあらずといへども、こゝを以て、は倫理、風俗に局りて、純文學に及ばず、ひとり讀賣新聞、さすがに文學新聞の名見るべきは、昔ながらの特色を保つて、依然文壇の中堅なり、抱月其他の率ゆる月曜文學、燃犀の批評眼に一切の姸醜を別つて、文界のため、おのづからその嚮ふ所を諭らしむ。營業的自然の結果、新聞文學の哀微は、まことに已むを得ずとするも、今の如きは、また、あまりに甚しからずや。それ、金錢と權力とは人生の理想にあらず。新聞記者たるもの、何ぞ、しばらく、その時好に注ぐの眼を轉じて、文學のいかに社會人心を感化するかを思はざる。

# 文壇ごろく集

雷　公

▲乾蒲鉾の問ふ、「夏やすみ、君どこへ行く、山か海かそれとも龍城(うち)か、この夏に君」、出來星の子の答ふ、「この夏は、かれて思ひぬ、ちぬの海、堺へゆきて羊羹買はむ、」

▲これ近松、みが書きし五人女な和主(をぬし)が盜みしよりおのやうな不屆者が出來しぞかし。これは西鶴、いかな事、俺が何で和主(をぬし)のを盜まんや、

あれは俺のよりこそ盗みしなろ。いや〳〵神ぞ夫は嘘。詐文嘘でない。全く以て。なんでもない事、やい〳〵色法師。こゝな痩浪人、喧嘩をするならこひと戀。

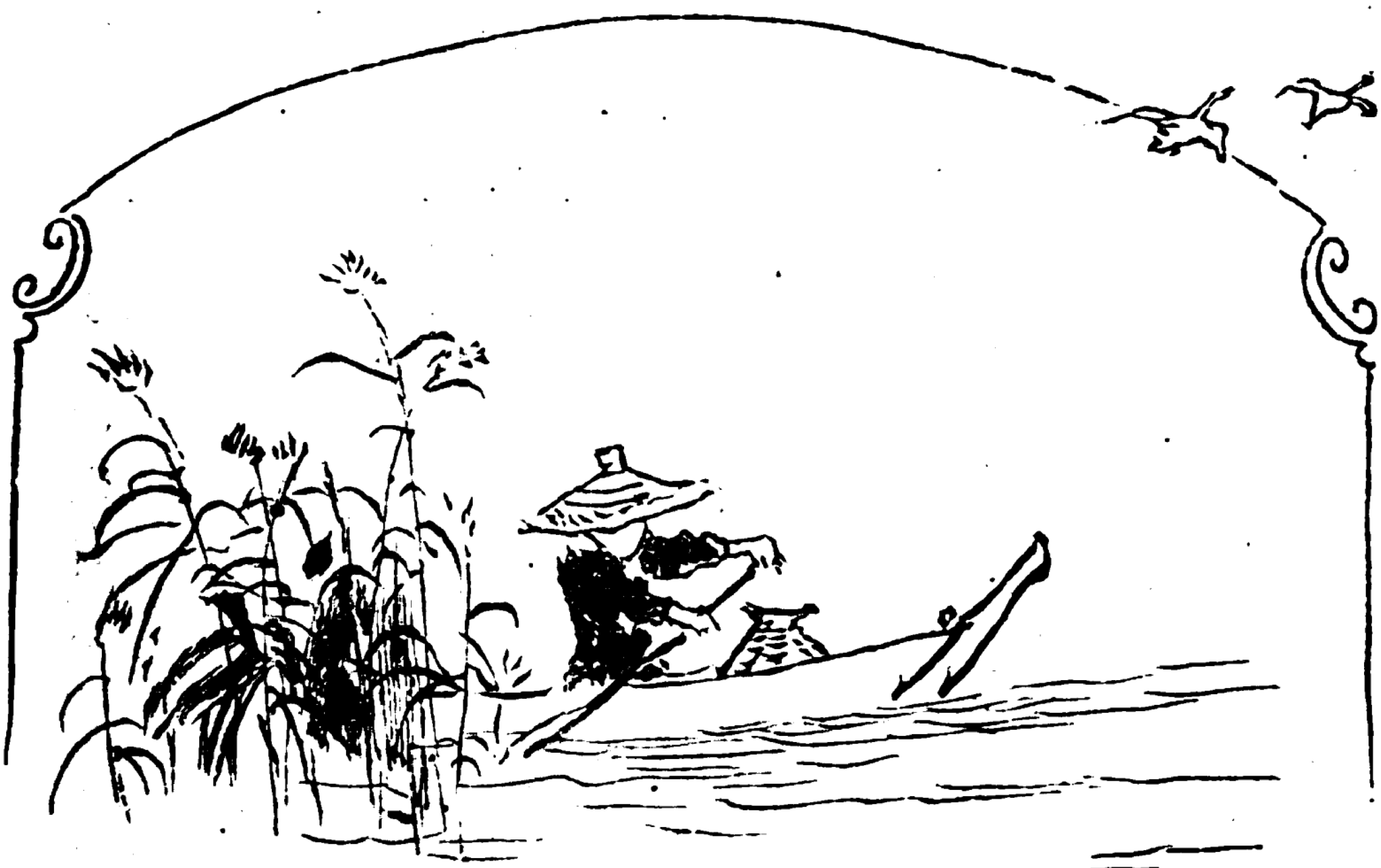
▲イッヒ、ハアベ、ゲルテ、デル、アウフノオデルング……貴様は是がわかるか、俺は獨乙を知つて居るぞ、答へて曰く「、アヽ、さうですか。

▲視學官恐ろ〳〵、『帝國文學』で私共に文藝講習會を開けと勸めて居りますが御賢慮如何で、役人髷をひれつて、源氏物語ちふ文藝は猥褻ていかんでの……、ヤッぱり子の曰はくがよかッペ〳〵。

▲君は此頃文壇がいやになつたか、それとも浮世がいやになつたのか、どつちか早く局をつけたまへあなかしこ、露伴子へ、梅花道人より。

▲息子から來た言文一致の手紙を、親爺が眼鏡越に披いて、何々でござりますでござりますか、へん、をれを小兒だと思つて御座候だ。

▲おい〳〵貴公は毎日腰辨て何處へ出かけるか、何さ嗜すいきを見やうさ思つて、して御手前はか掘か掘もその矢つ張不動の瀧へ日參さ、と、二人の若者が話して行く跡から、あれ〳〵あれだから百圓は容易ぢやれえ。



▲「近頃の小說なんぞ輕蔑して讀まないから文學についての談といつては更に無い」、あゝこれ前の文部大臣尾崎行雄氏の言也、と、不知庵が見なら二重圈點だらう。

▲これ〳〵三馬、見さつし、「今の小說家は何うもまだ戲作者肌がぬけ無いやうで、三馬や京傳の調子が餘程あるやうに思はれるですな、あゝいふ風では立派な小說は容易にできますまい」と、京傳が讀んで聞かせるさ、三馬は江戶の水を製らへながら、へん、それめ〳〵、今の小說家より俺の方が餘程巧えぞ。

▲おい〳〵本屋、鳳晶子の『みだれ髮』がまだ出來ないか？え、唯今印刷中ださうで、ぢや幸ひだ、内容はどうでもいゝから諸者の肖像を忘れないで卷頭に挿んでくれ。

▲貴方は漱石のかいた倫敦消息をお讀みてすか、中々うまいものです、と、十徳を着た若隱居がいふさ、どふしても、こちの夏目さんですよ、と、ツーチング邊りでレデーの聲。

▲記者足下、彼は文壇の盜賊也、僕の新小說に投じたる漢詩を剽竊したる也、どれどれ紙を見せな、記號にきつさぬの字ぢやれえか。

▲講習會へ來た中學教員が打寄つての話に、僕の方はいろんな雜誌を出して戀歌の講義をさせられるので困る、さ、國文科の受持がこぼせば、英語科の受持が頭をかいて、いや御同樣、僕の方もニイチエだの、ロセッチだのと教科書にない人の傳記を質問されるのでさんと閉口。

▲此頃面白い題目は『新文』へ出た「美人の進化」、拙もあれがために祇園のを廢して新橋へ致しやした、と額を撫でゝ美人學の講義、隣で聞いた『別世界』の記者が、なや／＼それは此方へ貰ひたかつた。

▲英吉利倫敦に興行中の川上音二郎近若の日本新聞を見て、チエーさ無念のこなし、貞奴が慌てゝ取りすがり、こちの人、どふしましたえ？こ……こ是を見ろ、何、沙翁作シーザア、明治座にて伊井蓉峰一座出演……、こちの人、ざ、殘念ざやわいな、と、屹と向ふを見るに。此模樣柝子なして舞臺が廻るさ、久松町の樂屋に伊井、舌を出して居る體。

▲「本誌は五月五日創刊可致の處本會發起以來種々の中傷、迫害に遇い心ならずも大に延引致候」はてさて御ちうしよう樣、はくかいの奴でござるの、但し是だからいはれえ事ぢやねえ、青年文學雜誌の弊……さ、何處やらで聞いたやうな聲。鐵幹首を捻つて曰く、此迫害はをれの方の迫害と同じのか、知らぬ。

▲三文字舍金平の玄關番一山百文字舍銀平といふ但し附の大家から、「是非載せい」さ命令的に舞ひ込んだ投書ふる／＼ものでそつと披いて見ると、

文學者になる法は乃公の師匠が大發明なれども反故になつて紙漉の手に渡つたり其處で乃公は詩人になる法を傳授して聞かさん、オホン詩人にならんさ思はゞ態々高い授業料を出して赤門や早稻田へ入るに及ばず横濱の廓清會へ行つて照覽鏡を授かり明星に向いて毎日、天地玄黄を百万遍宛唱ふべし、其中に虎に乘つた朝鮮のますらを、白百合を以て現はれ善哉々々といふ故、眠つて居らぬでも夢みた氣で目を覺ますべし、夫より此ますらをに連れられ紫の揭幕を潜れば夫で大願成就、詩人の仲間人が出來たのなり、夫から『白紅』さいふ雜誌の「鐵幹雜話」を上の空で讀みヌタさもブタとも附かぬ味噌一文字を捻れくれば六號活字から五號活字へと段々神樣がお引立て下さる、さうなつたら愈々大丈夫、「星」、「鼓」、「白桃」、「白百合」杯を「京の水」で解いてベタ／＼と頬へ塗り附け時々はふさぎ込んで共鳴さめそ／＼し、折々は肩を怒らして迫害さやらかすべし、併し是は眞面目にやつては大變、聲色を使ふ氣でやるべし夫から偸暇があつたら論文を切抜いてギヨーテのローレライ、ロセッチのインメモリアム杯と特別智識を少々振り蒔き又、水彩畫をぬたくつて清かりし曲線の美……と嫌な身振をすべし併し其手本は誰彼といふまでもなく新聲社で出た「水彩畫の栞」て澤山なり、

夫から忘れてならぬ事は西洋詩人の詩集を買つて机に積み重ね讀めても讀めぬでも是見よがしにひけらかす事……と、『此處迄いて來たが月末ぢやない、月杖て擲られると思ふと、書く氣がなくなつた、だが、なんさ乃公の師匠よりうまかろ／＼。

# 教育時論

## 戸水寛人氏に申す

警醒子

馬鹿でも呆氣でも、大學さへ卒業すれば、それで學士

といふものになることが出來、馬鹿でも呆氣でも、學士といふ肩書さへあれば、それて世間は高く買ふのである、馬鹿でも呆氣でも、高くさへ買ッて貰へば、父母妻子を養ッて行くに困らない、要するに肩書で飯を食はうといふのが、今の時の學問をするもの、學問をさせるもの丶第一義となつて居る。苟も教育のことを彼是言はうといふ程のものは、これしきの消息は解して居なければならぬ。

戸水寛人氏『太陽』紙上に「教育制度改革一斑」と題して論ぜられたところは、學生風儀墮落の現狀を救濟する方法を述べられたもので、その學生墮落の原因として捕へられたところは、確にその原因の一ッてあるといふことは疑ないことであるが、その救濟の方法として述べられたことについては、一二の異存がないでもない。

氏の說くところによれば、「今の中學に二つの種類を設け、一つは大學の豫備中學で、一つは中學それ自身の目的を有して居る學校、即ち中流社會の人物養成を目的として居る中學校で、そして後の方の中學校に、充分力を盡し、これを卒業さへすれば、中流社會の任務を盡すに足るといふことになれば、大抵の人は、自分の子弟をこの學校に入れるやうになる、從ッて高等學校や高等商業學校などの競爭試驗に失敗を重ね、遂に墮落し了るといふものが少くなるのであらう」といふのである。吾等も早晩この二種中學說が實際に行はれるやうにしたいと考へて居るのであるが、現在の狀態から考へて見て、大學入學希望者の澤山なことが、アノやうな勢では、豫備中學でない中學の成効しないことは、請合であると考へられる。それよりも寧ろ、高等學校及大學を增設して、志望者の總べてをどし〳〵收容し競爭試驗といふやうなことを無くするやうにする方が、却つて近道ではあるまいか。

又氏は「並大抵の人が大學に入るのは、誠に過分で、高等學校を卒へて大學を卒業するまでに、餘程の學資金が必要であッて、今日の有樣では、一ト通りの財產家でなければ、この學資金はとても出しきれないのである、だから大抵の人は大學に入らずに、夫よりも少し實地の方面に走ッて勉强する方がよい」と言はれたが、至極御道理なやうであッて、しかも未だ事情を盡さないところがある。前にも言ッた通り、「肩書で飯を食はう」といふのが、今の學問をするもの、學問をさせるもの丶心願なのだから、どンなヒドイ面をしても、

………己を欺き人を欺き、徳操を破り節義を賣ッてまでも、……大學に入らう肩書を得やうとアセッて居るのである。戸水氏の謂はゆる並大抵の人及びそれ以下の人程、大學に入らうと望んで居るものが多い、それは言ふまでもなく、他の專門學校を卒業しても肩書がつかぬ、肩書がつかなければ飯が食へぬからである。却つて樂に大學でも卒業させられる程の資産のあるものは、食ふ食へぬといふことに心配がないから、必ずしも大學へ入らなくッてもよい、專門學校でもよければ、戸水氏の謂はゆる豫備校でない中學校を卒業したゞけてもよいのである、イヤ吾等は實際さういふものが多いと聞いて居る。

現時學生風儀の墮落したその原因はいくらもある。從ッてこれが救濟の方法も、一ッや二ッではとても効果が收められまい。たゞ戸水氏の見つけられた原因に對する戸水氏の救濟方法は、あまりに正直すぎて、實際の効果がどうあらうかと疑はれる。それよりは寧ろ高等學校及び大學を增設して、肩書熱にうかされて居る連中は、餘さず漏さず收容してやるやうにするのが、最も適切ではあるまいか。

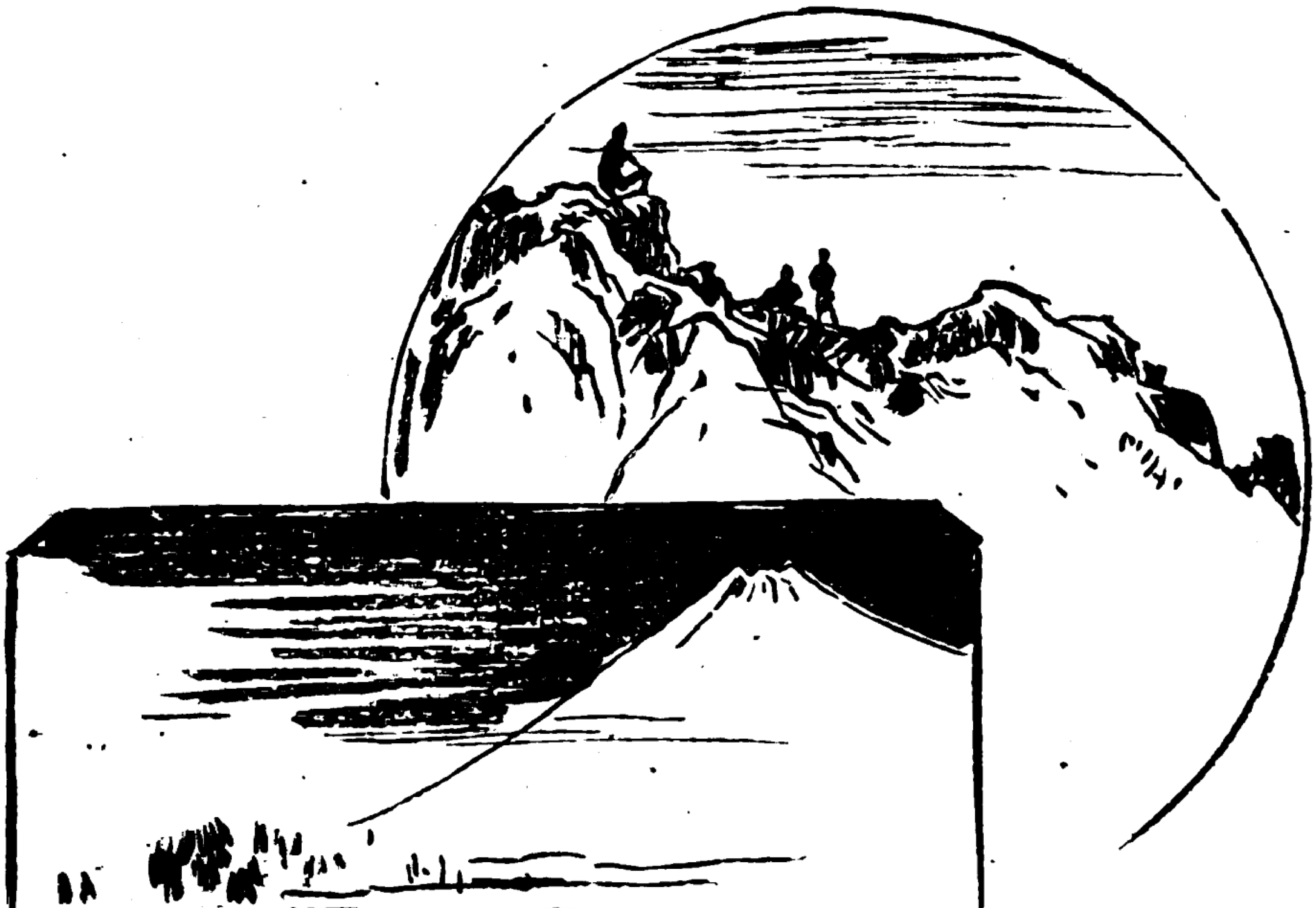
## 校舍と生徒

活潑なる精神は健全なる身躰に宿るといへるなり、校舍の設備が完全になるだけ、それだけ教育の功果が著しく顯はれて、生徒の成績が佳良にならなければならない筈であるが、吾等の經驗は、我等に敎ふるに、確に正反對の結果を以てするのである。設備々々と八釜しく言ッて、ますく\教育を機械的にし、沈香も焚かず屁もひらずの群小輩を作り出すのと、軒傾き雨漏る程のあばら家からでも、社會に何等かの貢獻をなし得る人物を作り出すのと、何れが勝り何れが劣ッて居るだらう。吾等は設備過重の弊にも堪へぬものであるし、又敎育者の手腕の、甚だ大きくないにも驚いて居るものである。

## 學童の貯蓄

日本人には、兎角金錢を卑しむといふ癖があッて、中等以上の生活でもして居る人の家庭では、その子女の錢勘定の出來ないのをお自慢のやうに心得、隨ッて貯金をさせるとか、貯蓄の精神を熾にするとかいふやうなことを、無下に排斥するものが多いのである。その

クセ、金錢の前には、道義も顧みないし節操も賣るとを辭しないといふ程に、卑劣な根性を持つて居ながら、吾等はこの金錢を卑しむといふ弊を矯め、貯蓄の精神を熾にし、宵越しの錢を使はないのを以て、名譽のやうに心得て居るものや、明日のお米を氣にするやうなもの丶、なくなるやうにしたいと思ッて居るのである。故に曾て小學兒童に貯金を奬勵するといふとのあつた時、大にこれを鼓吹したのであつたが、此の頃また財政當局者の中に、今後小學校で賞品を授與する時には、物品の代りに物品相當代價の貯金通帳を授與して、一般國民の貯蓄心を養成しなければならぬと唱へる人があるさうだが、蓋し一個の名案たるを失はない。



何事でも、その弊を見ては勿論鼻ッ摘みである。金！。金！、金でなければ夜があけぬと、灰吹一流に溜められた穢さとなつては、もうこれ貯蓄の其精神が沒却されてしまつて、寧ろ文なしの清廉なるに如かないのである。教育の任に當るものは能くこの呼吸を飲み込んで、守錢奴的根性を起させないやうに、注意しなければならぬ。

## 言文一致會と俗論

「便利だから言文一致に贊成だ」といふこの便利一點張りの言文一致論者程、言文一致の進歩發達を障碍するものはない。勿論言文一致は便利であるに相違ない、しかし言文一致には、も少し大きな意味がなければならぬ、も少し確な根底がな

ければならぬ、從ッて幾多の研究、……極めて眞面目なる研究、極めて熱心なる研究、……を要するのである。しかるに言文一致會々員の多數は、この便利論者であッて、便利といふことの外には、何の研究も必要としない連中ではないだらうか、かう思ふ度毎に、吾等は言文一致の將來が、氣遣はれてならないのである。

## 江原素六氏の教育談を讀む

七月廿三日の『讀賣』紙上に、「東京市の教育」と題して、江原素六氏の談が出て居たが、その中に、

先づ注意すべきは小學教育で、先達も日本橋の教育會から、何か演說をして呉れとの事であつたが、一體日本橋區では、どんな修身書を讀ましてゐるか、其本を遣して呉れといつた處が、普及舍出版の修身書を送つて來た。其本を見ると、一年から四年まで、藤田東湖、佐久間象山、中江藤樹、紫式部、林子平といつたやうな人の性行を書いたものであつた。

商業の中心點とも云はるゝ日本橋邊りで、此樣な倫理書でよいものか。いらつしやいお歸りなさいといふ商家の子弟に、學就り業遂げてから、始めて志すべき人の性行を倫理書とした處で、根から功が薄い。夫よりはもつと卑近な、直ぐに役の立つやうな事を教へ込まねばならぬ。又女子にして、商家の女が紫式部になつても困る。

といふ一節があッた。教育のことに精しい氏の言としては、チト受け取れないところがないでもない。

何事でも、實際の事情をヌキにして立論すれば、隨分立派な議論も出來るものであるが、さういふ議論は、イザ實行といふ段になると、あッちへ衝きあたりこッちへぶッつかッて、なか〳〵始末におへないものである。

江原氏のこの議論も、議論としては至極結構であるが、結局日本橋區は日本橋區に適當な倫理書を作れ、本鄕區は本鄕區に相應の修身書をこしらへよ、日本全國各地方で、その地〳〵に適當な倫理書を作ッて、それで教授しなければ効能がないといふことになるのであるから、少しく教育界の現狀に通じたものは、直にその不可能であることを合點するであらう。

言ふまでもなく、小學校は小學校であッて、商學校でもなければ農學校でもない、隨ッていらッしやいお歸ンなさいばかりを教へてもならないし、鉄鎌の使ひ方をのみ授けてもいけない。未來の大臣もこゝから出る、未來の教育家もこゝから出る、僧侶も軍人も、商も農も、あらゆる階級に活動すべき人々が、悉くこゝから出るのであるとしたら、何れを輕しとし何れを重しとする譯にはゆくまい。いくら日本橋が商業地であるからッて、苟も小學校である以上は、その說くところの

倫理も、小學校的でなければならない、況やいくら日本橋區が商業地だからッて、生れ出るものが、悉く商人となるに限ッた譯でもあるまいから。

吾等は、普及舍出版の修身書といふものを見ないから、どういふ材料が、どういふ風に配列してあるかは知らないが、小學校の修身書の編輯には、一定の主義方針があッて、それによッて當局者が檢定するのであるから、普及舍のそれのみが、格外に不都合な編輯の仕方であるべき理由がない。又東湖、象山、藤樹、式部、子平、といふやうな人々だけしか舉げてないといふこともないのである。つまり日本全國の小學兒童は、略同一なる修身讀を、略同一なる仕方によッて、教へ授けられなければならぬのでもあるし、又教へ授けられて居るのでもあッて、獨り日本橋區の小學兒童にだけ、特殊の修身談を教へ授けるといふ理由は、毫もないのである。

要するに、江原氏の議論は、小學以上の學校に向ッて始めて効があるかも知れないが、小學校に對しての說としては、何等の御利益もないのである。

## 理想團

朝報社同人の發起にかゝる理想團は、七月廿日、神田青年會館で、發會式を擧げたは、非常な盛會であッたさうだ。社會人心の腐敗墮落は、今や殆どその極に達したのではあるまいかと思はれる。口に筆に、何と叫んでも何と書いても、些も救濟のきゝめが顯はれて居ない。畢竟、今の時は、言ふの時でもなければ、書くの時でもなく、實にたゞ行ふべきの時である。天下の人、その多くが、先づ自ら醒めて、而して人を覺ますやうにならなければ、社會の腐敗墮落は、蓋し永久に續くことであらう理想團の宣言もよし、誓約もよし、團規もよし、要は團員今後の行動云爲が、よくその宣言を實にするかどうかにあるのだ。

## ちりづか(明治三十四年六月廿四日から七月廿三日まで)(全)

◎霖雨幾旬　身も心も濕ッぽくなッて、議論も實行も共にものういからでゝもあるのか、この一ヶ月間は、諸方の學校の卒業式と、夏期講習會の廣告とが目につく位で、教育界は、とんと「午眠澀」の躰たらくである。

◉東京市の國民學校設置　過般東京市參事會が協定したる國民學校(無授業料)は、一校につき一萬四千圓の建築費を投じ、四谷鮫ヶ橋、芝新網、下谷万年町及淺草、本所深川の內二校、都合五校を建設すろことゝし、一校三百五十人乃至四百人の生徒を收容し、凡そ五學級

に別ち、筆紙墨等の消耗品は之を給與し、その他の要具は總べて貸與する筈で、經常費は一校一ヶ年四千圓の豫定ださうだ。又土地の狀況に依ッては、手工を課し、勉學の傍ら多少賃錢を得させるやうなことにするのださうだが、大によろしいことである

### ◉東京市內小學校の夏期休業

市立小學校長七十四名の總代といふ名義で八月一日から仝三十一日までと規定してある小學校の夏期休業を七月廿一日から八月三十一日までに延長したいといふ建議をなしたところが市學務委員會ではそれを可決したさうだ「人家稠密空氣汚穢從て各種傳染病流行し易き地に在て炎熱の候多數の兒童を諸般の設備完全ならざる學校內に集め一定の課業に從はしむは兒童身體の發達上其の害不尠と認められ候」といふのがその建議の理由ださうだもつともなことである。

### ◉中學校長會の建議

新潟縣に開會したところの第一地方部中學校長會では、(一)高等學校設立の制を改むる事、(二)立體幾何復活の事、(三)學校禮法を一定する事、の三ヶ條を文部大臣に建議したさうだが、第二の立體幾何復活は、菊池文相の宿望であるべき筈だから、建議するまでもなく、さうなるに運びはあるまい

### ◉京都帝國大學文科大學

理、工、法、醫、の各分科大學の設備が、畧緖についたからといふので、來年度から、文科大學を開始しやうと、それぞれ準備中ださうだ。京都大學には、一番最初に設置せられるのが當然であッた文科大學が、一番後廻はしになッたといふのも、蓋し何かの因緣であらう。

### ◉高等敎育會議組織變更運動

學制研究會が、本年高等敎育會議議員の改選期を機として、その組織變更を企て、委員を置いて頻りと運動して居るさうだが、その變更しやうといふ要點は、特選議員を增加する事、職務上當然議員たるものを削減する事、常任議員を置く事、議員中に府縣視學官及び府縣實業學校長の若干員を加ふる事、等であるさうだ。近來高等敎育會議もだれて來て、ねッから香ばしいこともなくなつてしまッたから、何とか一工夫なくてはならぬ時である。

### ◉各學校卒業式

東京音樂學校では六日に、高等商業學校及東京高等工業學校では八日に、陸軍地方幼年學校、東京美術學校、及び東京帝國大學では十日に、京都帝國大學では十二日に、その他各高等學校、私立專門學校などでも、大抵卒業證書授與式を擧行した、子規子の句に、「子子の蚊になる頃は文學士」とあッたが、なるほど七月は卒業時である。

### ◉スクリッパ氏の歸國

廿五ヶ年といふ長い年月の間、我が醫科大學に奉職して、熱心に子弟の薰陶に從事し、大に我が醫界に貢獻せられたところの同氏は、このたび願によッて解雇となり、去月歸國せられたが、文部省では、同氏の功勞を表彰しやうがために、名譽敎授の稱號を贈ッたさうだ。當になすべきところを爲したものといふべきである。

### ◉東京市敎育會長

星亨氏が凶刄に斃れてから、その後任者について、いろいろ議論もあつたやうだが、多分江原素六氏が擧げられるだらう。政治家だッて、敎育家だッて、軍人だッて、僧侶だッて、何だッてかまふことはない、眞面目に市の敎育の爲めに働いて吳れる人でさへあれば。

### ◉經濟辭書

松崎法學博士等が、一大經濟辭書の編纂を計畫せられたさうだ。辭書といふものは、何れの方面のものでも、調法なものであるが、殊にこの種の辭書は、この種の人を俟ッて始めて完きを得られるのであるから、若し出來たら、これを歡迎するものは、たゞ吾等ばか

りではあるまい。

●商業學士　高等商業學校專攻部の規則を改正して、もと一年課程であつたのを二年課程としてから、今年始めて十二名の卒業生を出した、同時にこの卒業生に對して、商業學士の稱號を許可せられた、即ち我國では、これが商業學士といふものゝ嚆矢である。

●新博士　六月廿九日、高田早苗氏外三十一名に、學位を授與せられた。博士といふものゝ相場も、段々下落して來たが、そのために、學士といふ怪しげな肩書を振り廻はして得々として居る、士偶木像輩の巾が利かなくなつて來たのは、氣の毒千萬である。

# 宗教時言

## 苦熱語

雜　郎

●宗教を呼ぶの聲

近時、學者の側より、教育者の側より、實業家の側より、政治家の側より、一齊に宗教を呼ぶの聲高まれり、而も從來の如く浮氣ならずして忠實に此問題を研究せんとするが如し、蓋し一國の地盤問題に向てやふやく彼等の自覺せるを以てなり、最も喜ぶべきの兆候となす、此自覺有て日本國は長へに死せず

●消口は何處よりすべきか

火已に燃へ上れり、悠々として消口は何處よりすべきかを愚圖々々評定するは、倫理學者なり、教育學者なり、宗教學者なり、政治學者なり、宗教家はコンナ馬鹿らしき小田原評定に仲間入りして一國の灰燼となるを待つべからず、只喞筒に奔れ、只消火栓に奔れ、火中に投じて家財を引き出すべし、焔煙を犯して人命を救ふべし、要は實行の敏速に在り

●先づ自家に燭を携へよ

暗夜を尤めんよりは先づ自家に燭を携へよ、今の學者、今の教育家、今の政治家、徒らに墮落呼はりをなし、腐敗呼はりをなし、不平呼はりをなす、皆これ暗夜を罵り怒るものなり、而も永久自家に燭を點せんとはせず、憐むべきなり

●風教の墮落を歡迎すべし

軍人は戰爭のヲッ初まらんことを禱り、刑事巡査は疑獄の起らんことを欲し、醫師は惡疫の流行を望み、相場師は天候の不穩を希ふ、其意志の根本に於て大に誤るところ有りと雖も、自家の技倆を顯はし、自家の本領を示し、自家の利益を得んとする業務に熱心なるものゝ免れざるところなり、此の意味に於て社會の腐敗信仰の墮落は宗教家の正に大歡迎をなすべき事な

り、現代は宗教家大持ての時代に非るか

◉宗教家の相場

質の悪き品にても、需用多くして供給の足らざる時は、多少にても相場の昂るべき筈なり、宗教家の需用最も多き今日、宗教家の價評トン／＼拍子に下落し行くは有り得べからざる不思議の現象なりとす

◉下落する所以

上白米の欠乏せる時は、南京米を以て辛抱すべし、然れども米に代ふるに砂を以てすることは到底能はず、上白米の看版を揭げて房州砂を賣る、其米屋に買手の集まらざるは素よりなり、宗教家の看版を揭げて宗教を賣らず、相場の下落當然の事とす、余は今の宗教家をしてセメテ上白米無き時の南京米たらしめんことを望む、羊肉無き時の狗肉たらしめんことを望む

◉骨董佛教

佛骨の奉迎、紀念のお祭り、阿羅漢の托鉢、喇嘛僧の御下向、何ぞそれ骨董的たる、何ぞそれお開帳的なる、何ぞそれ興行物的なる、以て好奇心を呼ぶべし、以てお賽錢を集むべし、以て珍重すべし、以て愛玩すべし、日本の佛教は淺草珍世界の大仕掛けなるもの

◉此次は何ぞ

何等かの興奮劑を投ぜざれば昏死する舊佛教は、宗教法案や、佛骨奉迎や、お祭り騒ぎを以て注射液として命脉を繋ぎ、今や喇嘛僧正を以て之に當てたり、此次に來るものは何ぞ

## 大學傳道の餘響

京都にて本派本願寺は京都大坂神戸大津の間に大學傳道を試み、東京にて救世教婦人佛教團なるもの起りて女子の一團彩旗を擁して所々に傳道を試みつゝあり、此種の摸倣、此種の影響は最も歡迎すべし、今東京市内基督教第一回大學傳道の結果を聞くに、左の如し

### 東京市大學傳道統計

▲●運動期日　自五月十二日至六月三十日

▲●聯合區別　第一區　京橋區　○第二區　芝麻布赤阪の三區　○第三區　日本橋下谷淺草本所の四區　○第四區　四谷麴町の二區　○第五區　神田本郷牛込小石川の四區

▲●聯合教會　聯合せる各教派の數左の如し

| | 教會數 | 教役者數 |
|---|---|---|
| 美以教會 | 五 | 一一 |
| 英米監督教會 | 六 | 八 |
| 日本基督教會 | 一五 | 一九 |
| 福音教會 | 六 | 八 |

| | | |
|---|---|---|
| 洗禮教會 | 六 | 九 |
| 日本メソヂスト教會 | 五 | 八 |
| クリスチヤン教會 | 四 | 七 |
| 長老教會 | 一 | 一 |
| 組合教會 | 二 | 五 |
| フレンド教會 | 一 | 三 |
| 美普教會 | 一 | 一 |
| 合計 | 五二 | 七九 |

（注意、教役者とは、今回の運動に就て、自ら陣頭に立て働きし人々にて、猶こゝに洩たるもあるべし）

▲**來會者**　祈禱、説教兩會の來會者は

| | |
|---|---|
| 聯合祈禱會 | 一萬一千六百二十六名 |
| 説教會 | 八萬四千二百四十七名 |

（路傍説教聽衆の數は詳ならず）

▲**献金**

| | |
|---|---|
| 第一區 | 金六百餘圓 |
| 第二區 | 金二百四十八圓四錢 |
| 第三區 | 金九十七圓七十八錢 |
| 第四區 | 金百九十二圓六十二錢五厘 |
| 第五區 | 金二百十八錢五十七錢 |

合計金一千三百五十七圓一錢五厘餘

（注意、以上の金額は、聯合運動に於て使用せしものにて、各區支出項目一定せず、ある區に於ては辯士車代をも支出せしに、或區に於ては之を各教會の担當となせしが故にかく等差あるなり、されば實際使用せし金額は少くも倍數以上なり）

▲**悔改者及求道者**

| | |
|---|---|
| 第一區 | 一千二百二名 |
| 第二區 | 一千二百十七名 |
| 第三區 | 四百十七名 |
| 第四區 | 一千三百十九名 |
| 第五區 | 一千百五十四名 |
| 合計 | 五千三百九名 |

▲**傳道隊**　有志者の組織せる同隊は如左

| | | | |
|---|---|---|---|
| 新橋教館傳道隊 | 二 | 自營館同 | 一 |
| 立教中學同 | 一 | 東京中學院同 | 一 |
| 福音同 | 一 | 學生同 | 一 |
| 九段美以教會同 | 一 | 牛込教會同 | 一 |
| 青山學院同 | 一 | 靈南坂教會同 | 一 |
| 一番町教會同 | 一 | 本郷同 | 一 |
| 聖愛教會同 | 一 | 番町教會同 | 一 |
| 平河町教會同 | 一 | 其他 | 一 |

合計　二十七隊

（注意、合計は二十七隊なるも其他と記せる分は名稱明ならず故に暫くかく記し置けり）

▲**印刷物**　印刷せしめしもの左の如し

| | |
|---|---|
| 廣告紙 | 五十七萬枚 |
| 張札 | 三千七百十枚 |
| トラクト | 三十一萬部 |
| 救の歌及大擧傳道歌 | 二萬八千八百部 |

合計　九十一萬五千三百十

これを全國の統計に見ば、隨分莫大なるものならん

# 毎月通信

（前一ケ月）

▲本月教界の風聞は喇嘛の貫主阿茶師にて持ち切り候、水道の鉄も大學の鼠も、評判一寸途絶へし時、獨り宗教界のみならず世間一般喇嘛僧の風説のみに御坐候

▲西藏や喇嘛に就ての新知識を世人に與へしは全く此一行渡來の餘恵と存じ候

▲阿欧波羅摩（アンベラマ）と云ふ譯の分らぬ宗教首府の小石川に本據を据へ、新諦や占ひにて教育の欠乏せる人民を引き入れ居候、聞けば田中宮相の家庭も其信者の一人とか承はり候

▲一妻多夫の西藏宗教も來り、一夫多妻の宗教モルモン宗も入り來り、いよ／＼日本は世界宗教の博物館と相成り候

▲帝國東洋學會は九月より會報を發刊し、一層會務を擴張するとの事に候、高輪學院よりは同じく九月高輪文學と云へる雜誌誕生可仕候、又佛學院よりは凡聖と云へる雜誌發行の由に候

▲井上圓了氏の前月より哲學雜誌に掲げ初めし余が所謂宗教は近來の快文字に候

▲教界の雜誌界耶佛共に不振を極め候、獨り「新佛教」は例に依て大氣焰に御坐候

▲村上専精清澤滿之諸氏の本山と和衷協同はボツ／＼物議の種と相成居候

▲宗教小説の世に歡迎せらるゝ時代と相成候、無盡燈記者は之に就て其例證を擧げて中村春雨の無花果が如何に世人をして賛嘆の聲を放たしめしよ、徳富蘆花の不如歸が年を重ねずして十版を重ねしといふにあらずや。己が罪然り。思出の記然り。と申候

以上

# 社會小評

## 此偏頗を救ふべし

里山

同じく北京に籠城せるの士なり、艱苦を共にし功勞を一にし、一方は軍人たるが故に公使館員たるが故に、勳章の榮を擔ひ恩賜の典を授かる、一方は平人たるが故に同一の恩典にあづかるを得ず、諸氏は素より勳章恩典の爲に誠を盡したるに非ずと雖、世人は之を見て實に異樣の感有るなり　（これ一）

十二歳より三十四歳、二十二年の長日月勤續せる職工の一朝病を得て老母妻子を養ふの苦に堪へず、昨の善人忽ち三万圓の大窃盗と變ず、軍人なりせば如何、官吏なりせば奈何、二十二年の勤續は優に年功加俸を受けん、恩給を受けん、遺族扶助料を受けん、善人は長く善人として惡人と變するの事無るべきなり、彼れ熊澤某と同窮况にあるものに向て其心事を問へ、誰か中

心より彼に向て一種の同情を寄せざるものあらんや、世人は皆此社會的偏頗に向て無上の感慨に打たれたりき（これ二）

二十人三十人新に博士の名譽を擔ふもの近來何ぞ多き、而して恒に大學に關係あり官邊に因緣あるもの丶みに授けらる、而して民間の學者に向て授けらる丶ものの何ぞそれ數少きや、宮廐に在るものは駑駘猶銀鞍を飾り、邊野に在るものは神駿猶朽櫪に伏す、天下の伯樂は皆其偏頗を罵れり（これ三）

軍人たらざるが故に同一の功勞に勳章無く、官吏たらざるが故に異常の精勤者も恩給を貰ふ能はず、大學に關係無きが故に同一以上の學者にも其資格を與へずこれ皆前一ヶ月間に吾人の目擊せる社會の偏頗なり、か丶る依姑の沙汰にして矯正せられずんは、社會の秩序は思はざるの邊より思はざるの破綻を來たすべきは明瞭なりとす、經世家の最も注意すべき事ならずや

## 日曜日問題

基督敎の一部にて日曜休業の勵行を主張するものあり、基督敎週報の如きは日曜休業勵行會なるものを組織せんと云ふ、七日に一回の安息日あるは可し、然れども彼等が理想せる如くこれに依て精神上の修養を得んと云ふが如き、これに依て社會の墮落を救はんと云ふが如きは大に考へものなり、我國に於て日曜日は遊山日なり、墮落日なり、否獨り我國のみならず、基督敎の本家本元たる歐米に於て然り、酒店の繁昌日は日曜なり、醜業婦の繁昌日は日曜なり、法王の所在地羅馬の如きは特に甚しとなす、我國今日の社會組織に於て前後の考へも無く國民一般に日曜の休業を與へんとするは安息日を與ふるに非ずして罪惡日を與ふるなり、か丶る事を主張するもの又直譯主義の弊に出ず、先ず日曜に於て現在に休みを有する官吏、會社員、敎育家、學生の日曜日を害用するの弊を防がんことを力むべし、先づ汝が敎會信者の家庭が日曜に依て却て汚濁の空氣を呼吸するを防ぐべし

## 寄席の改良建築

前月講談師に向て猥褻に亘る讀物盜賊の讀物を禁じ、路上の諸與行物を禁ぜり、皆これ藝人に向ての注意なり、吾人はこれと同時に寄席の建築に一の制限を立てんことを望む、即ち中等以上の社會もこれに遊ひて一夕の娛樂を購ひ得る樣の設備を望む、これに就て池邊

藤園氏の東朝に載せしところ大に吾人の意を得たり、左に紹介せん

余は今のいはゆる寄席といふものを大に改革したいとおもふ、今のは座敷でさしむかひで語るのを高座に上げたまでゝ、一般公衆に博く聞かせるだけの設備が缺けてをる。まづ舞臺高座の結構はどうだ。僅に二間足らずの處で何の装飾も无い。暖簾然たる幕と、座蒲團と、火鉢と煙草とが有る位で、丸で普通の家の内と替つたことはない。その樂屋といつたら見物人から知れる位。簡單でいゝと云ふ人もあるか知らぬが、これではゆく／＼國民が滿足の出來る筈のものでないとおもふ。又その客の居る處も隨分凄まじい、煎餅のやうな蒲團を膝の下に敷いて、灰がちの桝形の火入をあてがはれて、水瓜のならんだやうにザラリと坐らせられる、それも仕方がないとした處が、やがて隣では脛もあらはにさし伸して、團扇ばたつかせるものもあり、仰向にひつくりかへつて寢るもあり、さては立膝、さてはいびき、この間を茶菓賣歩く男があり、飲かけた茶碗を蹴つまいてお客の帶を濕すもなるなど、隨分不整頓極まつてをる。こんな風だからいきたくても行かぬ人もあり、外に无いから夫と知りつゝゆくものもある。とても比較にはならぬが、西洋のコンセルトといふものは、舞臺といひ、客席といひ、一體の装飾といひ運動場といひ、それ／＼に行屆いたものだ。一體に席の構造といふものは、いかなる貴人がいつても恥かしからぬものである。

國民經濟及び進歩の程度もあるから、急にとはいはぬが、今すこし寄席を改良して、一般公衆が心よく見聞も出來、役者も自在に働けるやうな高座舞臺を作つたならば繁盛もしやうし、從つて觀客の行儀も能くならうし、外國人が這入つても、感心せぬまでも汚い煩はしいとは決して思はぬ事にならう。全體に改革せずとも、せめて一區に一座丈でも改良座をこしらへて見たらどうだらう。何でも國が大きくなつて來たから、こんなものも擴大にしていかぬと一般の開化と釣合はぬとになるのである。全體一國の文明はその國の風俗で見られるものであつて、寄席などは風俗を見る最も窟竟の場所である。雜居の今日では詞のわかる外國人もあまたあれば、かゝる所に出入するものあらはれ來るのは當前で、又出入す

るやうに仕かけねばなるまいと思ふについては改革の必要が感ぜられてならぬのである。

## 品川風と内海風

往年故品川子の内務にあるや風紀の矯正に最も力を用ひ、品川風の名一時に喧傳されたり、今や内海内相は第二の風紀大臣として大に品川子の遺風を襲かんとすと云ふ、喜ぶべきことなり、公徳問題の勃興、宗教問題の勃興、風俗改良問題の勃興、民間には理想團の如き計畫をなす新聞を得、内閣には風紀振肅に熱心なる相公を得、いさゝか人意を強ふするに足れり、願くは品川風に比して内海嵐と云はるゝまでに一層の勵行をなせ

## 貴紳の美擧

岩崎家の銃獵禁止、及マクスミユラー博士文庫購入、住友家の圖書館設立、大倉家の商業學校、星未亡人の藏書寄附、徳川家の近隣の爲めの衛生談話會、皆これ今年に特筆すべき出來事たり

## いろ〳〵

△改良女服の盛行　袖無しの改良服は日一日と勢力を得る様なり、夏季は特にかゝる新流行を促すに便多し、夏以後は益々流行せん

△ストライキ節答案　某中學生徒の答案にストライキ節を書して教師に出したるものあり

△尻捲り問題　都下の講釋師其筋の命を以て猥褻と泥坊の談しを禁せられ其相談會を開く、會者一百餘名、講釋師が三尺帶をしめ高座で尻を捲て坐するは不可なりとの議題、イヤ差支無しとの反駁にて端無く一場の大爭論を起す

△小便辭職　加藤弘之博士高等教育會々長を辭す、其理由に曰く年を取て小便が近くてタマラナイからと

△毒金米糖　都下の天理教會にモルヒ子入の金米糖を用ゆるもの又々顯はる其筋の探偵特に嚴

△妨害者妨害會　米國に起れる會合なり、教育時論に山本直吉氏の譯せるを見に「不愉快を與ふる人を不愉快にしてやらん」との目的なり、其不愉快を與ふる人とは左の如し

○人が群り居る街を、人を押し退け歩く人。
○汽車より出づべき人が出できらぬに入らんとする人。
(此處に尚一あれども之は邦人に用なく、又明り易き様に譯するには說明を多く要するまゝ省く)
○市街の車(即ち電鐵、馬車鐵道などの車)にて嚙み烟草する人。
○音樂の奏し居る中に口笛ふく人。
○知らぬ人に政治の事を强ひて談す人。
○乗合車にて大聲談する人。
○手洗鉢にて顏洗ふ人。

○シーガルをもちて街の隅に立ち、通行人をのぞき見る。
○街上にて杖又は傘を上向けて持ちあるく人。
○街上にて齒楊枝を舐ふる人。
○女連れを好む風を人中にて見せる人。
○他人の名を勝手にもち出し、之にて冗談いふ人。
○ゴルフ(遊戯の名)を絶え間なく勸める人。
○進行する車より下る時に、惡き方を向き居り、心地づきて後に車掌を惡くいひなす人。
○飾付けるおもちや類を見んとて立ち止まりて往來を妨ぐる人(此節少し意義異なれども譯し直したり。)
○街の車(馬車鐵道の類)にて他人の新聞紙の一部を借る人。
○戯場へセーキスピーヤの脚本をもちゆき、行毎に聲高に讀む人。
○芝居の幕と幕との間に坐を立ち一段毎に六人の上をうろつきまわる人。

以上が同合の掲げて妨害と定めたる所なり。(尙外に二あれども、余には意義不明故譯する能はず。)同會には右箇條書の外に、尙注意書の如きものあり。右の事をなす人に對して施こすべき手段を說く。其手段中には隨分本氣の沙汰ならぬ樣に思はるゝもあれど、大躰右の如き無禮を惡む念より出てたるなるとは、犯人を呼ぶに白痴(Idiot)といふ語を用ふるによりても知らるべし。云々

△果して醜行に非るか　沼平松本君大磯に藝者を買、東京朝日の三面記者可笑く之を書き立つ、沼平君訴ふ、判官此誹毀事件を判決して曰く

今日社會の狀態は藝者を呼び玉代の滯納をなすが如きは以て名譽毀損の行爲と云ふ程にあらず、品行方正者の行爲に非ずと云ふを得るも以て惡事なり醜行なりとは認定し得ず、今の世の醜業婦に對する觀念を窺ふべし、此風潮を作りし者は果して誰ぞ

雜評

# 竹蔭冗話

零翁

●リンガム崇拜　と云へば人は平氣に稠座の眞中で話し得るなり、同一のもの外國語にて云へば符調の如く暗號の如く思はるゝは奇なり、藥の名などにも此類多しウテルス丸なども其一なり

●日本語の外國字書に顯はれたるもの輓近特に多し、驚くべきはゲイシヤ(藝者)シユンガ(春畫)の如きが己に一種の歐米語となれることなり

●丸が來た　英人の同船せるもの新嘉坡にて淀泊中、予に指して向ふより日本の丸が來たと云ふ、彼はマルとは日語にて船と云ふ意味なりと思へるなり

●コンデンス氏のミルク　堂々たる醫伯患者の練牛乳は何が宜しきやとの答へに曰く、「コンデンス氏のをお用ひなさい」

●ナニワー　布哇は日本の勞働者の出稼せる以來、

士人の間に日本流の相撲の行はれる様になれり、奇妙なるは彼等が一方の勝ちし者に手を揚げてナニワーと叫ぶ事なり、こは往年浪花艦の示威の爲に渡航せるとき、發火演習をなし、士人の膽を奪ひしより、エラキ者、強きものには皆ナニワーと云ふが僻となり、士人間一種の新流行語となれるに由る

●相撲取りの寫眞　をマダ日本の風俗を知らぬ外國人に示せば、必ず十中の十まで中々立派なる婦人なりと賞するべし、相撲取の束髮せる、髯の無き、乳房の太れる、化粧廻はしが馬來邊りの婦人が纏へるものと同一の躰裁なる、如何にしても彼等の目に男子とは受取れぬ爲めなり

●男か女か　維新前日本人が帯刀長袴の儀にて巴里や龍動に赴けるもの、皆彼は女子なるか男子なるかの疑問を受けたり、當時の士人は皆髯を蓄へず、而して結髮し、其西洋婦人の衣服に類せる袴を着く、疑ふも無理ならぬなり

●黒奴流(ニグロースタイル)　此頃日本にて流行る頭髮を短くせる、五分刈の頭は歐洲にて黒奴流と稱して大に卑むところ、則ち亞弗利加土人の剛き縮毛の分けること能はずして皆五分刈とするより起る日本人はトンダ風を眞似せるもの哉

●高麗風(コレヤンスタイル)　と亞米利加などにて云ふ髯は手入れせず、則ち髯をチツラカさゞるものを云ふ、歐洲にても亞米利加にても日本人は時々支那人と思はれてチン／＼チヤイナマンなど丶冷笑さるゝことあり、彼等は只髯の歐洲風なると然らざるとに依て日本人と支那人を區別するなり

●各國の髭　其雛形悉く日本にあり、兩端の天に朝するカイゼル流、山羊の如く下髯を殘す露西亞流、巴里風、龍動流、果ては支那朝鮮流、皆有り、カイゼル流は獨逸の本場にてもやゝ下火となれる今日、日本では却て其數を增しつゝあり

●軍艦、馬、娼妓　近刊の東朝に娼妓と馬と軍艦皆類似の名なりと云へり、金山、薄雲、小櫻(馬名)敷島、八重山、稲龍、まぼろし(軍艦)其例なり、軍艦は女姓であるからと云ふ譯でもなからん

●綾瀬川　と云ふ湯屋東京にあり、相撲取の如し、バカントラと云ふ落語家柳派にあり、印度邊より舶來し來れる黒ン坊の如し

●長肩書　日本の學者で肩書の長きは中島力造高楠順次郎の兩文學博士と工學博士の中野初子(ハツネ)氏となりと

か、其中野氏の分は曰くマストル、オフ、サイエンス(コロ子ル大學)フオーレン、メムバー、オフ、インスチチユーシヨン、オフ、エレクトリカル、エンヂニヤース(ロンドン)東京帝國大學工科大學敎授工學博士中野初子

●新造文字、的の字　弗の字や汽船の字が福澤翁に依り作られたと同時に、維新後の新文字は隨分澤山ある、今大槻文彥博士の我國にて的字の濫用されし起原を說くを見る面白し、長きを厭はず左に紹介す

今の世に、的の字を頻りと用ゐるが、その元は、たはけた話であるから申さう、今の文に、「反抗的態度」などは、「反抗樣態度」などいふやうな意に用ゐて居る、「軍事的設備」、は「軍事上設備」、「獨逸的敎育」は、「獨逸風敎育」、「學者的口氣」は、「學者然たる口氣」、といふやうに用ゐて居る、的の字を、かやうに用ゐるは、支那の官話、小說に、常の事であるけれども、此の的に、「樣」、「上」、「風」、「然」などいふ意は決して無い、支那の官話の文法を書いた「文學書官話」といふ書(米國人、高第丕の著)に、的の字を說て、「不ㇾ能ㇾ說ニ他是那一類的ニ作ニ甚麽字的末尾ニ」とあッて、八品詞の、何の類とも名づけることが出來ぬ、どんな字の尻にもつける、元來、的の字は、入聲であるが、上聲では、「底」となる、宋人の語錄の語に、「不是底父母」、「到底」、など見え、詩に、「怪底」など用ゐらるれるも「的」と同じて又、「地」ともなる、「摸地」、「驀地」、「潑々地」、「白々地」、「一頭地」、などもある、「底」、「地」、「的」、皆同じものである、是等皆「樣」、「上」、「風」、「然」の意義は、更に無い、然るに、今では、立派な學者も、皆、何々的を用ゐて、今、假に、これを廢止としたならば、筆は動くまいと思ふ程である、的の字の眞義を調べて用ゐて居るのか知らぬ、大方、調べずに用ゐて居るのであらう、調べれば、そんな意味の無い字であるから、我慢にも用ゐられる譯のもので無い、しかしながら、此の的の字を、かやうに用ゐるやうになッたには、原因が無くてはならぬ、原因、大にありてある、其原因は、かやうな譯である、明治維新の初に、何んでもかでも、西洋々々で、飜譯流行の時があッた、諸藩で大金を出して、洋學書生に何原書でも翻譯させた、其頃、拙者が知ッて居る人々で、善く翻譯をして居たは、柳河春三、桂川甫策、黒澤孫四郎、(河津祐之の事)箕作奎五、(菊池大麓君の兄さん)熊澤善庵、其他、某々等であッ

て、拙者なども、加はッて居ッた、そうして、不思議な事には、此仲間が、大抵支那の小説、水滸傳、金瓶梅などを、好んで讀んで居た、或る日、寄合ッて、雜談が始まッた、其時、一人が、不圖、かやうな事を言ひ出した、System を、組織と譯するはよいが、Systematic が譯し惡くい tic といふ後加(アトクハ)へは、小説の的(テキ)の字と、聲が似て居る、何んと、組織的と譯したら、どうであらう、皆々、それは妙だ、やッて見やう、やがて、組織的の文で、淸書させて、藩邸へ持たせて、金を取りにやる、君、實行したのか、うゝ、それは、ひどいぢやないか、何に、氣がつきやァしないよ、などといふ戯れであッたが、扨、此の的の字で、段々、むづかし處が切り拔けられるので、遂に噓から眞事といふやうな工合で、後には、何んとも思はず、遣ふやうになッて、人も承知するやうに、なッたが、其根を洗へば tic ト的(テキ)か、聲が似て居るからといふ事で、洒落に用ゐた文の事で、實に捧腹すべき事である、是れが、的の字のそもくの原因である、其頃の仲間は、今では、皆んな死んで仕舞ッて、熊澤といふ仁が、大阪に一人生存して居るのみで、拙者でも話して置かぬと、此馬鹿氣た話が、湮滅して仕舞ふから、死者に代て、懺悔に話ます、此話しは、決して噓でない、其證據には、明治の初年以前の翻譯書は、勿論、世のあらゆる書物を御覽なされ、何々的などいふ用字は、何の書にもない、的の字のある文は、すべて、明治初年から後の書である、今一ッの證據は、斯く申す拙者も、三十年來、隨分、文章といふものを澤山書いて、世に發表して來たが、凡そ拙者が書いた文章中には、的の字を用ゐた事は、一ヶ處もない積りである、用ゐないのは、根元を知ッて居るから、馬鹿氣て用ゐられないのである、的の字などは、つかはずとも、外にいくらも字があッて、不自由はせぬ、尤も、多く書いた文の中に、我知らず、一ヶ處や二ヶ處、的の字を用ゐたことがあるかも知れぬ、夫れは、思はず流行に釣り込まれたので、自分で書く氣で書いたのではない、誠に、はや「幽靈の正體見たり枯尾花」、とでも言はうか、吾等が罪は、餘程深いと思ッて、自白するといふやうな仕合はせである、

## 雪魚錄

小觀記者

○一年又夏期休業の季節に入れり、麥帽白袴飄々とし

て都門を去る諸生の快果して如何ぞや、顧れば十年前の我こそ眞に羨しきの限なれ。

○夏期休暇中にて尤も快味を覺ゆるものは歸省也、老親堂に在り、兄弟姉妹笑て相迎ふ、隣家の老媼も亦聞き傳へて來る、其得意眞に忘れ難し、

　風露滿庭蟲語叢、半輪眉月掛疏桐、兄弟姉妹相團坐、燈火涼簷説客中、

○曾て明石に一周間の海水浴を試みたることあり、其青松白砂は今尙歷々として目に在り、此頃河野鐵兜の詩を見出、中に赤石より兵庫に至る途中の作あり、

　一角煙消見一堆、何山遠翠入眸來、得非赤壁賦中物、輪大羽衣掠水來、

○炎熱の日に逢ふ毎に山寺を懷ふ、藤蘿深く軒を鎖して飛泉潺々とし簷前に落ち、風なく凉自ら生ずる處、老僧年八十眉雪よりも白く安坐して靜かに楞嚴かなんどの佛經に對す、殆んど是れ人間の六月を知らざるもの也。

○張籍の僧に寄する詩に曰ふ、

　松暗水涓々、夜涼人未眠、西峰月猶在、遙憶草堂前、

眞に清絕凉絕の詩也。

○讀書樂趣といふ書の中に曰ふ、

　種荷萬柄、蔭蕉半畝、日夕起居其間、能令魂夢馨香、肌膚翠綠、每六月思逃暑不得、輙兀坐作此觀、

即ち是れ一種の淸凉觀也。

○曾て大寶山中寒山寺に半夏を消したりしことあり、「醒言」と題せる書にいふ所、恰も其地の爲にしたるものゝ如し曰く、

　白雲冉々落吾衣、聞村落數聲、酷似空中雞犬、皓月娟々入人懷袖、聽晩風三弄、恍如天外鳳鸞、

＊　＊　＊　＊　＊

○喇嘛敎の貫主を伴ひ來りしは東本願寺の大出來也、喇嘛敎其物は到底何等の役にも立たざるべしと云へども政治的意味に於て大切なる可きは云ふ迄もなく、今日々本佛徒が支那に布敎するに於て同敎の觀心を失はゞ大なる不利ならん、特に近年日本佛徒にして西藏に入らんとする一再ならず、而もイツモ目的を逹せず、現に能海寛氏の如き死生殆んど分明ならざらんとするさへあり、此際同貫主にして一諾を與へんか入藏の大路は坦々として砥の如きものを開き得ん、各宗共に大に歡迎の意を表す可き也。

○貫主は清僧と思の外、牛肉や豚は大好物也、錫蘭サイヤムの僧も亦肉食すと聞けり、爾れば雲照律師を始め日本の律僧ほど精嚴なるものは世界佛徒中太だ稀なりと思はる、其代り律僧ならざる日本僧侶ほど腐敗墮落したるものも亦世界に類比を絶す可きか。

○新佛教の徒ユニテリヤン會堂に會して公開演説を開く、舊佛教徒と稱するもの曰く予等はニコライ會堂を借りて一大法會を脩せんかと。

## 讀者の文壇

### 些聞些記

ち、か、

◎敢てローカラリズムを辯護する譯では無いが、日本新聞と云ふ新聞は社會の勢力あるものに何んでも反對して其バランスを取ろふと云ふのが其主義である、一世軍備の擴張論に傾けば則ち縮少論を唱へて牽制す、其れに反しして社會が非戰主義に傾けば則ち滔々主戰主義を持ち出だす、イッモ日本新聞が怒鳴り出したならば其怒鳴られた敵手の方が輿論の聲である、多數の聲である、強き方である、と、こー思へば問違ひがナイ

◎萬朝と二六は丸で縄張りを爭ふ二人の俠客の樣である、二六の方は若き丈けマダ客氣に逸るところがある、萬朝は兄ィ株丈け有て大に落付が見え、圭角がとれて來た、曾て忌まれもし恐れられもしたものが、惡に强かりしものは又善にも强しと云ふ樣に社會風教の爲に一肌脱がうとしつゝあるは最も頼母しい氣がする

◎讀賣はます／＼風俗改良に力を盡す樣であるが、前月より紙面の四分の三まで悉く言文一致としたる勇氣には感心の外はない

◎星亨は曾て全三十日間フロックコートを夜も晝も着け通しにして其黨の爲に奔走したと云ふ、ドー考へても尋常の男ではナイヂヤないか

◎高輪泉岳寺に香花の絶ゆることの無い間は日本に刺客の絶えぬとは志賀矧川の述懷である

◎如電翁は明治の五段變と云ふものを說ひて、第一が維新、第二が十年の西南役、第三が憲法發布、第四が二十七八年の役、第五が今度の北清事件、日本人の思想も行爲も仔細に見れば歷々此五段の變化に伴ふて變りて居ると云つた

◎前々の濱尾大學總長は大學内に道路を作つた、今の菊地文相は總長である時赤門を修覆して塀を作つた、

兩人とも大學に覆した切勢はこれ丈けである、學生は道路總長、門塀總長と呼んで居る

## 懸賞と僥倖心の挑發

穆翁

懸賞の方法も時に依つては頗る冒險心を惹起せしめて、或は國民の元氣を振作するに必要なることもないではないが、此頃の樣になんでもかでも、懸賞々々と矢鱈に懸賞の流行するのは、國民に自家眞性の力でやるよりも、万一を僥倖する樣な薄弱な依賴心を起さす種にはなりはすまいか、米國の樣な生存競爭の劇しい所で、生涯首の上り樣のない職工達が、富籤を引き立てゝ、それで自分の立脚地を拵へる種にするなどならば、それが一種の元氣振興劑となるから時に取て頗る必要ではあるが、金ならば僅か十圓か百圓までのはした金目當に、腐文拙辭を並べてみたり、美文材料の切拔きをやつたりしての懸賞文などが、抑も何のためにならふか、其僥倖を賭する冒險がうまくいつた所で、友達に西洋料理を驕る資料になるか、淫賣婦に一夜の歡心を買ふの本手になつてしまつたりする位いのもので、所詮は有爲活潑の靑年に脆弱な僥倖心を起さしておまけに心にもなき不德不道な行ひをさす手引になる計りとすれば、吾輩は斷じてこんなつまらない懸賞などをやつて、自分の商品の賣口を博くするやからを攻めねばならぬのである

## 菱花錄

房州八幡濱にて　澤井龍陰

ことし七月脚の病を得て房州館山灣邊に療す、灣は一に鏡の浦といひ菱花灣の雅名あり、灣邊村を爲すもの館山町といひ北條町といふ、灣内一帶南洋より吹き來る風甚し容易く防ぐへからず、玆に於て沿岸一帶に防風林を造る、其海面の近きものは時々海水に洗はるゝと風荒きとのため萎縮して生長する能はず、爲めに沿岸數十間の間は、一木を止めず、雜草萋々たり、之より内部に入り田甫を夾み森林を造る恰も木綿縞を見るが如し、此綠樹此青草今日都人士をして所云、貴族的俗化せさる好避暑地、良海水浴場として稱贊せしむる所以にして、最初第一高等學校の見る所となり、水泳部を置き、今や暑中休暇に際し多くの有爲なる青年諸子は三々五々分宿し居れり、予の養痾處なる八幡濱は此綠樹青草帶の中央に位し、遙に伊豆半島を前面に眺め得る處にて民家は概れ松樹中竹籬短垣に圍まれたり、予の寓所亦全模型中にありて海岸の眺望は未たしといへとも眠浴自在にして好宿舍たり

●公德は下層にあり　予の出立せし日は朝來篠突くはかりの降雨にて實に人力の車軸も流れんかと思へり、靈岸島に着し艀船に乘りしさきの如き人々互に蝙蝠傘雨傘を開けば自分の傘は隣人の肩を沾し、隣人のは自分の背に滴る、寧ろ傘なき方增しかと思はる、此時にも見ゆ

るものは人々の公德心にそある、人の方に背を向け人の謡るゝを知らず顔なるは夏トンビ着たるデモ紳士にて「あなたの傘はおよしなさい私のが大なれば一所におはいりなさい」といふは房州邊の田舍物と見ゆる人々なり

**●海岸の隧道**　小供の謡ふ山は上總か房州の兩地は、一体に沙石とやら稱する軟かき石にて（東京にては多く建築に用う）此石の海岸に延ひたるを切抜きて幾箇所もトンネルを造り、人道とせしは恰も鐵道のトンネルの如くにて面白し

**●鹽漬陰莖**　此看板館山町の中央にあり、豈驚かさるを得んや、無論オットセイのものにて藥にするものなるべきも甚た異樣に感せらるゝなり、

**●ごみ棄てべからず**　館山町と北條町と相接する處に汐留橋といふあり、此橋の双方の桁ごみ棄てべからず館山警察署、ごみ棄てべからず北條警察署とあり、蓋し方言のすてベイよりすてべシとなりすてべカラスとなりしものか

**●田舍祭禮**　予到着の日何れの里かドンドンドンの音高し、何者ならんと探ね行けば所云山車(ダシ)にて村の祭りなどいふ、だしは東京のほとなるに巾に麥稈細工にて龜を造り、龜の足には鉋屑を附したるものなり、之を十歳より十五歳位までの女子は赤の腰卷赤の襷をかけ、男子も仝年畧のものと共に引くなり、鎌作、太五兵衛、お鬮やおいかさんは共に立ちながら酒を汲みて祝ふさま、先年誰やらの田舍芝居も思ひ出されていとおかし

**●がた馬車**　東京の圓太郎馬車は又なき樣に思はるれど、此地館山、那古通ひのがた馬車は實に恐れ入りたるものにて、小き四人乘なるに窓に赤き金巾の幕樣のものを掛けたる如き、一として滑稽ならさるはなく、之に比すれば圓太郎の如きは華族と平民程の差あるものなり、先年日光鐵道の未た出來さる時には宇都宮との間に隨分甚しきものありて予も一度は此厄介になりしが、是處のよりはましなりしと覺ふ、又廣島宇品間のも隨分ひどきものなれども猶是處のよりは少しましなり、是丈け數へ立れば大抵其直打は想像し得らるゝならん

**●田甫中の料理屋**　町の繁榮なる處にあるにあらず、堂々たる磨き格子の家にもあらず、田甫中の一軒家店頭恰も駄菓子屋の如くラムネ二三本列立するを見るのみ、看板と見れば料理屋とあり、熟視すれば奥の方には白首の怪物二三を認む、此の如きもの村内所々に點在す、嗚呼是れぞ風俗壞亂の根原にぞある、今や此地東京人の別莊出來地價騰貴し來遊するもの年々多きを加ふ、第二の大磯鎌倉たるの日亦遠きにあらさるべし、此時に當り此地警察たるもの打捨てベイ的の方針を止め、ドシ／＼取締らんことを切望す、

**●避暑學生の遊戲**　未來の大臣、未來の外交官、未來の大將、未來の博士、此末賴もしき一高の青年諸士嗚呼青年諸士が消閑の遊戲は抑々何者ぞ、非熊非虎、碁か將棊か皆あらず、云はんと欲して口澁ふるゝなり、吾人他の人ならんには云ふも益なければ云ふを欲せず諸士に望みを屬するとの多きたけ夫れだけ默するを得さるなり、予か厭ふべき遊戲とは何ぞや、曰く弄花なり、曰く――あゝ予は最早言を次くを好まさるなり

**●便利田舍に珍し**　牛乳も配達し新聞屋も來る、貸本屋も來れば、煮豆屋も「おいしいとか何とか仰しやりましたネー」ナド謡ひつゝ來る、牛肉あり魚はお手のものなり、野菜あり桃の如きは特產とも云ふべき程にて、其他菓物多く實に田舍には珍しき程にて、其上見るべき佳景勝地甚多し、都人士の一遊を試むべき價値充分にありといふべし、

# 自轉車の流行は何の徵ぞ

四谷生

昔しは太平の時に千里の馬を喜んだ天子に、自分の官職を賭して怒り付けた忠臣があつたが、それさは稍異なつては居るが此頃の自轉車の流行は抑も何の徵だろふか、吾輩は今更ら無暗に舶來品をけなしたり、生意氣だからいやださか、そんな野暮を云ふのではない、が、つく〴〵考へてみればこんなものを用ゐて騷ぐ程日本國民の生活程度が進んで居るだろふかさ云ふことに付て一考を煩はしたいのだ、自轉車の多く流行するのは

一、至急を要するに便するため

二、娛樂用に供せんがため

これを第一に付て考えて見るに、日本の實業其他總ての事がしかく自轉車でなくてはならぬ程進んで居ろふか、尤も繁雜を極むる大都の眞中で、尤も敏活を要すべき仕事に從事したり、或は商賈をして居る人達には、實に必要でもあらふが、少し早く往けば濟む用事を、より多く惰けたい爲めに自轉車に乘つたり、歩いても乃至は止むをえずば、人力車を用ゐても濟む事に、自轉車に乘つて空威張りしたり、つまりは怠惰さ虛榮との爲めに輸入超過をさして國貨流出の源を造られればならぬ程必要であろふか、

更らに第二に付て考へて見れば、さなきだにお祭り騷ぎの多ひ遊びずきの國民が更らにこんなもので遊ふ種を造くつて、どうして何時勤勉な國民になれるのか、無用な時の徒消を省かんが爲めにと云ふのは至極結構ではあるが、早く往つて早く歸る爲めに用ゆるの爲めのみでなく、往來の時間を節減して長く遊んで來んが爲さか、ひざいのになつては、遊廓通ひにうまく賄賂かきくためとか おまけに乘り疲れて正しき業を休んだりころげ落ちて負傷したりするに至ては、果して何の益する所があるだろふか、さうしてまでも高い金を外國に拂つて、遊んだり、なまけたり、負傷したりせればならぬだろふか、急ぐ要事があるならば、たとひ目前の各個人の支拂ふ金高は多少多くなつても、寧ろ海外に金の出ない日本の人力車に乘つて貰ひたいのだ、それはさて置いたとしても、第一日本の道路は自轉車が乘り歩く樣に出來て居るであらうか、尙他面から云ふならば、こんな個人的利器の流行する前に、もつと公共的交通機關の發達を計つて貰いたいのだ、充分に公共的交通機關の發達が出來て、其餘地を殘さなくなつて、更らに其上の必要に對して初めて、個人的利器が應用さるゝのではあるまいか、敢て向ふ見ずハイカラ諸君に呈す、

## 應募 短文

（我國の住居に就て）

▲世界中獨り木器建築術の粹を集め、僅かに結構壯大風韻雅致妙工盡せりといふ可きものは東本願寺の新殿堂、日光山の社廟、宇治平等院の鳳凰堂、金閣寺の茶席、木曾山中賤ケ伏屋の農屋、先づ何れも取り處ありといふ可し、是を余の建設的議論とす、さりながら一般我邦の人家なるものは火事の點より云へは一見摺附木箱の行列なるか如く危險極まる、國家的不經濟な住家である、衞生の點より云へば天井就中低く、亦四壁に空氣の流通光線の出入更に無稽なるを以て、實に有毒極まる惡性黴菌の養成所である、倫理の點より云はへ恰かも男女混交の一浴場の如く、親子兄弟姉妹一室に寢臥して、未た別室居住の設備なき不纏極まる賤小屋である、要するに本邦全体の家屋が概して低き事實の點より云へば元來非大陸的住民なるにも拘らす島國根性に似合はざる敷地を廣く取り過くる最大欠點がある、その低いさいふ點に就て（無論粗造の點免れず）余

に面白き經驗あり、即余前年來度々內外諸國を往來する每に外國諸港に入りて船上先つ第一眼に映し來るものは、一般人家の窓にして、屋根にあらず、爾るに內地の港に入らば先つ眼中第一に射り來るものは、煉瓦の屋根にも窓にあらず、嘗て余は香港より直航神戶に歸着せし日、日本航初の一外客甲板上立ちて他の一外客と談じ云く「君よ日本土人は彼の家の中に住むや」と神戶市の全景を指示せり、まさか之れチーストラリア或はニューギニー等の海岸旅行ではあるまいし、彼等の評語實に沙汰の限りといふ可し、併しどふしても是等の大躰に關する諸點より觀察する時は余は何處までも日本家屋破壞論者である(赤道小僧)

▲我國の住居問題は諸種風俗の根本となる問題である、此住居にして改まらざる以上は日本人の習慣も日本人の躰格も決して改良進步は出來難し、貴社の楓堂先生が嘗て社說で論ぜられし如く、實に我が國病である、吾輩は是非とも國家の法律を以て、一國今後の實力消長の爲め國民躰格の爲めに家屋に制限を置かんことを望むものである

新造の家屋は疊を用ゆべからず、必ず板間か土間かにし倚子寢臺の組織とすべき事

中等以上の社會には舊來の家屋にも疊に向ては稅を課する事

或一定の資產有る者には座居の習慣ある建築を許可せざる事

直ちに行はれ得べき事に非るが如しと雖、此事一日を忽にせば一日我國を弱めるなり、我輩は此事に就て大に輿論を作り、議會を通過し、大英斷を施さんと思ふ、詳細に論じたけれども、短文には書き盡すことが出來ない、先づ大躰の考へを述て諸君の參考に供し、他日を期して大に論じようと思ふ(池永惣二郎)

▲我國の家屋を西洋風に改めればならぬことは世が開くるにつれ漸々分つて來ることであるが、併しコンナ事は只成行にまかせるよりは重立つ者が少し奬勵なすれば案外早く運ぶものであるから、僕は全國佛教の寺院に成る可く基督教々會堂の風にして萬事改革につゐて何時でも邪覺である老人婦人等に目からと耳からと洋風住居の重實なことを知らせたら餘程其効は多かろうと思ふ(熱心生)

▲近頃は西洋風の流行だと云つて一から千迄歐米風ばかり吹かせて貰うまいよ、住居だつてハイカラの野郎共は無論洋風に首ッたけであるが、彼地(あつち)だッて中以下の者は地下の穴倉に而かも二三家族乃至七八家族も一シヨになつて犬猫見た樣に老幼男女雜居してる所もあるじやネーか、ソンナ所じや倫理も秩序も行はれたものじやありやしめーよ、それに比ぶりや我國の長屋や裏店社會の方が餘ッ程ましじや、滅多に金の餘計かゝる洋造りをはやらかして貰うまいよ、長屋ナドが無くなつたらオイラは西洋流穴の土の中に住はにやならぬよふになろう、コリや熊公油斷して居る時じやないよ(裏店生)

▲土屋有り、木屋あり、石屋有り、瓦屋有り、布哇土人の如き草のみの家有り、印度人の如く牛糞を壁とせる家有り、南洋土人の如く水上の家有り、樹上の家有り、或は舟居或は穴居、世界住居の數も又多い哉、これら家屋の比較をなし來て我日本の家屋は純粹なる木屋の標本にして、石屋瓦屋混合屋の次、則ち第四番の品位にあり、然れども其規模の點よりすれば、僕は亞弗利加土蕃の穴居南洋土人の水上屋樹上屋に勝るあるのみ、法隆寺や鳳凰殿や如何にも美術ならん、只だこれ雕榱の飾と一般なるを奈何、安房の一炬三月火を絶たざりし支那數千年前の規模と、我二十世紀新日本の皇城を比して、猶今日の劣れるを見る、個人と個人との家を比して日本人は彼のチヤン公にすら劣ること數等、吾人は其石造たると又木造たるを問はず、只規模の今少し遠大壯宏ならんことを欲す(青山生)

▲丸窓や、障子や、屏風や、違ひ棚や、實に意氣である、輕便である、美術的である、空氣の流通これが爲に宜く、人身の健康之が爲に保たるこれを牢屋の如き西洋建築に比べて、その雅致、その經濟、その健康、殊く優れるのである(數寄屋生)

▲日本家屋の不躰裁極まるが内にも便所程見苦しく不躰裁のものはあらず

一、小便の漏れて近傍の板を汚す先ず之が不躰裁なり
二、共同便所に他人の飛汁を避けねばならぬ不躰裁なり
三、小便壺の溢れて外に流るゝ不躰裁なり
四、大便所の内側に戸締りなく内より片手で引付けをる不躰裁なり
五、大便壺の明るくして種々の虫类の見ゆる不躰裁なり
六、大便の飛汁に心地よからぬ顏をして出る不躰裁なり
七、空に腰を保ちて兩手を支へるものなく長く便所にありて目眩む不躰裁なり
八、色々の樂書きある不躰裁なり
九、大小便の屢々室内を汚す不躰裁なり
十、大小便に行きて一々手水を使はねばならぬ不躰裁なり
十一、汚れたる手拭の下に濁りある手水を置ける不躰裁なり
十二、冬寒き日下より風に吹かれ痔を惱む不躰裁なり
十三、臭氣鼻をつきはんかちを口にする不躰裁なり
十四、下女が顏をしかめて便所に降伏して洒掃する不躰裁なり

かゝる不躰裁だから便所は改良建築と共に改良もせればならないと思ふ(東里)



▲茆茨剪らず土階三等とは、古代帝堯の宮室なり、今日より之を見れば九尺二間の裏店よりも、尚ほむさくるしき心地す、帝堯の宮室は斯の如く麁末なりと雖も、其當時には適したるものならん、九尺二間も之れに住居するの必用ありて存在するなり、

我國の家屋は歐風の家屋に比して、外形の壯大、輪奐の美劣るところありと雖も、本邦人の生活狀態より見れば最も本邦人に適したる構造といはざるべからず、歐米人をして日本風に住居せしむる、其の不便は歐化せざる日本人をして、歐風に住居せしむると同樣なるべし、本邦人の生活狀態を顧みずして、先づ我國住居に就いて云々するは早計なり、余は歐化せざる日本人の目より見て、我國の住居は室内といひ、庭園といひ、西洋の其れに比して最も趣味に富み、最も便利多きものなりとす。(二橋)

▲去年の冬、隣人が僕に、アノ異人はよく君の所へ來て遊んで居つたのに、此頃はいつも門口で立ち話しをして歸つてしまうが、大分いそがしいさみゑますねと申したから、イヤ此頃は冬になつて寒いから、あがるのには靴を脫ぐのだからです、オヤいつも靴を脫ぐではありませんか。それでも寒い時に異人は靴を脫ぐと風邪にかゝり易いからです、ヘヽア

日本人は下駄をはいて居るから下駄を脱いでも風を引かぬのですが、下駄の徳もありがたいものですなと云つた、スルト側に人ありクツヽヽゲタヽヽ笑つておつたことがあつた、我國の家屋は試に西洋人の爲めには斯ういふ不都合があり、又冬期ストーヴもないから不便少からずだ、しかし又洋風家屋も日本人に對して不便の點が尠くない、が、之れは茲に語るべきでないから見合はすことゝした、(二橋)

▲一ツ歐米と日本との比較を述べよー、悉く反對であるから面白ひ

| 日本 | 歐米 |
| --- | --- |
| 木造にして低し | 石(又は煉瓦)造にして高し |
| 二階三階と高き方の室を貴ぶ | 二階よりは一階と低き方上等とす |
| 庭園後にあり | 前にあり |
| 外より庭内の見えぬ塀を作る | 其反對 |
| 床上に座す | 床上に立つ |
| 各室公開主義 | 密閉主義 |
| 諸室悉く寢室 | 寢臺は別に在り |
| 大小便貯藏主義 | 洗滌主義 |

ザット此の如し、善惡の批判は讀む人に任かせる(芝白金生)

▲我國の如き地震國には西洋建築は最も不都合なり、其實用の點、經濟の點、優美の點、凡て日本流の建築に限る(ち、か)

▲新歸朝者の先づ著く感ずるものは我が家屋の小なるのである、●全權公使其他の外交官が家を洋風にする爲め借金までかまはぬものは、歐人の訪問をば在來の家では受けられぬからである、試みに西洋人が日本の家へ訪問し來りしとせよ、彼等の第一に苦痛とし不愉快とする靴を脱がればならぬ、胡座をかゝればならぬ、握手の禮をするに不都合である、食事を共にする事が出來ぬ、寢ることが出來ぬ、奏樂することが出來ぬ、立ては天井へ頭が支へる樣な氣がする、歩けば床下が動き出す樣な氣がする、どーしてこれで世界對當の交際が出來樣ぞ(高襟黨の一人)

▲此日本の家屋が寢轉び易き爲め、日本人がどれ丈け怠惰になるかと思ふか(仝)

▲衣服を改良するも住居を改良するも、ツマル所は金だ其金は手作りに出來るものでないから、先づ教育や實業を盛んにして生産を多くするより外はない、住居論とか衣服論とかをやるなら同時に此富の製造を唱道するを怠つてはならぬ(本末生)

▲僕は家屋を西洋造りにし椅子テーブル制にするのは好であるが、併し自分が家を建るなら應接間食堂臺所寢室等を西洋造りにするは勿論だが、併し願はくは裏の庭先に小奇麗な茅の一棟だけは和風を殘し置きたし、ソシテ勉强も散歩も倦んだ時などに其處に横になりて是迄舊風の家屋に慣れた懷舊病をいやしたい(中庸子)

▲洋風の家屋は煉瓦造にせよ、木石造にせよ、堅牢が第一番の長所であるが、次には其寒熱を禦ぐこと、室内にて音吐の朗なこと、採光の工合よき事等であるが、舊來の家屋に慣れた者からすると空氣の流通の思はしくないことは聊か不愉快に感ずるであらう(山本生)

▲井戸の中に放つた鮒は小く、池の中に放つたのは大きくなる、五尺の躰でさへ腰を屈めて潜らればならぬ格子戸の中で、イツモキチンと座居を命ぜられるのだもの、どーして日本人の躰格が發達しようか、日本人をして世界を征服する人種たらしめんとせば、寧ろ住居無き露天席寢の人種とすべしだ、然らずんば二十階三十階歐米の家屋に數等勝るものを建築すべし(碧山)

▲東京をニューヨルクの家屋の如くすれば現在より五分の一も狹き都會となるべし、東京は小都會の集りにて一市と見做すべからざるもの全く

住居の割然らしむ、今後の東京は上に高まり行くべし横に擴がるとならん(麹街生)

▲推せば倒れる、壓すれば潰れる、暴風には飛ぶ、洪水には流れる、火事には燐寸箱の樣で、地震には風船玉の樣だ(K、H)

▲余輩は我國人身體動作の輕快機敏にして作務の時も遊戯の折も成る可く便利にふるまはんを望むに就て、常に衣服の改良即ち男女共是非洋服を着せんことを希望するものなるが、是に就て必要なるは則ち家屋住居の改良なり、常に洋服を着せんと考ふるも男子ならば其出勤する役所とか學校とか工場とかにては至極便利なれども、家に歸れば勉强室も坐敷も茶の間もすべて疊敷なる故(今日では中等社會にては安樂椅子の一二個位は備へ居れど)忽ち和服に着かへねばならず、又婦人などにすれば猶更今の袴流行がやがて洋服に進化しても之を着用するは、途中及學校とか相當の場所許りで、男子同樣自宅では一切用ゆることが出來ず、又臺所などでは一切そんな眞似は出來ぬ、それやこれやを思ふと自分は早く我國の住居を練瓦造り高樓の風に改めたいと思ふ(一改良論者)

▲我國の家屋が惡いと云つてもあの商家殊に小さな商家の店先に、主人や番頭小僧などの窮屈さうに坐つて居るを見ると實に同情に堪へなゐ、朝飯くつてから午後十一時頃迄食事のときと物買いの來た時分に起つ等の外殆んど打續けにすはりて居るのを見ると嘸辛からうと思ふ、あれが西洋造りの店にすると小さな椅子でもあるから腰掛けて居れば立つことも便利だし、大分クツロギが出來るだらふと思ふ(同情生)

## 課題

### 我國の住居に就て　八月十五日まで

### 我國五十年後の宗教に就て　九月十五日まで

## ・前月の出版界

●言文一致普通文　・堺枯川著　神田南甲賀町　内外出版協會發行

明治の文體の制定せざるべからざる而して是が先驅として言文一致の採用せざるべからざるは方今識者の齊しく認むる所なるが如し、萬朝報記者堺枯川君、實用の方面より是が普及を圖らんとして今、「言文一致普通文」の著あり、目を總論、文例、文範の三に分ち、更に文例を分つて手紙の文、實務上の文、交際上の手紙、葉書、日記の文、記事論説の文、雜文とし文範には坪内博士を初め福澤其他諸家の所作を集めたり言文一致の普及に關してはまことに有力なる著述といふべし而して文例に收むる所、廿世紀の少年よりおぢさんへ、紳士の日記、妻君の日記、少年の日記、ハイカラ[illegible][illegible]戒に關する意見書の如きしばらく言文一致の普及といふ目的を離れて見るも頗る面白く讀まるべき書振也(定價二十五錢、錦街生)

●あだなみ　田中涼葉著　日本橋區槇正町　文祿堂發行

故田中涼葉氏の遺著也、同門徳田秋聲氏の記する所によれば涼葉は風葉、鏡花諸氏と俊を十千万堂に執り才名漸く彰るゝに及んで肺を病んで夭死したるもの、この篇は死に先だつ數月、病褥にありて呻吟辛裡に筆を執りたるものなりといふ就て見るに着想、措辭ふたつながら凡ならず固より師紅葉氏の加筆ありたるべしと雖どもその才の尋常ならざりしは充分に認むる事を得て若し壽を長ふせしめたらんには同門の秀才と駢らべて文壇に馳驅したるならんと思はる、才人の夭死、今更の事にあら

すと雖も眞に哀悼の情に堪えずこの書、「仇波」の外、秋聲氏の跋、風葉氏の「院長」、鏡花氏の「月下園」、春葉氏の「白すみれ」を添ゆ皆見るべし、且つ表裝は製本の美を以て聞えたる文祿堂の出版とて優麗清雅、目覺むるばかり美し（定價六十錢）

◉言文一致文例　山田美妙氏著　内外出版協會發行

界君の著が出るさ引きつゞいて同所から出版せられたのが山田氏の「言文一致文例」であるが、本書は凡て四章に分ち手紙の文に往復四十六、願届書、公けの文書、雅文等に各々數個の文例を掲げ、終りに「此書物編纂の趣意」さ題して「自分は如何して言文一致體は冗漫さの世評を救ひ得るか、如何して意味を痛切にあらはす事を得るかと此二點に心を碎いた」と、別項に言文一致會で修正した白鳥文學博士の「悔みの文」に批評論難を書した上、言文一致で充分右の缺點を除くことが出來るとて自己の意見を述べられたのである、尙本書は引續き第二編を出すとの事（定價貳拾五錢）

◉慈善財團設立の要旨　興教書院發行

本書は昨年より西本願寺に於て設立に着手し居る佛教慈善財團創興の趣意を門徒同行に對して詳數說明せんため著したるものにて同團の設立が從來の法義引立の爲とか、中宗大師御法會執行の爲とか云へるに比し最も重く且つ大なるを知らするには至極重寶であらう

◉古英雄と宗教　濱口翠村著　文明堂書店發兌

古來大抱負を有し若は大事業を爲せる偉人傑士は必ずや衆に優れて堅忍なる心思、不拔なる精根、能く千艱万難を排して自己の目的に盡したるものに非るなし、而して其結局たるや道の天地有形の外に通ずるを認め思を浮雲變態の中に運はざるなし、否此餘裕ありて初て所謂偉人傑士たるを得可きなり、濱口翠村氏は藤原鎌足、和氣清麿呂より吉田松陰、山岡鐵舟に至る本邦傑人九十餘名につき其佛教を崇奉し若くは儒教に造詣して各々武將たり明相たり得たる事實を史に據り記錄に照して編輯したるものなるが從來人口に膾炙したる者の外、幾多人物對道念の事蹟を聚集したる著者の勞實に多とす可く我儕は近時の著書中最も珍重なるものとして本書を推薦するに躊躇せず、道に志す者以て此書を讀む可く、宗教を說く者は更に此書を讀まざる可らず（定價二十五錢）

◉偉人の成長時代　立野雄峰氏著　文學同志會出版

偉人さ呼ばれ英傑さ稱せらるゝ人物の幼時、生長時代を探求せば必ずや一種異色の生作言動ありたるや知る可き也、本書は熊澤蕃山、白河樂翁、橋本景岳、西鄕南洲、勝海洲五氏の事蹟に付其幼少よりの立志苦學等の事を詳記す少壯學生の一讀すべき書也（定價貳拾貳錢）

◉佛教婦女修身の心得　干河岸貫一氏述　文明堂發賣

近時歐風學問の發達につれて女子の地位大に昂進したると同時に故福澤翁の新女大學等出て女權の伸張を鼓吹するもの益々多くなりたるが著者は此迄佛教にて凡て女子は男子にまさりて罪ふかくあさましきものなりさなしたるに對し、世或は時代思想さ佛教とは柄鑿相容れぬものゝ如く思ふものあらんを恐ひ男女の本分職分權限の異同を親切に說示せられたるものなり（實價貳拾六錢）

◉文藝界　第一卷第一號　本鄕區駒込追分町　日本文藝會發行

土屋龍風さいふ人の主として任に當るが如し初號なれば未だ其特色を認め難しさ雖も記事偏り體裁亦情薄にして前途望みありげなり收むる所、麗水、鏡花、醉茗等の諸作の外、龍風の箱山賦といふ戲曲あり

◉萬籟　第一號　芝今入町　仝社發行

本領に曰く本誌は非文學者の文學見にして非詩人の詩觀なりと、活氣ある雜誌なり、紙數十二頁の小雜誌

◉初聲　第三號　福井縣大野郡勝山村　帝國新詩會發行

地方に於て發行する雜誌としては先づ稱すべきものならんやと明星がぶれしたる風、見ゆれど是によつて地方の文藝趣味を鼓吹するを得ばよことに結構なり其少の困難に屈せず充分奮勵あらんことを望む

◉小天地　第一卷第九號　大阪　同　社

小說にねがひの糸(小栗風葉)さゝ笛(三島霜川)常闇(宮本此君庵)雜錄に夏の東京(黃葉子)麥秋記(山本露葉)民友社の小使(松崎天民)文苑に双春晚(三木天遊)詩人會記(高安月郊)和歌伊藤左千夫、森田義郎等其他懸賞募集短歌俳句及び謡曲、文苑、社會、彙報の諸欄何れも例に依りて賑かなり

◉探涼軍　博文館發行

口繪には相撲國函嶺玉簾瀧及陸前松島花魁島の光澤紙摺其他各地探涼相當地の寫眞數葉記事に江見久保兩文學士外六名の物語類を載せ又當世文士三十餘氏と記者三氏の涼感とを載せたり

◉眞俗二諦辯　村上文學博士述　佛教信徒同盟會發行

本書は文學博士村上精氏が大谷派新門主の命に依り同新門主并東京市内一般の僧侶に向て問題に就て講述したるものゝ筆記なり(定價拾五錢)

## 彙報

●路上諸興行物禁止　警視廳に於ては今回觀物取締規則中第四條を改正し從來神佛祭典緣日等の際路上に於て興行を許せし觀物は市部及品川内藤新宿南千住及千住町等に於ては如何なる慣行あるとも全然禁止するとに改正し路上に關係せず單に神社佛閣の構内に於ての興行は許可する事とし又郡部にして神佛祭典緣日等の際從前の慣行ある場所に於ては除外とし公安若くは風俗を害するの虞ありと認むる興行物は臨時警察官に於て興行を停止し又所轄警察官署に於て興行の許可を取消事あるべしと改正して發布し來る十月一日より施行す

●酒井忠弘男の禮遇停止　貴族院議員男爵酒井忠弘氏は華族令第十六條に依り華族の禮遇を停止せられたるが速に貴族院議員の職を辭し謹愼せり華族中近々禮遇を停止せらるゝもの尙三名ありと

●布哇移民解禁の制限　布哇移民八月一日より解禁一ヶ年多くも三千人位を限とし爾後移民稅を特別に仕立つるとを禁じ一ヶ月三回乃至四回づゝ便船によりて渡航せしむるとゝ爲す由即ち此便船によれば一船に多くも六十人位を搭載するに止まされば一年漸く三千人に達し得る位なりと

●各府縣に於ける稅種別總額　内務省の調査に據れば三十四年度に於る各府縣(沖繩北海道を除く)の地租割總額は二千百十八万九千九百四十三圓七十三錢又營業稅の總額は二百四十一万八千七百三十七圓四十五錢七厘同雜種稅は五百六十万四千八百八十四圓七十一錢三厘戶數割は七百四十万二千五百〇六圓九十一錢五厘家屋稅は十九万六千三十六圓十八錢九厘營業稅附加稅は一万三千二百六十圓九十七錢三厘等なり

さ

●我國圖書館數　最近の調査に係るもの左の如し

| | | | |
|---|---|---|---|
| 東京 | 二 | 大阪 | 一 |
| 京都 | 一 | 愛知 | 一 |
| 靜岡 | 二 | 宮城 | 三 |
| 德島 | 一 | 新潟 | 四 |
| 千葉 | 三 | 三重 | 一 |
| 高知 | 一 | 岐阜 | 一 |
| 廣島 | 一 | 熊本 | 一 |
| 奈良 | 一 | 青森 | 一 |
| 石川 | 一 | 富山 | 一 |
| 茨城 | 一 | 福島 | 三 |

合計三十一箇

●講釋師の恐慌　風俗取締に就て講釋師の讀物に猥褻は勿論盜賊談等は一切ならぬとの沙汰警視廳より其頭取に傳へられしより講釋師百餘名は前月集會を開けり

●人口に關する統計　其筋の調査に係る全國最近の出生、死産、死亡、婚姻、離婚、棄兒の統計は左の如し

| | | | |
|---|---|---|---|
| 出生 | 一、三七一、〇二〇人 | 内 男 | 七〇五、〇一九人 |
| | | 女 | 六六六、〇〇一 |
| 死産 | 一三五、六六六 | 内 男 | 七〇、七四五 |
| | | 女 | 六四、四五八 |
| | | 不詳 | 九六三 |
| 死亡 | 九二六、九七八 | 内 男 | 四七四、一七〇 |
| | | 女 | 四五二、七九九 |
| 結婚 | 二九七、一一七件 | | |
| 離婚 | 六六、四一七件 | | |
| 棄兒 | 八二 | 内 男 | 四二 |
| | | 女 | 四〇 |

右は去る明治卅二年中の事實にして尚同年中の就籍、除籍、國籍、得喪、失踪宣告及取消等に係る事故等の統計は左の如くなり

| | | | |
|---|---|---|---|
| 無籍者就籍 | 四、〇八五 | 内 男 | 一、九七五 |
| | | 女 | 二、一一〇 |
| 國籍取得者 | 二六 | 内 男 | 一〇 |
| | | 女 | 一六 |
| 失踪宣告を取消されたる者 | 二〇 | 内 男 | 一七 |
| | | 女 | 三 |
| 復本籍者除籍 | 一、六二三 | 内 男 | 六九〇 |
| | | 女 | 九三三 |
| 國籍喪失者 | 一四〇 | 内 男 | 六三 |
| | | 女 | 七八 |
| 失踪宣告を受けたる者 | 七四二 | 内 男 | 六二四 |
| | | 女 | 一一八 |

●配離婚の數　（明治三十一年分）

配婚の數

總數　七百九十七萬九千三百八十三組人口千人に對する比例
三百六十四人（即ち百八十二組）

離婚の數

| | |
|---|---|
| 明治二十七年 | 二二八、八七二人 |
| 同　二十八年 | 二二一、六七六 |
| 同　二十九年 | 二三一、三〇八 |
| 同　三十年 | 二四八、一五〇 |
| 同　三十一年 | 一九八、九二八 |
| 五ヶ年平均 | 二二五、七八六 |

新婚の數

| | |
|---|---|
| 明治二十七年 | 七二二、六三八人 |
| 同　二十八年 | 七三一、二六六 |
| 同　二十九年 | 一、〇〇三、五五四 |
| 同　三十年 | 七三〇、四一四 |

同　三十一年　　九四二、五九六
五ヶ年平均　　八二六、〇九四

諸外國の離婚

| 國名 | 結婚一萬に對する離婚の數 | 國名 | 結婚一萬に對する離婚の數 |
|---|---|---|---|
| 加那太 | 四 | 白耳義 | 八一 |
| 英吉利 | 一一 | 瑞典 | 八七 |
| 諾威 | 一六 | 和蘭 | 九八 |
| クヰンスランド | 一八 | ケープ、コロニー | 一〇三 |
| 南濠太剌利 | 二五 | 獨逸 | 一六五 |
| タスマニヤ | 三八 | 佛蘭西 | 一八〇 |
| 澳地利 | 四三 | ニウ、サウス、ウエールス | 一八九 |
| 西濠太剌利 | 四四 | ルーマニヤ | 二〇四 |
| 希臘 | 五〇 | 瑞西 | 四三二 |
| ニユ、ジーランド | 五八 | 北米合衆國 | 六一二 |
| ヴヰクトリヤ | 七一 | | |

●府下在留外人　警視廳最近の取調に據れば管内に在留せる各外國人の男女合計は九百九十五人にして内戸を構へ市内各區に住居するもの六百二十八人同郡部に四十七人又一戸を構へず九十日以上居住するもの市内は三百六十七人郡部に十九人等にして國別は英二百人、佛九十七人、獨八十人、墺匂四人、露十一人、米二百六十七人、清百八十一人、葡一人、伊十四人、丁二人、瑞八人、和八人、西一人等なり

●東京市教育の三問題　東京市教育會調査部會に於て審議したる三案第一不具者教育に關する案は盲人、啞人、痴人の三種學校を創設し先づ盲人啞人の兩學校を設くるを急とし各生徒定員を百名とし十歳以上十五歳未滿の男女を收容し位置は赤坂、麻布、芝、四谷の方面とする事、第二實業學校教員養成所設置案は工商補習學校及び之に類する學校の教員を養成する者にして修業期限は一年六ヶ月とし生徒定員は各五十名一ヶ月金六十錢の授業料を徴集す、第三感化院設置案は小學學齡に相當する怠惰少年を教正感化する者を第一種とし年齡十二歳以上十八歳以下の犯罪少年者を教正感化する者を第二種とし年齡六歳以上十二歳以下の不良少年を感化する者を第三種として區別し遠らず實行せんとす

●第一高等學校と入學者　本年市内各中學校より第一高等學校に入學試驗を受け許可せられたる員數割合左の如し

| 校名 | 受驗者員數 | 入學許可員數 | 割合 |
|---|---|---|---|
| 早稻田 | 三三 | 一七 | 五、〇 |
| 京華 | 二二 | 一一 | 五、〇 |
| 東京第一 | 七四 | 三二 | 四、三 |
| 開成 | 六二 | 二二 | 三、五 |
| 東京第四 | 七六 | 二〇 | 二、六 |
| 高師附屬 | 二五 | 六 | 二、四 |
| 日本 | 四七 | 一一 | 二、三 |
| 獨逸 | 一三〇 | 二八 | 二、二 |
| 郁文 | 七六 | 一七 | 二、二 |
| 麻布 | 一九 | 四 | 二、一 |
| 學習 | 五 | 一 | 二、〇 |
| 大成 | 六五 | 一三 | 二、〇 |

●京都文科大學の新設　京都帝國大學にては、理、工、法、醫の、各分科大學の設備畢緒に就き、今や文科大學を餘せるのみにて、當局者は來年度に於て、之を設置するの計劃をなし、已に文部省に送付せし來年度の豫算中に、之が豫算を編入したり

●北京學生の觀光　客冬日本人中島裁之氏及び清國有志吳汝綸氏等の發起にて日本語學校を北京に創設したるが今回中島氏は同校學

生中の企望者數名を伴ひて觀光の爲め來朝し日々各種學校工場等を巡覽し居れり

●大學談叢　大學創立來今日迄の學士及び卒業生を數ぐれば四千五百七十三人であるが其内現在行政司法の官吏となつて居るものが七百人學校の職員となつて居るものが約八百人其他は民間諸種の業務に從事して居る。然し此の學士及び卒業生の中には只大學許りでなく駒場農學校農林學校司法省法學校も含んで居るのである。現在の學生及び生徒の總數は二千五百八十人で其内最も多數なのは云ふ迄もなく法科大學で八百餘人次は醫科次は工科其次は農科で最少數なのは理科大學で百人に屆かない。比較的多いのは大學院の學生で四百人以上であるさうして其學生の中で一寸眼に着のは法科と農科とに韓人が各一人醫科に印度人が一人工科に二人の印度人と臘尼拉人が一人清國人が四人居る。各府縣中學生の最も多數なのは云ふ迄もなく東京府である次は山口福岡新潟の三縣で何れも百人以上、少數なのは群馬奈良滋賀山梨岩手鳥取香川宮崎の諸縣で何れも三十名に充たないのである沖繩縣でさへ十一名を出して居るのである(東朝)

●阿嘉貫主　北京雍和宮總長、全蒙古喇嘛教貫主阿嘉呼圖克圖は隨員紫色爾卟木索氏外六名と共に來朝す前月末歸國

●世界各國君主幷に大統領の宗教　米國政府にて發兌する新聞『北亞米利加』は各國君主の信仰に關する論文を草し現在の重なる君主の信ずる宗教を記せり。即ち英國皇帝はエピスコパル派に屬し。獨逸皇帝はルーテル派に屬して自ら說教せらるゝことあり。和蘭女王は神學教師に就きて殊に聖書を研究せられたることあり。和蘭レフォームド派に屬す。丁抹王はルーテル派にして。瑞典も亦同一派なり。瑞西大統領は國民の多數が舊教なるに反して新教徒なり。墺國皇帝は熱心なる舊徒教にして自ら宗教の儀式に臨みて老人の足を洗はるゝことあり。葡萄牙王は寧ろ不熱心なる舊教徒なり。此他舊教徒の君主には佛國大統領(其信仰は改進的なり)、パウアリア攝政公ウルテムベルグ王、白耳義王、伊太利王あり、西半球加奈陀の大守は新教徒、加奈陀の總理大臣は舊教徒、米國の大統領たりし人は總て新教徒、メキシコ大統領、中央及び南米諸國の大統領は總て舊教徒なり。希臘教の君主には露國皇帝、希臘國王、ルーマニア王、セルウ非ア王あり。アビシニア王は新教派等の異教と稱する別派の基督教を奉す、基督教を信ぜざる國君中には土耳古帝埃及王、波斯王モロッコ王等あり。而して唯一の佛教を信ずる國君は暹羅王なり。王は其國の風習として曾て自ら僧侶さなられたることありと。

●阿吽婆羅摩(アウンバラマ)　阿吽波羅摩とは新たに日本首府の東京に顯はれたる妖教にして北海道の豪商山縣雄三郎氏所有の行衛不明の船を相し遂に其所在を明かにしたるを以て其謝禮として金三萬圓を寄附し、其金を以て目白に宏壯なる邸宅を建てたり、該教の所依經は金剛頂經類疏にして信者の重なる者は宮内大臣の田中子爵夫人を始めさし相場師並に船舶所有者等なりと

●新佛教婦人傳教團　救世教一派の新佛教は基督大學傳道の擧あるを聞くや新佛教婦人傳教團なるものを組織し東京都下の各所に路傍演說、トラクトの配布等を實行しつゝあり其配布者路傍演者は悉く婦人而して青黃赤白黑の五色の旗を押樹て中に新佛教救世教婦人傳教團の文字を顯はす

●ニコライ司教　駿河臺のニコライ氏は千八百六十年露國の首府聖彼得堡を出發し一度其故郷に歸り西比利亞を經て翌千八百六十一年六月二日函館に上陸したり即ち其始めて日本の土を踏みしより玆に滿四十年に相當するを以て聖教會は過日駿河臺の聖教學校に於て其祝賀會を催したり

織田得能師著

## 國文學十二種 佛語解釋

全一冊紙數六百餘頁
總クロース製本金文字入
正價金壹圓五拾錢　郵稅十四錢

國文と佛敎とは親密なる關係あるにも係はらず古來の註釋者往々之を忽にし適之を註するも誤謬極めて多く爲に國文學の眞相を湮沒する憾尠からず織田得能師夙に玆に感あり國文書十二種に就き逐條佛語を解釋し出典を明にし別に總索引を附たり故に國文中の主要なる佛語は殆ど網羅せられざるなく國文學註釋の上に一段の光明を與ふる者と云べし

發行所　東京市神田西紅梅町十番地　光融館
發賣所　東京市本郷四丁目五番地　文明堂

---

新刊廣告

齋藤唯信著

## 淨土 三經之大綱

定價廿五錢　郵稅四錢

我國佛敎の宗義甚だ多しと雖も其中最も盛なるものは淨土の一敎に過ぐるなし而して其淨土敎は何に由りて興き來れるやといへば大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部の經典に基く然るに斯三部の經典に就て古來組織的に始終を一貫して論述したるものなし玆に齋藤學師之れを慨するや久し本年夏眞宗大谷派の有志諸氏相謀り、關八州講習會を開設し師を聘して專任講師とするにより師は先づ以て淨土敎の由りて興る本源を知らせんが爲めに三經を一貫して組織的に之を講述し大に淨土敎の主旨を明かにせられたり特に大乘敎結集の論議の如きは前古未發、學師獨得の妙說とも謂ふべきなり依て苟も淨敎に志するもの僧と俗を問はず之を繙かば其益する所蓋し少なからざるべし

發行所　東京神田駿河臺西紅梅町十番地　光融館